

弘 道

第935号

銷夏特集 私 の 趣 味

山の書物の楽しみ……………小 谷 隆 一
花に想う……………大 熊 章 一
絃のしらべ……………神 戸 光 子
趣味あれこれ……………杉 浦 昌 也
小泉信三，エドワード・グレー，
そして江口書店……………多 田 建 次
趣味について……………入 江 徳 郎
芸名花柳国一弥……………木 下 一 雄
文学散歩……………古 川 清 彦

「読書」随想……………東 平 久 雄
下手の横好き「篆刻」……………野 口 元
「わが趣味」随想……………荒 木 敏 鎌
本職即趣味、即道楽……………飯 塚 一 雄
「読書」と「百人一首かるた」
……………林 田 武 雄
旅は人の心を拓く……………寺 崎 隆 治
道を楽しむ……………加 藤 嘉 三 郎

昭和63. 7 ~ 8 月号

東 京
日 本 弘 道 会

飛雨瀉岩洞
 深淵龍猶眠
 一嘘破雲霧
 天地忽廓然

飛雨瀉岩洞
 深淵龍猶眠

(読み下し)

飛雨^{ガンビ}瀉^{ソッ}岩洞ニ瀉ギ

深淵ニ龍ナオ眠ル

一嘘スレバ雲霧ヲ破リ

天地忽チ廓然

舊作ヲ録ス 泊翁道人

(大意)

風まじりの雨がいわおに
 そそぎ、深淵に龍が眠り
 つづけている。しかしひ
 とたび息をすれば雲霧を
 吹き破り、天地は忽ちか
 らつとなる。

(解題 古川哲史)

日本弘道会綱領 (昭五一・一〇・三〇)

甲 号 (個人道德)

皇室を敬愛すること、国法を守ること
信教は自由なること、迷信は排除すること
思考を合理的にすること、情操を美しくすること
学問を勉めること、職務を励むこと
教養を豊かにすること、見識を養うこと
財物を貪らないこと、金銭に清廉なること
家庭の訓育を重んずること、近親相親しむこと
一善一徳を積むこと、非理非行に屈しないこと
健康に留意すること、天寿を期すること
信義を以て交わること、誠を以て身を貫くこと

乙 号 (社会道德)

世界の形勢を察すること、国家人類の将来をおもひにかるること
政治の道義性を高揚すること、経済の倫理性を強調すること
自然の美と恩沢を尊重すること、資源の保存と開発を図ること
教育の適正を期すること、道義の一般的関心を促すこと
報道言論の公正を求めること、社会悪に対し世論を高めること

会祖西村茂樹先生小伝



日本弘道会の会祖・西村

茂樹先生は、明治六年森有礼・福沢諭吉・西周・加藤弘之・中村正直らと相図り「明六社」を設立。『明六雑誌』を発行して、開化思想、自由思想の啓蒙運動を精力的に展開いたしました。

その後明治九年三月には、国民の道義向上を目指し、さらに国家社会の基礎を強固にするための道徳教化団体として、「東京修身学社」を創設しました。これが現在の「日本弘道会」の前身であります。明治十九年には『日本道徳論』を公にして、当時、西欧の模倣と追従に終始していた社会の風潮と政治の在り方を厳しく批判し、日本道徳の確立を訴えました。

西村茂樹先生は、明治時代における卓越した道徳学者であり、同時に偉大な国民道徳の実践家でもあります。明治二十六年、宮中顧問官を除くすべての官職を辞して野に下り、全国を行脚して社会道徳の高揚に一身を捧げ、今日の生涯教育の先駆的役割を果たされました。

目次

第九三五号(昭和六十三年七・八月号)

表紙裏

(泊翁先生訓)

教育の良否

【巻頭の言葉】

偶感二つ

古川哲史

(5)

(4)

——* * *

鎖夏特集 私の趣味

山の書物の楽しみ

花に想う

絃のしらべ

趣味あれこれ

小泉信三、エドワード・グレイ、そして江口書店

趣味について

芸名花柳国一弥

文学散歩

「読書」随想

下手の横好き「篆刻」

「わが趣味」随想

本職即趣味、即道楽

「読書」と「百人一首かるた」

旅は人の心を拓く

道を楽しむ

小谷隆一 (8)
大熊光一 (12)
神戶昌也 (16)
杉浦建次 (17)
多田一郎 (20)
入江徳雄 (25)
木下清彦 (28)
古川久雄 (35)
東平元 (40)
野口敏鎌 (42)
飯塚雄 (46)
林田雄 (50)
寺崎隆治 (53)
加藤嘉三郎 (58)

【随想】

「在宅老人ケア」の問題について……………

荒井元吉……………63

聖徳太子から福沢諭吉へ……………

新美忠之……………64

〈北斗星〉

カネと政治家……………

入江徳郎……………70

〈熟年からの健康〉

閑節リウマチ……………

杉浦昌也……………71

【泊翁百話】

泊翁書簡(十)

菅治兵衛宛二十通の内の九通(その1)……………

古川哲史……………72

弘道俳壇……………

篠塚しげる選……………79

支会だより(平川支会、佐倉支会、干潟町支会)……………

(80)

告

(一)寄付者芳名、会費領収報告書、新入会員芳名)……………

(84)

「言葉のひろば」(藤田三郎、市原正夫、鈴木正一、島根宏明、高倉弘、岩崎晶)……………

(87)

編集後記

訓 生 翁 泊

教 育 の 良 否

教育を盛んにするのは、よいことである。しかし、教育には良いものと悪いものとの区別がある。良い教育は盛んにしなくてはならないが、悪い教育は盛んにしてはならない。世人はまんざんと教育を口にするだけで、その善悪を区別しないものが多い。

教育には目的と方法の二つがあり、その間に区別がある。目的の良い教育の一つは、徳育を主として、忠勇節義の人間を養成することである。その二は、身体強健で、のびのびとした才能のある人間を育てることである。

方法の良い教育は、その一つは費用が少なく、成果の多いもの。その二は政府の関与が程よいもの。その三は、教育の法が国民の貧富の程度と職業の状態によくマッチするものがこれである。

良くない教育は、その目的と方法がふたつながら右の反対である。現在、政府がじゅうぶんに教育に干渉するので、教育ははなはだ盛んになっているように見えるが、果たして良い教育といえるかどうか疑わしいところがある。また、多くの中には良くない教育もないとはいいたい。自分の国を大切だと思ふ者は、良い悪いの区別をはっきりさせて、国のために良くない教育をしてはならぬ。良くない教育でも、ある点では少しの利益がないではない。ただ、それにかけた金銭と時日が、その利益にくらべて損失がまざるなら、良い教育とはいえない。また、教育に因って人心を浮薄邪曲におとし入れ、あるいは職業に怠惰ならしめるようであつては、最悪の教育というほかはない。

（泊翁居言第一冊（廿二）「教育の良否」の全文）

【巻頭の言葉】

偶 感 二 つ

古 川 哲 史

今日は午前中、家の付近にある税務大学校へ講義に行った。四月と五月に十二―十五時間の講義をするのが、毎年の恒例になっている。

この大学の講師控室で、いつもD大学のK教授と一緒にいる。K教授は、D大学では法学部の所属で、最近まで法学部長と理事を兼ねていた。私の郷里の後輩でもあるので、気安く雑談を交わすが、最近新聞で話題となっているD大学における学長および学長側理事と理事長および理事長側理事との対立抗争が話題となった。K君は教授側であるから、むしろ学長擁護派である。ところが、学長が家永教科書裁判の第一審判決で家永側の主張を認め、文部省をあわてさせた問題は痛快なことで、あったことを、学長選任の当時は知らなかったという。文部省をあわてさせたのは痛快なことで、その点では学長の勇断を評価するのにやぶさかでないが、学長選出の際に法学部の有力教授が学長の前歴に無知であったというのには、おどろくほかはない。

そういえば、私の関係していたA大学でも同様なことがあった。数年前、法学部創設二十周年の記念行事にM氏の特別講演を企画したのである。法学部の主張によれば、M氏は最高裁判事で、司法官の長老であるからというふれこみであった。ところが事実は最高裁判事ではなく、司法官の長老かも知れないが、進歩的発言で有名な人であった。その点を私が指摘したので、M氏の特別講演

はとりやめになったが、どの大学でも法学部教授会はおう揚というか、細かな配慮が足りないようである。

こんなことをいうと、物議をかもしかもしれないし、「弘道」誌の巻頭言としてふさわしくないと思う人もあるかも知れない。しかし、毒にもクスリにもならない抽象論をするのが巻頭言ではないと思うので、遠慮のない感想を述べてみた。

今日は午前中の講義を済ませたあと、神宮球場に行つて東都大学の野球リーグ戦を見た。神宮球場では土曜、日曜は六大学リーグがこれを使用し、火曜から金曜を東都大学リーグが使用する割りふりになっている。しかし、雨天や引分けで六大学の試合が土曜から月曜までのあいだに決着がつかないと、遠慮なく火曜から金曜までの東都大学リーグの予定日に割りこんでくる。それが公然と認められているのである。

そういう場合は、東都大学リーグの試合はどうなるか。神宮の第二球場を使用するか、次週（あるいはその後）まで延期して神宮球場の空くのを待つほかはない。つまり、神宮球場を使用する権利はつねに六大学が優先し、東都大学は六大学の後塵を拝するほかはない仕組みになっているのである。

ところが今や、有名度はとも角、実力では東都がまさるといふのが一般的評価になっている。事実、プロ野球で活躍する有名選手は六大学出身より東都大学出身のほうが遙かに多い。とすれば、神宮球場の使用権も、現在のような六大学優先というのは、公平を欠くのではないか。現在注目のマツとなつてゐる税制改革でも、公平ということが最大の課題のようである。そういう「公平」尊重の時代に、大学野球では六大学のみが従来の権利にしがみつくのは、いささか横暴ではなからうか。

（本会理事・東京大学名誉教授 国際武道大学名誉教授）

私の趣味

本号は銷夏号として、誰でもが持っていると思われる「趣味」を取り上げることになりました。

人によっては、「道楽だよ」「暇潰しなんだ」と言うかも知れませんが、たとえ僅かな時間でも、心を集中することができる対象のある人は素晴らしいと思います。趣味は人の心をふくらませ、人間を大きくしていくように思えます。

そこで今回は、多くの会員からそれぞれお持ちになっている趣味や余暇に取り組んだいろいろなご経験などについてご披露いただきました。

山の書物の楽しみ

小 谷 隆 一

私が山登りを始めたのは、旧制中学三年生のときであった。その学校に、森本次男という物理の先生がおられ、山に関する著作も多く、当時登山界において有名な方であったが、先生の薫陶をうけて次第に山の魅力のとりこになってしまった。

そして、山登りに至便な場所にあるということで、旧制の松本高等学校にすすみ、以来高校・大学とも山岳部に籍をおいて登山にいそむようになった。卒業後もスイス・アルプスやヒマラヤ・パミールの高峰などを目指し、今もって山と縁がきれない始末である。

山登りをつづけるかたわら、いつの頃からか山の書物に興味をもち収集するようになった。山の文学者としても高名だった恩師森本先生の影響をうけたためでもあった。その頃日本人として初めてヒマラヤへ遠征した記録「ナンダ・コット登攀」や塚本閻治氏の写真集「日本の山々」などを入手して大切に保存していた。また若くして岩山に散ったフランスの登山家ジャン・コストの「アルピニストの

心」を愛読して尖鋭的な登攀に情熱をもやし、高須茂著の「登山技術」を教本にして山登りに精進したものだ。

山の本を愛読し、買い求めることから、やがて古書店を訪れるようになった。山の古典といわれるのは、明治後半期に出版された小島烏水氏の名著「日本アルプス」を初めとする一連の書物であるが、それらの本を古書店の本棚で見つけたときの喜びは、今もって忘れられず克明に記憶している。しかし、中学生・高校生の身では小遣いに限度があり、求める書物の冊数もそれ程ふえてはいかない。ある時、父が古本屋で見つけたよと言って、小島烏水の著作の一冊を買ってきてくれたときには、嬉しくて一夜枕元に置いて眠ったほどだった。

第二次大戦以前は一時期、昭和十年すぎ頃に登山がさかんに行なわれた時代があり、その頃に山岳図書を専門にする出版社が二、三あらわれ、日本アルプス・ヨーロッパアルプスやヒマラヤあるいは北極・南極に関する書物が数多く刊行されるようになった。当時出版され、現在でも貴重

な山岳書としてのこっている本も少なくない。

しかし、日本において登山に関する書物が大量に発刊されるようになったのは、大戦後数年を経た昭和三十年頃からである。昭和二十八年に、未踏峰であった世界の最高峰であるエベレストが登頂され、日本隊が初めて八千米をこえるマナスルに初登攀したのは昭和三十一年であった。その前後からわが国において、はげしい登山ブームがおこったのである。山に登る若者の人口は急激に増加し、山における悲惨な遭難事故が頻発したのもこの頃のことである。

このようなブームを当てこんで発売される山岳書が増加されるのも当然のことであり、町の本屋さんには多くの山の本がならぶようになった。山の専門でない出版会社も、競って山に関する翻訳書・全集などを刊行し、登山ブームに拍車をかけるような状態であった。

自然と私の集書心もつり、発売される山の本は欠かさずに入手するようにつとめた。しかし当時、すでに学窓をはなれて社会人になっていたが、まだ現役気分登山登りをつづけており、なんといっても登山することが第一、山の本を集めることは第二、といった優先順位であって、山岳書の収集にそれほど身が入らなかつた。まだ私も若く、山登りの現役という自覚の強い時代であった。

私が本格的に山の書物を集めるようになったのは、昭和

四十九年からであった。その年の六月、ふとした奇縁である山岳書のコレクションを譲りうけることができた。その蔵書は、丸善の役員をつとめておられた小林義正氏旧蔵のものであり、同氏には「山と書物」という名著もあってコレクションは当時日本で一、二を競うものといわれていた。コレクションの冊数は、雑誌類を入れると五千冊をこえ、段ボール箱一〇〇個に納められて私の家へ運びこまれた。長期間同じ状態で保管されていたとみえ、埃にまみれ黴くさく、梅雨どきであつただけに家中たちまち古本特有の湿気た臭いでおおわれてしまった。

段ボール箱から本をとり出し、埃をはらって整理する作業も大へんだったが、一冊ずつ何が出てくるかと期待して手にする楽しみもまた格別であつた。捜し求めている未だ入手できなかった書物、書名だけ聞いているが自分にとって幻としか思えなかつた希覯本などを、実際に自分の手でもつことの出来た喜びは、まったく万金にかえられないものであつた。コレクターとして、一生に何度も味えるものではないが、最高に贅沢な愉悅と感激とを経験した数日間であつた。

丁度この年は私にとって満五十歳を迎えるときであつて、体力の衰えも感じられ、いつまでも山登りに熱中するべきでない、という気分にもなつていた。そしてこのコレクションの入手を機会に、私の趣味は、山の本第一、山登り第二、

という状況に逆転することになってしまった。

私の家に、ところ狭しとばかりに運びこまれた「山のよ
うな山の本」を眺めて、私が一番感じたのは、これらの貴
重な山の書物を大切に保管しなければならぬ、というこ
とだった。まず、一冊ずつ手にとって扉と目次をひらき、
整理のためのカードを作ること。暑い夏から年末にかけて
懸命に作業にとりくみ、やっと五十枚のカードの記入を終
った。

たまたま庭に別棟の倉庫があるのでその二階にすべての
書物を搬入した。当初は棚に行儀よくならべる、というよ
うな空間の余裕はさらさらなく、横に積んで押しこむとい
った有様であった。数年を経てから手動ではあるが移動棚
を設置し、倉庫も建て直してようやく一人前の書庫らしく
なった。

現在は約六千冊の書物が納められているが、ほぼ整然と
ならぶようになっていた。すべての本が書棚に整理された
とき、本の背中が全部見える、と大きな喜びを感じたもの
だった。本の冊数がふえるに従って、横ずみや二重に奥の
方へ押しこんだりしていたので、こうして一覧して書名が
見える、という状況は長年にわたる願望であった。しかし
その行儀の良さも、今はいつまで続くか危なくなってきた
いる。

次は良い状態に保存することである。コレクションの中

には、五百冊余の和とじ本が含まれている。既に相当虫に
喰われているものもあるが、もうこれ以上紙魚に荒らされ
てはいけない。初秋のさわやかな日に、部屋中和本をひろ
げて虫干しをした。破れなどの激しい書物は和紙を用いて
裏打ちをし、虫干しは毎年欠かさないで行っている。

火災の心配もしなければならぬ。倉庫を建てたときは、
隣家に面するところには窓をつくらず、鉄筋防火構造にし
た。それでも心配で特別貴重な書物数冊は、耐火金庫の中
にしまふことにしている。

コレクションを入手したときには、私自身が中学生頃か
ら集めていた山の本も約二千冊になっていた。もともと一
冊ずつの書物の貴重さから比べると比較にならないほど私
の方が劣っていたが、冊数だけは相当なものであった。そ
の大部分は当然コレクションと重複していたので、比べて
保存度の良い方を残し、あとは処分した。

こうして一応の整理は終わったが、資料を調査してみると、
立派なコレクションとはいえず、やはり欠けている山の書物
も少なくないことが判った。山岳書のコレクションを所持
するのであれば、すべての山に関する書物を網羅してより
完全なものにしなければならぬ。いくつかの「山岳書一
覧表」という資料を参考にして、未だコレクションにふく
まれていない書物のカードを作成した。そしてこれらの書

を求めて古書店へ足しげく通うようになった。

山岳書を専門に扱っている古書店もある。東京神田の悠久堂・京都寺町の大観堂などがそれであって、精力的に通うとともに、必要な書名を連絡して捜してもらった。捜し求めれば出てくるものであって、数年の努力によって私のコレクションはまた一廻り大きなものとなった。

譲りうけた時には、約五〇〇冊の洋書があったが、こちらの方の補充にもつとめた。幸い、年に二、三度ヨーロッパへ出張する機会があるので、ロンドンの山岳書を扱っている有名な店へ立寄り、山の書物を買ってくることにしている。時には送られて来たカタログを元に、国際電話で注文をしたこともあった。洋書の山の本まで完全な収集を目ざすと、これは不可能に近いのであきらめているが、戦前に発行された主要な書物は手元に揃っているのではないかと思っている。

京都の古書店のショウウインドウで、捜し求めている書物を通りがかりに目にして、小踊りして求めたことがあった。親しい山の友人が、不足している本を持参して頂戴したこともあった。山の本は山の本を呼ぶ、ということかも知れないが、外国人の友達からスイス・アルプスの本などを頂くことも再三であり、海外の友人仲間にもよく知れわたるようになった。

このようにして私のコレクションは少しずつ完全なもの

に近づいてきた。現在では、洋書八〇〇冊・和とじ本六〇〇冊をふくめて約七〇〇〇冊の書物が棚にならんでいる。日本で出版された山に関する書物は、ほぼ揃ったと思っている。そして私の古書店めぐりも、ずっと回数が減ってきた。

古書集めのほかに、新しく刊行される山の本も一方で購入していかなければならない。京都の本屋さんで海南堂という店が新刊の山の本のコーナーをつくっており、この店に依頼して保管してもらい、二ヵ月に一度ばかり訪れて二、三〇冊たまった本を持ち帰るようにしている。

数千冊に及ぶ書物に残らず目を通すことは一生かけても不可能である。しかし山の本も繰らないで収集するだけというのはその道に外れている。書物は読まなければならぬ。読書し、本を愛し、そして本を収集するのがほんとのコレクターであると思っている。山の先輩で、自分はいくつの山の本を蔵しているが、蔵書家でもなければ愛書家でもない、読書家である、と言いきって憚らなかつた方の言葉が忘れられない。

私も集書の努力はとくに峠を越しており、次第に読書の方に力を傾けるようになってきた。一つの山の登山史を研究するにしても、一人の登山家の歩んだ道を調査するにしても、資料にはこと欠かない。山の書物を愛読しながら、

いくつかの事がらを調べるなど、楽しみは山ほど残っている。

激しい登山をする年齢はもう過ぎてしまった。健康のために山歩きといった登山は続けなければならないと考えて

いるが、同じ山登りでも足で歩く登山でなく読む登山にしたいと思っている。そしてそのための材料が手元に充分すぎるほどそろっていることに限りない幸せを感じている。

(本会監事・イセト紙工協会長)

花に想う

大 熊 章 一

みるとはなしに眺めていた庭の花を、私はある時を契機にして、命あるもの、命継ぐものと心を寄せるようになった。

人との出逢い、人との別れに四季折々の花がある。我家の小さな庭の花を愛でながら、昔を回顧してみようと思う。

—— 柴ざくら ——

今から二十数年前、私は教育の仕事にあげ暮れていた。率先垂範をモットーに、まさに学校の先頭に立つように心がけていた。

教育の仕事は、過去から現在、未来とそれぞれの縁を引き摺って歩いていく仕事である。一つの問題を説明しよう

とさぐり始めたり、一つの事業を進めようと対策を練ると芋蔓式に諸々絡まってくる。

自分の無力に苛立ち、心高ぶる帰途の電車でも自問自答を繰り返しがついてみると我家に帰ってきていたということもよくあった。

そんな時、父が移植ごてを持って土弄りしていた。老後の暇潰しぐらいにみていたが、やがて病に倒れる。それから毎夜、父を見舞う事三ヵ月、話らしい話もできず、父は逝った。

その父を見送る日、父が自らの手で植え揃えた柴ざくらが見事に咲いていたのである。清楚にしかも限りなく華やかに。

土弄りしていた、しゃがみこんだ後姿がふり払ってもふり払っても蘇ってきてしかたがなかった。自分で自分の最後を飾るつもりはなかったろうが、小花一つ／＼言葉少ない父の語りに思えたものである。

父を想う心は花を愛おしむ心と化していく。二、三年後万葉集に次の歌があるのを知って驚いた。

秋さらば見つつ偲へと妹が植えし

には石竹花咲きにけるかも

(大伴家持)

——鳳仙花——

次の年から、夏になると鳳仙花が場所狭しと咲くようになった。墓参りの迎え花と決めて母が植えはじめたものがある。

茎のあたりに塊となつて咲くので葉をかきわけてみる。上の花卉を二、三枚ずつ忘れてきたように垂れて色づく。光に対抗するように逞しい。逞しいといえ、実も然り。熟すると勢いよく弾けるところがおもしろく、時々孫と指で摘まみ飛ばしてみた。

今年も鳳仙花が咲く頃、母は九十四歳である。

——夾竹桃——

夏の花は陽に立ち向つて熱い。

高校野球の熱戦に手を打つ頃、暑さに負けじと咲き誇る夾竹桃は我庭の一番奥に植えた。なんでもこの樹液には毒があり、西南戦争で野外の食事に箸代りに使った時、食中毒を起こしたとき。

しかし、千葉には昔から夾竹桃が多く、千葉市の市花に指定されている程である。

少年の頃の野球練習の辛さと懐しさと呼び起こさせてくれる花である。

私の恩師の野球練習は、勝つことより堪えることを、選抜より仲間意識を叩きこむことが主たる教育であつた。

鉢巻きをして試合に向く駅の傍らに揺れるように咲いていた夾竹桃は、私にとって少年時代回顧の花である。

——金木犀——

残暑が厳しい頃、議会が始まる。教育問題に寄せる熱っぽい質問を浴びる。子どもの将来、父母の願い、教師の資質向上、時代の流れを判断し、一刀を下さねばならぬ事もある。

後悔はすまい。信じて第一義の道を歩まねばならぬと意を新たにして議場の壇上から天を仰ぐ。

議会が終わると暑さ涼しさが交差し、私の目に映らぬ程静かに、夏から秋に移る。

秋立つと目にはさやかに見えねども

風の音にぞ驚かれぬる

(古今集)

季節は決してみえるものではなく、感じるものなのであらう。

住宅街を歩くと、家々の金木犀の香りが風に流れ川を作る。その川を泳ぐようにして私は家路に向かう。夕闇に我家の門灯だけが私の帰りを気づかっている。

秋風の忍ににたる雨垂れの

石打つ音に今宵淋しき

青春多感な頃に作った歌が幾年過ぎた今も尚同じ心を味わう。秋、有情。

——山茶花——

冬は山茶花。それも夜がいい。庭園灯に小雨程の雪が見え隠れする。凍てつく寒さの中に優しく咲ける花である。寛の音が冴えると私の肌が引き締まる。この緊張感、不思議と戦場での体験とだぶってくる一瞬でもある。

弓兵団の私の速射砲部隊は雨霰といつてよい程弾丸がくる。目にみえるわけではなく、音で判断するのである。この音をきくとブルブルと体が震え、恥しい話であるが、緊張と恐さで一杯になるのである。人に覚られまいと虚勢を張って命がけの戦いであった。インパール作戦に参加し、今こうしてある自分を勿体ないと感謝する毎日である。

——梅——

梅を愛でる歌は実に多い。それだけ色褪せるかと思うとそうではない。一首ごとに新鮮ではっとさせられる。

寒さにも嫌気がさしてもうそろ／＼春になってくれと欲する頃、家の誰かが梅の蕾を知らせて来る。この時に限って誰かが覗きにいくのが愉快である。はおって置かれた庭は脱ぎ捨てられた履物など雑然としている。そんな中で一番先に春を予感させるのが梅のしかも蕾である。寒さは増すばかりの二月であるが、心で春近しの解放感がある。梅を愛でる歌が昔から多い由縁の一つであらう。

春されば散らまく惜しき梅の花

暫し咲かず含みてがも

(万葉集)

この歌は、咲けば散ってしまうだけであるから暫く蕾のままでも楽しませてくれという心である。

あるいは、全く逆に散る梅を愛でる歌も味がある。

わが園に梅の花散るひさかたの

天より雪の流れ来るかも

(大伴旅人)

この頃になると山里にしかないはずの鶯が時折やってくる。澄んだ声で何かを告げている。朝風呂の中でこの声を聴くと湯の音も立てまいとじっとして、少しでも長く我

庭にとどまってほしいと願ったりしてしまふ。

何時しかもこの夜の明けむ鶯の

木伝ひ散らす梅の花見む

(万葉集)

残念ながら鶯が木伝ひして散らす程の梅はないが、一枝の梅と鶯の声で歌の世界を想像してみるのも楽しい。

——連翹^{れんぎょう}——

同じ釜の飯を食べた先輩や後輩が職を退く節目の惜別の情は深い。春先に黄色の花を惜しげなく咲かせる連翹はその別れを明るくしてくれる。

後輩に指導をし、自らも戒めてきた事に、「先輩を追いかすぐらい研究実践に励め。しかし、長幼の序を忘れず出逢った人への礼儀を重んぜよ。」というのがある。

一人の力はたかが知れている。人との出逢いを大切にし、それをばねにして自分を向上させる事に心がけるべきである。

一輪の花美しければ群れた花も美しい。

——松——

少年、青年時代は病と戦い、戦場からは九死に一生を得て帰ってきた事などをふり返ると自分の一生には意志だけではどうしようもない運が作用していると思う。その運は

誰と出逢うかという事にも通じる。

敵にすっかり包囲されて手榴弾の安全栓を抜いて自爆する寸前の敗走、敗走を重ねた生活の中で私が掴んだものは

・何をするにも自分の体力が頼りである

・助け合いの精神、戦友の心のつながりの尊さ

・なるようにしかないという篤度胸

・あわてず情判断をする

・最後まで最善をつくす

等である。悪戦苦闘のビルマ戦線での訓えである。

松は雄々しい。これといった理由があるわけではないのに、門かぶりの松をみるとふと、戦場を想い、感慨にふける。

——竹——

我が家の門を入ると、左に小さな竹がある。「ささのはさらさら、のきばにゆれる……。」印旛沼の近くで育った私は、周辺の野原で友達と日が暮れるまで遊んだ。泥鰌とりに行った帰り、小川で笹舟を流し競争をした。

そんなことに一日中夢中になったことが懐しい。

竹はいつも青々として、風に強く、寒さにも雪にも強い。

松竹梅が揃って「めでたい」と年老いた母は喜んでゐる。

(本会特別会員・千葉県八千代市教育委員会教育長)

絃いとのしらべ

神 戸 光 子

暑い陽さしも、漸く傾いて参りました。

風鈴の音の、一つ二つを耳にとめ乍ら、夏の曲は、やはり涼しげなのが多いなどと、とりとめもなく思い浮べました。

音曲と申せば、祖父（編者注・会祖西村茂樹先生）は謡曲をたしなみました由で、母（編者注・会祖の次女澄江さん）はお謡とお仕舞のほか、お箏などを手さびとしておりました。尚、私達にも習得させましたのは、この道が心にうるおいをもたらず故、とのことで御座います。

兄、姉はそれ／＼ピアノを、私はお箏をと云うことになりましたして、宮城道雄師直門としてお稽古を始めましたのは、確か十四の春と覚えております。箏曲は、私に合っておりました為か、別に飽きることもなく、学校の合い間乍ら五年六年と続け、八年目には私も何時の間にか、奥許しを頂く者の一人となっております。

ご承知の通り、宮城師の新曲は数多く御座いますが、世に知られる「春の海」をはじめとして、難曲と云われるいくつかのものについては、或る曲は大川を下る舟の上で、

しぶきを浴び乍ら聞く急流のひびきを、或る曲は春の陽を映り返す瀬戸の内海の汀に、太古から寄せては返すのびやかな波の音を、又ある曲は梢から散り落ちて来た葉が、風に追われて、尚地面を小さくまわったりしている、かすかな音を、又ある曲は深まる秋のくさむらにすだく虫の音の心ありげなのを、それ／＼表したものと聞き及んでおりますが、いずれも、拍子がごく早くてこまかく、思いがけない指遣いも多くて、これを習い始めてからも中々手に負えるものでは御座いませんでした。

少しでもより良くと、弾く箏爪の傾け方一つにも工夫をこらし、又、もしよそに聞いたら嘸迷惑かと思われまう程に幾たびも繰返す反復練習を重ね、ごく僅かずつの向上のきざしを励みとして、指の痛みも忘れて、又次の段階へとわけ入って参りました。

一つの事を達成するのには、努力あるのみと云う人生の真理は、心得てはおりましたものの、かほど迄に厳しいものとは、この道に没入してはじめてその一端ながら会得す

ることが出来、又その場に及んでは、実力と経験の裏打ちが何よりも心強いと云うことや、次の前進に備えての低迷時期もあると云うことなどを或る程度この道をとおして体得し得ましたことは、一つの喜びでも御座いました。

この道は、ひたむきに打込めるものとして心のよりどころの一つともなり、又とかく儘ならぬ世に在る身にとりましては、常に慰めともなり、このように、音曲と申すものの心にもたらず、やすらぎと支えは、誠に限りないので御座います。

今も尚、心のおもむく儘にお筆に向い、時の経つのを忘

趣味あれこれ

杉 浦 昌 也

自分の趣味は何かと聞かれることがあります、^{「読書、ゴルフ、音楽」}などと答えておけば差し障りのない所だと思えます。しかしそれ等にとどの位の時間をかけ、どの位楽しみ、どの位続いているのかと考えると、いい加減なものもあるといわざるをえません。

れては、窓の障子の日影の移ろいの早さに驚き、又音曲をたしなむ方がたのつどいの中にあつて、心楽しいひとときを過すことも多い平日頃で御座います。

夕涼の風の心地良さに進めました筆も、いつしかせまる宵やみの気配に、一先ず措くことに致しました。

読み返すまでもなく、このようなよしなし言ばかりを…と、庭すみに開きかけた月見草の花などを見遣り乍ら、ためらいの思いを深めております。

(本会特別会員)

*神戸光子女史は会祖西村茂樹先生のお孫様であります。

一 趣味とは

趣味とは何かと難しく考えることはないと思いますが、余暇において楽しむことの出来る遊びとか、暇潰しとかであるといえましょう。これらからみると趣味とは暇な時にやるもの、楽しいものという一面がうかがえます。

趣味の純粹さは好きだということではないでしょうか。

したがって身体に良いからとか教養のためとかで無理してやろうというものには動機（趣味としての）が純粹ではない様に思いますし、ましてやそのことにより報酬を得るものも純粹さを失っています。しかし最初はいいやでもそのうちにその良さが分かり、好きになってしまえば立派な趣味といえます。

二 趣味の種類

趣味には大変な種類がありますが、ちょっと数えても娯楽、スポーツ、鑑賞、観劇、創作、読書、稽古ごとなどが浮かびます。娯楽には碁、将棋、麻雀など、スポーツにはテニス、ゴルフ、ジョギング、水泳など、鑑賞には美術、音楽などを見たり聞いたりする楽しみがありますが、音楽には自分で楽器を弾いたり、歌う楽しみもあります。もっともカラオケで歌うのも趣味ではないとは言えないでしょうが。観劇は歌舞伎、能、その他の舞台を見る楽しみであり、創作には自分で絵画、彫刻、焼き物などを作ることが入る。読書は幅が広く、文学書、教養書から古典や宗教、哲学、倫理の書などとなると堅いので果たして趣味と言えるのか難しくなります。またお稽古ごとには茶の湯、生け花踊りなどがあります。

三 趣味と余暇

趣味は暇な時にやるものとする、暇でないと出来ないという面があるようです。そうすると忙しい人にはなかなか趣味を楽しむ暇は出来そうありません。そのうちに暇になったらと思いつつ過ごしてしまふことになります。しかし、世の中には暇は作り出すものだという人もあって、努力しないとなかなか暇は出来ないものです。

十年以上も前になりますが、ゴルフに凝っていたことがあります。コースに行つて迷惑をかけないように練習してから始めたのですが、つぎにはスコアを少しでも良くしようとして練習に行きました。週に何回か病院の帰りに一時間位練習をするのですが、こういう時間も集計するとばかにならない位になりまして止めました。コースの費用がかさむのと、一日時間を取られるのと、練習の割にうまくならないからというのが本音ですが。

暇が出来るところ寝をしてテレビでも見るかというのんびりした時間も欲しい。こういうのは趣味といえるのかどうか分かりませんが。私の場合は自由を束縛されないでぶらぶらする時間が出来るとゆつたりとして落ち着きます。緊張感がなくなつて肉体的にも大変良いと思います。

四 趣味の楽しさ

趣味というのはやっていて楽しいという要素があります。子供の頃は友達と遊ぶ楽しさがありましたが、成人すると

子供の遊びにとって変わるものが趣味という面もあるようです。

碁、将棋、麻雀などは相手がいないと出来ないゲームですが、碁と麻雀は学生時代に凝って試験が近いのにつきあってくれる仲間を集めて、困らせたこともありました。しかしその後は自分の生活の中に定着しませんでした。

子供の頃は遠足の前夜は楽しくてなかなか寝付かれませんでした。ゴルフに行く前夜も興奮するの、なかなか寝られないことがあります。大人になって遊びに行くのはやはり楽しいことなのです。「下手の横好き」と言いますが、余り上達しないけれども楽しむという趣味の一特色を表わしているのではないのでしょうか。この楽しみが私共の心身に良い影響を与えるのだと思います。

五 洗練された趣味

趣味の中には単なる楽しみではなくて、その人を高める作用をするものがあります。のんびり楽しめばそれで良い、堅苦しいことを言わなくてもという意見も当然あります。趣味は人の好みによるのですから、何でも楽しければよいと思います。たまたまその趣味が玄人はだしの域にまで高められたものに接しますと、その人は一層幸せだなと感じます。例えば書道、絵画などです。

私の岳父、野口 明（第七代本会会長）は絵を趣味とし、

自らはアマチュアの余技と称して居りましたが、すでに大正時代に光風会（当時の洋画の主流展）に出品、入選しております。しかし定年までの間は絵に打ち込む余暇が十分とれません。した。「公務を辞して、私は一生油絵と水彩画に没頭しようと思った。絵描きになるという意味でなく、心ゆくばかり自分の絵を描いてみたいと思った」といっておりますように、「野口明画集」に納められた八十三点の四分の三は退官後の作品です。父は七十年間にわたって自分の趣味を大切に育てて、清澄にして潤いに満ちたと評される画境に達したのです。趣味もここまでできますと洗練されたもの、精神性の高いものといえましょう。

六 私の趣味

さて今までお話ししてきたように、長続きしないで止めたもの、たまにしか機会がないもの等は、このさい趣味の資格が無いとして外してしまい、またごろ寝が趣味というのも困りますので、これも外して後に何が残るかと考えてみます。ピアノが私の趣味ということになります。これは趣味と人前で言うのも恥ずかしいし、とても人様にお聞かせするようなものではないのですが、自分の趣味ですから人に迷惑をかけないようにして楽しめば良いかと思って居ります。

ピアノとの出会いは父が昔の女学校、中学校の音楽の先

生をしていましたので、子供の頃から環境はあり、初歩的な手ほどきを受けること、が出来たことです。しかし戦中は陸軍の学校、戦後は高校、大学で寮や下宿生活をしましたので、自分で楽しむようになったのは社会人になってからでしょう。これなら二十分か三十分あれば出来ますし、比較的長続きしているのです。

何を弾くのかって聞かれますと、平易な曲ということになります。易しいソナタなどでここ数年凝っているのはバッハです。インベンションとか平均率クラビール曲集の中の弾けそうなものを選んでゆっくりゆっくり弾くのです。ですからその曲が何処かで流れているのを「ほらあの曲だよ」と家内にいっても余りテンポが違いすぎるので同じ曲とは思わないらしいのです。

それでも疲れている時、憂鬱なとき等にバッハを弾いていると、三百年前のバッハに会っているような感じがしてほっとするのです。バッハの面白さはとても三百年（正確には二百七十年くらい）も昔の曲とは思えない新鮮な曲とか、どうしてこのようなメロディが出て来るのか不思議な曲とか、深い精神性を持った曲とかがある点です。

以上で私の趣味談義を終わります。最初に「読書、ゴルフ、音楽」と答えましたが、ゴルフは続きませんでしたので、今は「読書、ピアノ」ということになります。

しかし、またそのうちにゴルフを始めるかもしれません。

（本会評議員・都立広尾病院副院長）

小泉信三、エドワード・グレー、そして江口書店 多田建次

(一)

毎年夏の休みは、通信教育のスクーリングのための一週間をのぞいて、八ヶ岳の山荘で過している。大学での雑務

を早めにすませ、書籍などをあらかじめ宅配便にたくし、そそくさと信州へ向う。電車とバスを乗りついで山荘にたどりつくと、今年も無事ここに来れた喜びが、体全体に拡

がっていく。

荷物を整理するのもしどかし湯をわかし、ステレオのスイッチを入れる。ミルクカップに並々とコーヒーをついで、好きなモーツァルトを聴きながら、書棚から取り出す書物は、きまつて小泉信三博士の何冊かの随筆集である。『わが日常』『十日十話』『私の敬愛する人々』……。どれも古書店でみつけて山小屋に運んで以来、毎夏くりかえしひもといってきたなじみぶかい書物ばかりである。レクリエーションという語を、英語本来の心身を新たにし元氣と力を与えるものとするならば、私にとって一年でもっともレクリエートできるのは、この瞬間である。

「私淑」という言葉がある。孟子の「予れ未だ孔子の徒たるを得ず、予れ私かに諸を人に淑くす」に由来し、敬慕う人に直接就いて教えをうけることができないので、その書物を読んだり人からその人の話をきいたりして、ひそかに身を修め行いを慎しみ成長の糧とする、との意である。生前の小泉博士を私は知らない。慶大入学の前年五月に急逝されたからである。私より一年前に入学した家内は、入学式当日博士に接している。立派な人生は、その人のそばにただで、おのずから自己の矮小さ卑しさを自覚せずにはいられなくなるような、威厳を備えている。小泉博士は、そのような人の一人だったのであろう。直接博士の聲咳にふれる機会こそめぐまれなかったものの、書物を通

してであれその人を知り、その教えを受けることができたことは、人生の幸福の一つであるとさえ思っている。

弘道会の方々であれば、小泉博士がすぐれた学者教育者であったばかりか、たくましいスポーツマンゆたかな教養人でもあったことは、御存知であろう。テニスすでに普通部時代から、慶応の代表選手として活躍した。古今東西にわたる幅広く奥深い読書、歌舞伎をはじめとする芸能芸道への造詣、亡くなるまで志ん生を愛しておられた。

数々の御不幸を知りつつも、これほど豊かで贅沢な生涯を私は知らない、これほど気品とユーモアと知性にあふれ、常に家族の笑いと来客の語らいのたえない家庭を私は知らない、これほど勇氣と教養にめぐまれた高貴な人格を私は知らない。私自身にはとうてい望むべくもないが、日々博士のひそみにならいつつ、二人の娘を育てている。

(二)

その小泉博士が、多彩な趣味をうらやましげに書いておられるのが、エドワード・グレーである。今世紀の初頭一〇年余にわたってイギリスの外務大臣として、第一次大戦前後の国際政治を導いた人物にほかならない。

グレーは七一歳でこの世を去るまで、公私ともに人が羨むほどの充実した生涯を送った。しかしその一方で、世に稀なほどに人生の悲哀をも味わった。難局のなかで国務の重責を担いつつ、最愛の妻と二人の弟そして再婚相手とつ

ぎつぎに死別し、本邸と田舎の小屋を焼失、あまつさえ視力をも失なうにいたった。不幸のさなかにあつても平静とユーモアを忘れず、たずねた者は常に幸福にみたされたという。重なる不幸が彼を年ごとにノールにした、と伝記作者は記した。

小泉博士のグレー論執筆は敗戦直後、長男は戦死し家屋敷は灰燼に帰し、自ら大火傷を負い生死の境をさまよったあとであつた。グレーに深く共感するものがあつたのである。

大臣辞任後グレーは、ハーバート大学に招かれて講演をおこなつた。人生の義務を重んずべきことともに人生の悦びにふれ、それには自然の美にまざるものはないと話した。グレーによれば、人を幸福にするものは四つあるという。一は、我々の行動を導くなんらかの道徳的基準。二は、よき家族と友。三は、おのれの存在を有意義ならしめる仕事。四は、ある程度の余暇とその使い方。グレーの場合は、各種スポーツ、読書、魚釣り、野鳥の観察であつた。グレーがアメリカ大統領を離任したばかりのセオドア・ルーズベルトを誘つて、一九一〇年六月某日イギリスの田舎に野鳥の声を聴きにいき、歓を尽したエピソードは、人生の悦びがいかなるものかを私たちに教えてくれる。

(三)

ひるがえって私自身のことの思いを到すと、グレーのい

う四つの格率のうち一については、信仰をもたない私はとくにこれといつて宣言するほどのものもない。学生が学窓から巣立っていくときなど、「理想はどこまでも高く遠く、生活はあくまでもつづまやかに」とはなむけることが多い。私の父の名は「止善」という。四書五經の『大学』の冒頭の一節にちなんだものである。父の生涯は、子供心にももどかしく思うほど、その名のとおりの愚直なまでに折目正しい清貧なものであつた。不器用な人間が、人を愛し人のために尽した一生であつた。官吏を辞したのちも、関係者から金品が送られてくると、「自分の経歴に傷がつく」といつて、律義に送り返していた。四年前父の葬儀をおえたとき、とうてい父には及ばないとつくづく思った。そして私の体のなかに、まぎれもなく父の血が流れていることを、この頃強く感ずるようになった。

小泉家の雰囲気は博士自身の存在に負っているように、その家庭のあり方を規定するものは、良きにつけ悪しきにつけ夫であり父であるように思われる。家内が私とおなじ仕事をしている関係上、二人の娘が誕生して以来、家内と研究日をやりくりしながら育児にあたってきた。

娘たちの幼い日々は二度と巡つてはこないし、娘たちの成長過程のどのような場面であれしつかり見守つてやりたいて思っているので、家内の都合のつかないときは、幼稚園の遠足であれ父母会や授業参観であれ、すすんで出向い

ていった。彼女らがどのような人として成長し、どのような生涯を送るか見届けることはできないが、学問と芸術を愛する気持だけは持ちつづけてほしいと願っている。

私の恩師は、昨年急逝された慶大名誉教授文学博士中山一義先生である。常々世の中には衣食が足りても礼節をわきまえない人、恒産を積んでも恒人のともなわない人と、衣食が乏しくとも礼節にあつい人、恒産がなくとも恒心を失なわない人がある、できれば後者でありたいとささされた。大学の教員は好きな学問をしながら飯が食えるのだから、給料は世間の相場以下であってもよいではないか、これが恩師の口ぐせでもあった。もとより教員の収入が多かるうはずもない。恩師の教えがしみついていいのか、要求水準がそもそも低いのか、仕事や待遇についての不満はない。

ただ研究の内容については、忸怩たるものがある。大学院以来一四年間にわたって恩師の指導のもとにすすめてきた研究を、今春ようやく『日本近代学校成立史の研究』（玉川大学出版部）と題して公刊した。廃藩置県前後における福沢諭吉をめぐる地方の教育動向がテーマである。本書の意義は学会等の批判にまたねばならないが、私の研究者としての評価は本書によって決まるであろう。今後は福沢を中心にすえつつ、西村茂樹の思想形成と洋学学習との関連をめぐる問題に取り組みたいと思っている。

四

グレーのいう一から三までは、グレーや小泉博士に比べべくもないとはいえ、自分なりに納得できなくはない。しかし他人よりはるかにめぐまれている余暇については、いたずらにもてあますだけで、その有効な使い方をまだ見出しえてはいない。多種多様な趣味に夢中で打ち込んでいる人を見ると、つくづく羨ましいと思う。スポーツや旅、芸能や芸道、賭け事や勝負事、狩猟や魚釣り、園芸や銅育、音楽や絵画、俳句や和歌、そして日曜大工や蒐集……。

父母や知人友人からあれこれ勧められはするものの、生来の不精と物ぐさと天邪鬼がわざわいして一向に心動かない。時おり我ながら無味乾燥な生活にあきれば、さて何かないかとあれこれ思いを馳せる。他人と同じことに手を染めるのは気が進まない、できれば一風変わったものでありたい。そうこうしている内に、時はすぎていく。

杉田玄白の『蘭学事始』に、こんな話がある。『解体新書』翻訳の中心人物前野良沢は、若き日伯父から「人がもはやかえりみず世の中からすたれてしまいいそうな芸能を学び、後の世まで絶えないようにしなければならぬ」とさとされ、当時廃滅寸前だった「一節切」をおさめ、その秘曲を究めたという。私は当年四十歳、父の死去した七五歳まで生き延びるとしてあと三五年、この間に「一節切」にあたるものを見つけられるかどうか。

強いて趣味にあたるものを挙げるならば、古書店巡りといったところか。それも研究のための文献や資料探訪、ないしは特定の作家や分野のコレクションのためというより、私の場合それ自体がレクリエーションである。

かつては時間の許すかぎり、あちこちの街の古書店をたずねてまわった。古書店地図帖はおろか古書籍組合の名簿まで手に入れて、旅先にも持ち歩いた。さすがに結婚し、子供ができてからは回数もへり、行動範囲も狭まったのはやむをえない。それでも時間のゆとりができると、神田や中央沿線にいそいそと出かけた。たりする。

(四)

田園都市線沿線に住むようになって頻繁に行くのが、三軒茶屋にある一〇軒ほどの店である。なかでも三宿の江口書店には、心底惚れ込んでしまっている。

豪徳寺で小田急線をおり、東急世田谷線の山下から昔ながらの玉電でのんびりと三軒茶屋へ向う。どんな本に巡り遭えるか、胸は早や期待にあふれている。店が近づくとおもわず足取りも軽く早くなる。勤務先、豪徳寺、三軒茶屋そしてあざみ野とわずかな行程であるが、気分はすでに旅行そのものである。

専門書は神田本郷の古書店や目録にゆだね、ここではもっぱら一度出版されただけで評判を呼ぶことなく絶版となった珍書奇書が中心となる。なにしろ江口書店では何が出

てくるかわからない。なかにはその時とめていた研究論文に直結する珍書に出くわしたこともある。

数年前高知県政の基礎を築いた県令田辺良頭の事績を調べていた。明治一〇年代という困難な時期に、しかも民権運動のメッカ高知に赴任し、反対派を根気よく説得しつつ、四国新道の開発と浦戸湾の浚渫工事を推進した豪毅な人物である。戦前小伝が刊行されただけで、彼の事績は歴史の表舞台から忘れ去られていた。それだけに調査は困難をきわめた。

そんな折江口書店の書棚の一隅にある『歴史残花』が、ふと目にとまった。何気なく頁をくると、そこにまぎれもなく田辺良頭の評伝があるではないか。今手許にないので詳細は省くが、史料の裏付けもすぐれ信頼のおける内容で参考に使えていた。『日本教育史資料の研究』（玉川大学出版部）に収めた小論がそれである。

今これを書いている山荘の書棚にも、小泉博士の随筆をはじめ、高橋誠一郎氏の『結婚指環』『王城山荘随筆』、池田清氏の『第三の随筆』『愚かなり日々』『教師のらくがき』『よき時代のよき大学』、青柳瑞穂氏の『ささやかな日本発掘』などが並んでいる。

このように古書探訪といっても私の場合稀覯本の蒐集ではなく、まことにいじらしいささやかな古書発掘である。趣味には値しないかもしれない。しかし私にはかけがえの

ない楽しみ、ひそかな悦びである。山荘での長期滞在や長期出張から帰ると、矢も楯もたまらず馳け付けるのが、江口書店なのである。

収獲のあったあとは、近くの銭湯の湯船にゆったりと体を伸ばし、富士を遠望する西伊豆の景色を眺めながら来し方行く末に思いを巡らす。そしてずずらん通りの仲本で喉をうるおし、満ち足りた心地で帰途につくのが常である。

そういえばたしか江口の書棚に、グレーの伝記があった。グレーについては小泉博士の文章で事足りると思っていたが、この小文をまとめているうちに気になりはじめた。八月四日八ヶ岳から一旦帰宅する。翌日スクーリングでの講義のあとでも寄ってみよう。はたしてその時まで、売れずに残っていてくれるであろうか。

(本会々員・玉川大学文学部助教)

趣味について

入 江 徳 郎

趣味は何ですかと聞かれて「わたしの趣味は仕事です」と答える人がいる。

ふつう、趣味とはその人の専門外の分野でのたのしみをいうから、この返答は少々へんだといえるが、しかし趣味を広く解釈すれば、その人に感興をもたらし、たのしませるものことだから、それが「仕事」であっても決しておかしくはないともいえる。

仕事に打ちこんでいて、その中に生きがいを感じ、おもしろさ、たのしさを味わえる人はしあわせである。「趣味

は仕事」とためらわず答えるのは自分の充実した生き方に誇りを持つ人だろう。

そういう人は事業家ならバリバリやって従業員の先頭に立ち、研究者や文筆関係なら「この道ひとすじ」で、また企業などの組織内の人なら職場の生き字引といわれるようなタイプが多い。

職業や仕事が即趣味だというのは「天職」という考え方にもつながるし、それほどに打ちこめるのはうらやましいといえる。それは一つの生き方だが、同時に、仕事以外に

もたのしみを持てば、生き方が広くなって、人生がより楽しくなるのではなからうかと思えてくる。

身近な例をあげると、たとえば囲碁、将棋をやる人は友だちがふえる。学生のころちよっとおぼえ、職場に入ってから忙しい仕事の合間や宿直などの夜に同僚とやったというような人、むろん段位など持たず、ヘボ将棋、ザル碁の域を出ないが、その程度の趣味でもけっこうプラスになる。

同じ程度の連中が多いので将棋友だち、碁仲間ができる。仕事だけでなく、こうした趣味でのつきあいというのはなかなかよいものだ。仕事での接触だけでは及ばぬ人間の交流の味がある。

川柳に「碁がたきは憎さにくしなつかしし」とあるがこのなつかししの味だ。

会社を定年で退職すると、男たちは枝から離れた葉のように四散してしまいが、同じ程度のザル碁で勝ったり敗けたりしていた連中が何人か集って、「ザルの会」をつくり、会合をたのしみに行っている例などあちこちにある。

碁、将棋に限らない。俳句、歌道、謡曲。またゴルフ、水泳などのスポーツ、釣り、山歩き、小旅行、読書会、盆栽、陶芸、絵画、書道、気に入ったものの蒐集、研究。なんでもよい。こうした余技をたのしみでやれば、交友の範囲が広がり、心にゆとりも生じる。仕事熱心な人も、自分の仕事を客観的に見る余裕が生れたりして、意外な収穫が

あるかもしれない。

早いうちから趣味を持ち、それを育ててゆくと、結構その道で上達してそれで収入を得られ、定年後の本業になる場合もある。

ある人、書道が趣味で勤めのかたわら研鑽をつづけていたが、定年後、自宅で付近のこどもを対象に書道教室の看板をかかげた。はじめは二、三人だったが、次第にふえ、奥さんも手伝うようになった。この奥さんも主人の感化で字がうまい。二人しての書道塾が老後の生きがいの源泉、息子に頼らずにすむ生活の資になった。

ある婦人、手芸が好きで永年、人形づくりを趣味にしたが、友人がふえて同好のグループをつくり、そのリーダーとなったことから「人形教室」を開いた。

これが予想以上の繁昌となった。趣味を育てたい女性が多い時代だが、この教室のよさはみなが仲良しになるあたったかい霧囲気にある。うるおいのない大都会の生活の中で、アト・ホームな集り場所をことに若い女性が求めているようだ。

芸は身を助けるというが、趣味もある程度以上の深さになるとプロ化して、生活の支えになり、本業化してゆく。

さっきの「仕事そのものが趣味」の境地に逆の方から到達したことになるが、こうした派の人は、そこでまた別の趣味に手を染めたりする。

いまの熟年、実年齢にはこれという趣味のない人や、いくら開き直り気味に仕事が趣味という人がすくなくない。無理もない理由があつて、これらの人びとは昭和史の激動の中でもまれ、趣味にひたるいとまもなかった。

成長期にはすでに十五年戦争が始まっている。満州事変、日中戦争、太平洋戦争とつづく戦時の中で、きびしく窮屈な軍国的教育を受け、ついで男子は戦場への時代となる。

多くの戦友が死んだ。生死の波をさいわいくぐり抜け、帰つてみれば焦土と飢餓の敗戦日本である。生きるために、家族を養うために苦闘しなければならなかった。

見るかげもなかった日本の立直りは少しづつ進んだが、そのころから本格的な復興へ向けて懸命の頑張りである。経済成長の重いみこしをかついでひたすら働いた。

敗戦と窮乏の谷底からはいあがるためにひたむきだった青、壮年期が過ぎ、気がついてみれば、いつの間にか、終戦のころには予想もしていなかった経済大国だ。なんとかよくやってきたと安堵感を浮べるひたいには風雪のしわ、髪には白いものがまじる。

生活とのたたかいの連続の中で、この層の多くの人は趣味とは無縁で、そうしたものを身につける余裕もなかった。仕事が趣味にならざるをえなかったといえよう。

熟年齢の男子にはいまでも泳げないカナヅチ組が多い。こどものころ、泳ぎをおぼえる時期は戦時下の暮らして、

親は子を海へ連れてゆくこともなく、学校にプールもなかった。だいいち空腹で、泳ぐどころではなかった。

成長してからは泳ぎは覚えにくい。カナヅチはその時代のこどもの受難を語っているが、同様に女性の場合、戦時中や敗戦直後に母となった世代の人は、たいてい歯が悪い。嬰兒に乳を吞ませ、自分の栄養分は失われる。食糧難の中で乏しい食物しかない。その食物を主人やこどもに先に食べさせ、自分は食べたふりをしておすましのようなスイ

トンをする。歯がボロボロになるのも当然だった。

経済回復、家計回復につれて、彼女らの歯も歯科医の手で治療されたが、わたしなどの戦前、戦中派には、その年齢の婦人の歯の悪さは、ギリギリの生活に耐えてきた日本女性の「勲章」のように思えた。

くり返すが、こうした環境の中で多くの人が、これといった趣味も持たずにやってきた。趣味や遊ぶところではなかったのである。

大正や昭和ヒトケタ、ヒトケタ半は遊びが下手で、没趣味の連中が多いとしばしばひやかし気味にいわれる。いわゆる方も一種のひけ目を感じている風があるが、もしも新人類といわれる若者などが熟年、実年の没趣味を笑うならば、こう教えてやりたい。

「趣味を持つことも忘れてお父さんたちが頑張ったから、いまのような経済繁栄ができたのだよ」

——と、こうはいうものの、だから無趣味で通せというのではない。生活に多少のゆとりができた今日、趣味をひろげることは、自分の世界をひろげることだと考え、わたしなど、無理のこない範囲で、あれこれ趣味をひろげたいと思っている。

めんどくさい、という方もあるだろう。趣味を通じて人との交流というが、いまさら新しい人づきあいも気苦労だしといわれるかもしれない。高齢にさしかかる人には、戦前、戦中、戦後とあまりに世の変貌がはげしく、価値観の急激な変化や、世間の表裏、さまざまな人間の姿を見てき

たために、一種の無常感や、人間不信に似た心境があり、新しいつきあいに腰の重い傾向がある。

そうした人に読書をすすめたい。つきあいのうるささから免れて、いろんな作中人物との対話が自由にできる。

目が疲れたら、散歩だ。歩き回り、バスも利用する。読書と散歩、よい趣味だが、それがやがてわが住む地区の郷土史研究というもうひとつの趣味にひろがってゆくかもしれない。

(本会評議員・元朝日新聞社論説委員)

芸名花柳国一弥

木 下 一 雄

子供のころ、母親が、大層芝居が好きであつたので、わたくしは時々、そのお供をさせられた。中学校を卒業したころ、母親の勧めもあつたので、わたくしは一人で市村座などに行くようになった。明治から大正の初めのころである。そのころ市村座では、六代目菊五郎と吉右衛門のコンビで、大層な評判であつた。身替座禪を見た時は、全く我

れを忘れた。吉右衛門という人は、あまり踊りをされなかつたが、或る時、菊五郎と万才を踊つた。これは今でも印象に残っている。

大学を出たころ、わたくしは、長唄の研精会に、足繁く通つた。吉住小三郎と稀音家浄観とは、大名人であつた。この二人の越後獅子は、いつも満場の客に、深いため息を、

おこさせた。

さてわたくしは、今から二十四年ほど前、七十五歳の時、昭和四十年、花柳国調師に正式に弟子入りした。勿論、この時すでに、わたくしは学芸大学の任期を終り、東京都教育委員の任期も完了していた。国調師は女流であって、男の弟子は一人もなく、わたくしだけは例外であった。毎週土曜日、午前十一時から三十分、これがわたくしの稽古の時間であった。

はじめに、長唄「松の緑」を教えて頂くことになった。先生は舞台の上手に、わたくしは下手に着座する。わたくしの場合は、先ず正しい着座の仕方、扇の持ち方、踊る構えが出来た時、先生は上手で、口三味線で踊りはじめられる。わたくしは、先生の振りを視ながら動作を真似る。それが三回で、三十分は過ぎるのである。

十一時三十分が来ると、次ぎのお弟子が来て着座する。わたくしの踊りを見学することになる。それは、わたくしの踊りの始めも同じように、前のお弟子が、稽古されていることになる。先生は、お稽古の日は、一日中休息がないことになる。

お師匠さんは、行儀・作法の指導に、非常に厳しいものであった。このごろの学校や家庭などには、到底考え及ばぬところであった。玄関のくつぬぎに整然とならべられたお弟子たちの、きもの有様は、人たちの心に、ひきしめ

られるような感じさえおこさせたものである。

入門してから、はや十年が過ぎた。「北州」「山姥」等、段物と称するものも、十以上に及んだので、お師匠さんから、家元での名取免許の試験を受けるようにとのおすすめがあった。

願書の調製にとりかかった。ところが、お師匠さんから頂いた願書様式を見ると、非常にきびしい。先ず保証人が二人、その一人はお師匠であるが、も一人は、お師匠さんのお師匠さん花柳寿南海師に指定されてある。国調先生は取立師匠と呼び、寿南海先生は、親師匠と呼ぶのである。この両先生が保証人となられ、それに戸籍謄本を添えて、願書は、取立師匠国調先生から花柳流家元に提出されたのである。

試験当日、わたくしは満八十五歳、規定により、黒紋付羽織はかま、同行のお師匠さんは、訪問着、扇を帯にさしておられる。

家元の家は、築地の本願寺近くにあった。受験者の控室は大広間に入ると、訪問着の盛装の若い女性の方ばかり、多勢、正にけんらんたる場面、そこにわたくしの姿を見ると、その多くの女性が、わたくしに礼をされる。白髪、紋服、はかまのわたくしを、試験官と早合点したことに間違いない。わたくしは全く恐縮した。

やがて定めの会場で、受験者は組分けされて、踊るので



ある。約一時間ばかりで終って、各控え室に帰る。それからまた一時間ほど経った時に、廊下に声がした。受験者の名前を呼びながら、取立師匠同伴で、試験室に行くことを知らせるものであった。わたくしの名は呼ばれなかった。国調先生は、わたくしに、次ぎのように話された。

「今、名前を呼ばれた人は、全部不合格者です。これから取立師匠同伴、試験官室に行くのです。そして試験官は取立師匠に対し、不合格者の間違った所を指摘して、どのようにお弟子に教えたか、師匠自身、その箇所を踊るように指図があるのです。」お師匠さんは、そのように、わたくしに話して、ご自分の帯にはさんだ扇を、わたくしに見せられた。国調先生もまた、いざという時に踊る覚悟を以て、わたくしに付き添われたのであった。全く真剣そのものである。多年、教育の事に従って来たわたくしは、この

時、いろいろと反省させられたのであった。

それから名取免許授与の式が行われるのであるが、わたくしは、八十五歳の老齢をもって受

験したことを奇特とされ、特別に家元花柳寿応師から、直接、授与されることになった。

荘麗なる日本大広間、床間を背後に、家元花柳寿応師が着席しておられる。取立師匠花柳国調師が先導で着座、わたくしは、じきじきに免許証書と扇子を授与された。わたくしは久しい以前、当時、神田水道橋近くに所在された小笠原流家元道場にて、現代の小笠原清信師のご厳父に、座作進退を、直接ご指導頂いたことがある。この時は、本当に安心した所作で、免許証書を拝授した。御礼を言上して退出。わたくしは芸名花柳国一弥になったのである。

取立師匠国調先生とわたくしは、そのまま青山、明治神宮表参道近くに在る、親師匠花柳寿南海先生のお宅を訪ねる。寿南海先生に、名取免許の御礼を言上した。退出した時は、日、既に夕暮であった。

翌日から、わたくしはまた新鮮な、元気を振り起して、踊りの勉強に励んだ。本業の学究生活の方も、もとより一層のガンバリがきくようになった。本業と踊りとの協奏曲である。毎週土曜日、午前十一時、扇を持って、お師匠さんのお宅に参上する時は、張り切っていた。或る日、お稽古のあと、名菓伊勢の赤フクが出た時は、思わず五つ食べ、て仕舞った。お師匠さんも、ビックリされた。わたくしは、さすがに年甲斐のないことを恥じた。

「老松」の稽古が、はじめられた時は、心から嬉しかった。

た。この曲が踊られるようになった時は、本当に一人前の舞踊師になった感じがした。家に在って、本業の勉強に打ち込んだ時間の合間、扇を持って、老松の一節を踊る。

「松といふ文字は変れど待つことのはの、其の甲斐ありて積む年に、寿祝ふ常磐木の調べぞつづく高砂の……」踊りの美しく、きまりのよい旋律に、びたりと合せて、トントンと足拍子をする時など、本当に晴れ晴れしい、楽しい心地でいっぱいである。

このごろ、学校教育での規律規則が、大問題になっている。規律規則は、舞踊の旋律に相当するものである。数年前、臨教審の会議の折或る学者の委員が、大層、ちからこぶを入れて「学校の規律や規則は、児童生徒の自主性をやぶるものである」という意見を述べたのが、導火線となったようであるが、規律規則の反対は、学校当事者内部からでなく、世の教育学者、マスコミ評論家等から、多発されたものであろう。

ところが先般、或る教育委員会が、管下の学校に対し、「規律・規則は、つぐらないように」という通達を出したという新聞記事を読んだ。わたくしは、早速、新聞を手にしたが、正に驚嘆した。その通達を要約して掲げる。どこかの教育委員会であるか、ここに掲げない。

「規律・規則は、児童生徒の人格を傷け、自主性を害うものであるから、今後、規律・規則を多発しないよう」

これは正に言語道断である。「国会で法律を作ることとは、国民の人格を傷つけ、国民の自主性を害うものであるから、今後、国会に於て法律をつくることを止めよ」というのと全く同じである。また「舞踊で旋律をたつとぶことは、踊る人の人格を傷つけ、自主性を害うものであるから、今後、舞踊する人は、旋律を排斥せよ」というのと同じである。そもそも、律・規・則は、みな「のり」であって同義語である。この外「のり」の同義語に、道・法・徳・刑・礼・儀・理等がある。法律というのも、道德というのも、道理というのも、礼儀というのも、元来全く同意味である。学校教育にあって、「規律規則を止めよ」ということは、「道德教育を止めよ」ということになるのである。

九十三歳のわたくしは、長唄菊慈童を教えて頂くことになった。この曲は、むかし都で栄華な生活をした人が、今は山奥で淋しく、懐旧の情に堪えぬ憶いを踊るものであるが、旋律も大層むずかしいものであった。

或る土曜日、わたくしは舞台で踊っている時、ころんだ。医者診察を受けたが、血圧二〇〇を超えている。心電図では不正、レントゲンでは、心臓肥大、入院した。

幸いにも、一箇月にて退院、学究に専念することが出来るようになったが、趣味の踊りとは、本当にさびしい思いであったが、お別れしなければならなかったのであった。わたくしは、以前からの易経の研究に没頭した。それから

六年、わたくしは明治二十三年五月生れであるので、この七月、今や年齢、満九十九年二箇月に達した。努力の「新講易経」は、今、活字に組まれようとしている。十月末に

は或る研究所の研究紀要として刊行されることになるであらう。

(本会特別会員・元東京学芸大学々長)

文学散歩

古川清彦

私の趣味は文学散歩である。その由来する因縁は私の育った時代と環境による。亡父左京が神職で、鹿兒島・諏訪・塩釜・住吉・伊勢・日光の各神社の宮司を歴任したので、その社宅の環境が歴史と自然に恵まれた上に参拝客の中に学者や文人も含まれるので、その方々の風格や言動から文学散歩・歴史散歩の影響を種々受けたと思われる。その群像の中には上田万年・山田孝雄・喜田貞吉・山本有三・折口信夫・守随憲治・塩田良平・成瀬正勝・福田清人というような方々がある。また仙台の土井晩翠・阿部次郎教授(東北大)や伊勢の澤瀉久孝教授(京大)の御宅へも時々伺ったので、その高風も懐しく想起される。また学生時代に拝見した佐佐木信綱・島崎藤村・木下杢太郎(太田正雄)の御姿、それから駅や街頭等で見かけた頭山満・大川周明

・正宗白鳥・徳田秋声・大仏次郎・広津和郎・坂口安吾・吉屋信子等の風貌も懐しく想起される。まことに人生は慌しく流れる時間と空間の波頭の連続であるが、その一方懐しい想い出の旅路でもある。そして、その代表的な記録の一つが芭蕉の『奥の細道』と云えよう。その跡を慕って多くの人が旅をする。その結果、短歌・俳句・紀行文等が生まれることは日本人の良い習慣として保持すべきであろう。事実、各地の名所旧蹟には種々の文学碑があって、旅行者の目を楽しませてくれる。学会でも日本文学風土学会とか、むさしの文学会では実地踏査を重んじているのである。また外人でも日本文学の研究に熱心な人があって、国文学研究資料館(東京都品川区戸越公園)などでは外人の閲覧者や研究発表者を見ることが多い。

私の個人的体験でも東京駅前で、世田谷の「等々力」行きのバスを待っていた時、傍の外人からその読み方を聞かれたので「トドロキ」と答えたところ「トウトウリキイコール トドロキ イズマイ オドロキ」と云われて、その意味を聞かれたので、日本では大きな川の近くに「轟」という地名がつくことがあるからと多摩川を連想して答えたことがある。また大井町線の「上野毛駅」では、駅名を見た車中の児童たちが、「カミノケ」と連呼して自分の頭髪をむしって親達に見せている滑稽な有様を見かけて、これも一種の文学散歩かなと思ったことがある。

さて東京の大田区では「大田区立山王草堂記念館」がオープンしたので、それについて記したい。

徳富蘇峰とくとみ（文久三年～昭和三年、一八六三～一九五七）は本名猪一郎いのちろう。徳富蘆花あしかの兄で、肥後水俣みづまたの生まれ。父一敬は横井小楠の高弟である。蘇峰は新島襄にいじまの同志社に学び、私塾大江義塾を開いた。早く板垣退助・中江兆民・田中卯吉らと接触した。代表作に「将来之日本」（明一九）・「新日本之青年」（明二〇）・「時務一家言」（大ニ）等の評論がある。明治一九年末に上京。二〇年に民友社を興して「国民之友」を発刊した時は二五歳であった。二三年には「国民新聞」を創刊した。大正七年から大著『近世日本国民史』を刊行。『蘇峰自伝』（昭一〇）もあり、近代日本のジャーナリストの代表的人物の一人である。そ

の還暦記念出版に『烟霞勝遊記』上下二巻（民友社）があり、その上巻（大正一三年）の諏訪（三一四頁）の項には私の亡父について左のように記されている。

「転じて寒風を衝き、下諏訪社に詣す。此処にては、正式の参拝を遂げ、御祓を受け、御櫛を神前に献ぐ。而して古川宮司の好意にて、神庫の宝物、若干を拝観す。其中にて『売神祝印』の大和古印こいんは殊にめでたし。宮司は久しく鹿児島神社にありて、肥薩の事に通ず。其の娓娓として我が郷土の事を説くや、坐ろに人をして望郷の念を催さしめぬ。」（大正十年十月廿七日、午前六時半、諏訪湖畔に於て。）

当時、私は下諏訪小学校にも入っていなかったのですが、そのことは記憶にないが、昭和十年、仙台市で伊達家の記念式典があつて蘇峰翁が当時の内大臣（岡田内閣）斎藤実と講演に見えた時は、旧制二高生として参列、その風貌を仰いだ。（斎藤内相はその翌年の二・二六事件で殺害された。）それというのも昭和九年の東北地方の凶作について蘇峰翁が同情して下さったからでもある。例えば、昭和九年十一月二日の「日日だより」「東京日日新聞」に蘇峰翁は左のように記された。

「元来東北六県は、平時に於てさへも、関東、東海、畿内、中国、四国、九州等に比すれば、其の氣候の干係かんけいに於て、其の地利に於て、不利益の位置に放下せられつつある。

一年中に二毛作以上の収獲ある土地を耕す者と、一年の一半を氷霜・風雪の中に閉居する者とは、其の天然の恩恵が、如何にも不平等であるを否定することは能はない。平時尚ほしかり、況んや此の凶作時に於てをやだ。(中略)何は兎もあれ我等は我が全国の人心が、速かに東北六県の不幸なる同胞の為に銘々の最善を効さんことを熱望する。而して更に当局者の真剣なる考慮を熱望する。二階から目録では、切角の好意も駄目である。」(我等は東北凶作地の同胞を生視することが出来ない。)

旧制中学生の私が「日々だより」に注目してこのような記事を切り取って今に保存しているのは、当時の蘇峰翁の影響力が如何に大きかったかを物語る資料ともなろうか。

さて蘇峰を記念するためにこの度、公開された大田区立山王草堂記念館は、東京都の環状七号線に沿った大田区山王一丁目四一番(Tel 03-778-1039)にあり、公園面積は四〇七〇^mで、もみじ池と流れの周辺は肥後六花(つばき・さざんか・しやくやく・はなしようぶ・きく・あさがお)を配した美しい庭園で、入館料は無料。山王小学校が近くに在る。内部の展示室には蘇峰をめぐる文人・政治家たちの貴重な筆蹟等も展示されている。なお大田区では馬込文士村と称して、尾崎士郎・北原白秋・三好達治・室生犀星・川端康成・萩原朔太郎・宇野千代らの住居跡を散策コースとして推薦している。

さて蘇峰の弟の徳富蘆花(明治元〜昭和二。一八六八〜

一九二七)は本名徳富健次郎。義理の叔父に横井小楠、叔母に矢島楯子(かじこ)がいた。京都同志社に入學、新島襄に認められた。兄猪一郎の経営する大江義塾に移ったが、父一敬に対する反逆、兄猪一郎に対する劣等感を抱きつづけた。明治二十二年に上京、蘇峰の経営する民友社で校正係を勤めた。やがて明治四十年に府下千歳村粕谷三五六番地に移り住んで「美的百姓」を志し、『みみずのたはこと』(大二)はその六年間にわたる田園生活の記録である。代表作は『不如帰』(明三三、民友社)『自然と人生』(明三三、民友社)『富士』(全四巻、大一四〜昭三)等。

現在、東京の環状八号線に沿うて在る蘆花恒春園(世田谷区粕谷一〜二十一。電話三〇二五〇一六)には蘆花夫妻の墓が有り、傍に兄蘇峰の碑文も見られる。東京都立公園として一般に公開されているので、芦花記念館を見学する人も多い。芦花はトルストイに師事した文学者でもあるので青年にも人気があるようだ。

なお最近、戸越公園の国文学研究資料館の本田部長室で、徳富敬太郎氏(蘇峰翁の孫に当る方)と会談の機を得たのは、本田氏が熊本出身であるので有難いことであった。

蘇峰・芦花兄弟の公園がそれぞれ東京に在って歴史や資料が陳列され、散歩する自然にも恵まれているのであるから、青少年が、日本の近代を考えるのには便利で、一層活用されて欲しいものである。

それから文学散歩と云えば忘れられぬ人に野田宇太郎（明四二―昭五九）がある。福岡県に生まれ、詩人・評論家として活躍した。『野田宇太郎文学散歩』全一四卷二五冊、別巻四、『定本野田宇太郎全詩集』等の業績を残し、文学散歩と云う言葉を流行させた功が大きい。長崎出身の福田清人氏と共に文学と風土の関係を解明した文学者である。私もかつて宇都宮大学勤務時代にこの御二方には別々の機会に栃木県に講演に来ていただいた。そのおかげもあって

栃木県文学散歩の会はやがて三十年の歴史を持つが会員が熱心に文学散歩に励んでいる。こうした傾向がいわゆる首都圏ばかりでなく全国的に盛んになって来ているのは喜ぶべき現象であろう。どの分野でも資料と情報とスピードが要求されるが、その際、国の歴史と風土はあくまでも尊重すべきであるからである。

（本会々員・国文学研究資料館名誉教授）

「読書」随想

東 平 久 雄

余暇のある時に、書架の前に立つと自ずから一冊の本を手にする。時に文学書であり、又人物伝であることもある。読書は私の趣味の一つであるといってもよい。

若き日には、私は文学的なものを好んだので、文学書が当時の書架の大部分を占めている。然し壮年期以後は人物伝或は時事問題に関するものが少なからずある。古いものでは、改造社出版の現代日本文学全集六十巻がある。旧制中学時代に買ったものであるだけに、懐しい本であり、読

んだ作品も多い。現代日本文学全集と銘を打ってあるからには、あらゆる著者の作品がある。坪内逍遙、徳富蘇峰、幸田露伴の著作から、昭和初期に有名であった菊地寛、芥川竜之介、久米正雄、大仏次郎の作品、島崎藤村、石川啄木の詩歌も含んでいる。

若い頃に読んで、心に残るものは、人生開拓の資料ともなるし、青年期以降に心の琴線にふれたものは、精神に豊かさを与えて尊い教養ともなる。

高山樗牛の華麗明快な文章に、心ひかれたこともあるが、最も大切にして、親んできた書籍としては、岩波書店から刊行された漱石全集十六巻と、文芸春秋社出版の小泉信三全集二十六巻である。

読んで含蓄があり、乏しいながらも、我が心の宝庫となっているような気がする。

小学校六年の頃旧制中学校の受験勉強をして居た時、親戚の二階書斎で、漱石全集の初版本を見た時に、幼な心に何時の日にかこのような本を読みたいと、何心なく魅せられたのが、漱石全集との最初の出会いであった。中学校に行く頃に「坊っちゃん」を読んで面白くなり、「倫敦塔」を教科書で学び、「吾輩は猫である」と進んで、漱石文学に入門するようになった。

それ以後、各作品を読んで、夏目漱石の文学が漸く解りかけてきた。そして念願の漱石全集を入手したのが、漱石歿後五十年生誕百年を記念して、岩波書店が出版した菊版「漱石全集」である。

夏目漱石の文学を、伊藤整氏は次のように語っている。

『明治という、日本が世界に向ってその心を開いて以後の盛熟期が、漱石その人の盛熟期であり、日本が世界の近代化に追いついた時、そしてヨーロッパで第一次世界戦争が始まってその文明の危機が意識され、ロシアに革命が起る直前に彼は死んでいる。』

その後の五十年のあいだに、世界の文明社会にも、日本国内にも色々な激変があった。しかし漱石が其の作品に描いた人間の生活の本質的なものは変わっていない。人々は自分の心をよりよく知り、社会と自分との関係を確かめるために漱石を読みつづけている。

知識人たちは、『吾輩は猫である』を読んで、にが笑いをしながら、自分たちにそっくりな人々がそこで談笑し、とぼけたり、まごついたたりしていることを感ずる。中学生は『坊っちゃん』を読みながら、その中に日本の典型的な教師たちと生徒たちが生きているのを発見する。また我々が家族のつながりをまともに考えようとする『道草』に描かれたものの反復として現実に我々の家庭があるように感ずる』と。

幾多の歳月が経っても、作品の価値が変わらないのは夏目漱石の人間的な偉大さを物語るものではないかと思う。

更に、小泉信三先生については常に尊敬していた方であるので、先生の著作されたものを愛読したい一念に駆られて、小泉信三全集が文芸春秋社から刊行されるのを知って、いち早く之を購入した。

小泉先生は、心から日本と日本人を愛し、その将来を真剣に考えておられた愛国者であった。先生は日本がまきこまれた戦争と、敗戦と、復興の三つの時期に、学者として、教育者として、勇気ある発言と、温い言葉をもって、日本

国民を導いて来られた。

先生の経済学者としての研究の深さについては定評があるが、本全集の前半は、先生の研究成果について記述されたものであり、専門の経済学に次いで社会問題についても、実にひろく、毅然たる識見をもって、その時々の問題をとらえて、世の中を警めて発言されたものであらう。

後半は、折にふれての美しい文章の随筆であり、日本を愛しつつ、国民一般に如何に物事を考え、事に処すべきかを教えられたものだと思う。

小泉信三全集は、名論文と名随筆の集大成であるが、第十一巻に「海軍主計大尉小泉信吉」がある。之を読んで、私は非常に感動した。

太平洋戦争の海戦に戦死された先生の長男の追悼のために執筆されたものであり、一般に公表する積りでなく、親戚知友のみに分けられる考えで書かれているので、子供に対する父親の心が非常によく現れている。総てについての深い思いやりが、至る所に実によく書かれている。それだけ、戦の為に子供を失った多くの父親の気持を、先生が代表して書かれているようであり、限らない苦悩を苦悩でなく、自分に、自分を納得させようという所が人を感動させているのではなからうか。

私は何遍かくくり返して読んだが、その感動は失せることが無い。読んだ者、誰しもがそうであらう。

作家井上靖氏は読後感を次のように書かれている。

『海軍主計大尉小泉信吉』を読んで非常に感動した。小説でも、随筆でも、いいものにつかまると、いっきに読み通すことはできない。時折べえじを伏せて物考えずにいられないものだが『主計大尉』の場合も同じだった。何遍もべえじを伏せ、ものを思い、また読み出し、またべえじを伏せることをくり返した」と。

又、獅子文六氏は書評として「小泉文学の存在することばかり唱えて来たが、これは最高傑作である」と言われたという。

広く世の人々に読まれる為に、単行本として、文芸春秋社から文庫本『海軍主計大尉小泉信吉』が出版されていることを付記します。

興味津々たる中に幾多の教訓を受ける本として、前大戦の名将として称えられた今村均大將の書かれた『私記、一人軍人六十年の哀歓』を挙げたいと思う。

特に私は、今村大將が、かつて聯隊長時代に一ヶ月間教育を受け、その人格の偉大さに傾倒し、非常なる感銘を受けましたので、その実例を記すことにより、筆を進めさせて頂きます。

今村大將は、大佐時代の昭和七年四月、参謀本部作戦課長より、千葉県佐倉市にあった陸軍歩兵第五十七聯隊の聯隊長として着任された。その夏、私は幹部候補生出身の在

郷將校として、同聯隊に教育召集を受けたのであるが、將校から下士官兵に至る迄「俺達の聯隊長は素晴しく偉いのだ」と皆今村聯隊長を誉め称えていた。最初は其の真相が解らなかったが、其の言動に接して、私自身心から尊敬した。今村聯隊長は出勤途上、練兵場において、初年兵教育教官である各中隊付少尉が、訓練している様子を馬上から見て「只今の、伍長の指導はまことによろしい」と心をこめ声を大にして激励されるのであった。下士官にしてみれば、自分の名を知られているだけで、大きな驚きであり、光榮であるのに、まして兵を前にして賞せられるに至っては、感激の極みであり、生死を共にする心境が自ら湧くのは必定であろう。まさに部下統卒の要諦である。

その年同聯隊は、特命検閲を受けることになっており、聯隊はその準備に全員懸命であった。或る日、將校集合のラッパが鳴り響いた。將校は直ちに聯隊本部前に集った。

今村聯隊長は全將校を前にして「諸官も知っておられる通り、当聯隊は大切な検閲の直前にある。皆一致協力して整然として成し遂げ得るよう努力されんことを望む」と訓示された。

其の時突然、或る中隊長が「聯隊長殿は只今私達に、整然として検閲を受けることが出来るようにと申されましたが、聯隊本部の前に集って、その情態を見ますと、或る窓は上にあがり、あるものは中程に留っているものもあり、

下に降りているものもあります。聯隊本部がこのように雑然としていて、どうされるのですか」と茶目けをふくんで質問した。集っていた將校は、今村聯隊長がどうされるのかと一瞬かたずを呑んだ。

今村聯隊長はやおら後を見られた後「これは悪かった。このようなこともあるから、力を貸し、協力してくれと言ったのである。終り」と言つて悠然として中に入られた。

誰が考えても、このような些細なことは聯隊本部上級下士官の取締ることであり聯隊長の関与することでないのは、皆知っている。

何も申訳がましいことを言はずして「諸官の協力を望むのだ」と言はれた度量、抱擁力の大きさには、皆一様に感服したのである。

聯隊の全將校から下士官兵に至る迄、今村聯隊長に心服している実状がよく判った。

斯くあつてこそ、陸軍の作戰要務令の中に示されている「指揮官ハ軍隊指揮ノ中樞ニシテ又団結ノ核心ナリ」と言えるのである。

私自身、僅かの期間であつたが、今村聯隊長から幾多の教訓を受け、多大の感銘を与えられたが、今村聯隊長は將來比類無き名將になられるであらうと推測した。

今村將軍の人格識見を知り、且學ばんとするならば、最初に掲げた『私記一軍人六十年の哀歡』前巻と続巻（芙蓉

書房出版)を読まれるに如くはない。

この本について、序文を山岡莊八氏が書かれておられるので、その要点を抜粋すると

「私がこれこそ皇軍の名将であったと、心底から頭を下げる人が陸海軍を通じて数人ある。今村均大將は、その数少ない名将の一人である。人格識見ともに、これならば、神ながらに、生きてまします天皇の司令官としてまさに皇軍の司令官であったと、今でもしみじみ頭が下がる。

今村大將は決して軍の下できわだって目立つほどの存在ではなかった。派閥や政治色で動く小さな人物ではないからだ。

十七年の三月、ジャワ派遣軍司令官としてジャワ島を占領すると、すぐに他の占領地区との差が目立つようになった。現住民は他のどの占領地区よりも親目的で、治安は保たれたし、住民保護も行きとどいた。

今日でも、独立したインドネシアの主腦者たちは、大將を神の如く尊敬し思慕している。こうした素晴らしい実績を残して、大將は十七年の十二月にラバウル方面軍司令官に任命された。

この時大將は宮中に召されて、天皇陛下に拝謁を仰せつけられ、陛下に特別の内命を下されたと聞いている。當時はガダルカナルで上陸軍が言語に絶した苦戦にさらされ、全滅に瀕している時だ。

陛下は大將に、何とかしてこのガ島の兵を救ってやってくれるようにお命じなされた。こうしてラバウルに急行した大將は、海軍の山本元帥と協力して、一万人以上の上陸軍を餓死寸前の島から救い出して聖旨に応えたのである。

それよりも更に大將の、名將としての面目をとどめているのは、大將がついに一度も戦争に敗れていないことであろう。ガ島の兵を引きあげさせると同時に大將はラバウルを文字どおり難攻不落の地下要塞を作りあげ、最前線でありながら、アメリカ軍にその占領を諦めさせて、隷下部隊を玉碎から救っている。その用意周到な作戦ぶり……これこそ皇軍不敗の真髓でなくて何であろう。

大將の信仰はキリスト教であったと聞いているが、日本の伝統にその信仰が加わって、慈と愛と徳と勇を兼備したほんとうの武將、ほんとうの皇軍の名將が出来上ったのだと私は思う」と言われている。

まさに、その通りだと考える。

『私記、一軍人六十年の哀歓』は今村大將の青年將校時代から、中堅將校、陸軍の中樞部に居られた頃、更に師団長、軍司令官の要職に就かれた時、その折に起った事柄に所見を述べつゝ記されているが、満州事変、二・二六事件等についての公平無私な考えは教えられることが極めて多い。激戦時に於ては、師団長として、軍司令官として「高邁ナル徳性ヲ備へ部下ト苦楽ヲ俱ニシ率先躬行軍隊ノ儀表トシ

テ其ノ尊信ヲ受ケ劍電彈雨ノ間ニ立チ勇猛沈着部下ヲシテ
仰ギテ富嶽ノ重キヲ感ゼシメ」(作戰要務令より引用)た
であらうと誰しも想うことであらう。

筆を擱くにあたって、感ずることは、何れの著作も皆、
「文は人なり」ということである。

(本会評議員・平川支会長)

下手の横好き「篆刻」

野 口 元

十数年前のことであるが私の住んでいる区のカルチャー
センターのようなところから各種の趣味講座への勧誘があ
った。講座の種目としては書道、絵画、陶芸、刺繍、編物、
民謡、ダンス等色々なものがあつた。秋の夜長の二時間程
の暇つぶしなので一寸様子を覗いて見ようかと考えた。さ
てどの講座を択ぶかについて、自分独りの趣味にしても他
人様にご迷惑にならないことが第一で、出来得れば喜んで
頂ければ更に結構なことであると考えた。書道、絵画にし
ても自分独りで楽しんでゐる中ではよいが、友人に差し上げ
ても必ずしも喜んで頂けるとは限らない。書にしても色紙
位のはまだよいとして、半紙となるとこれを表装しな
くては観賞の対称にはならないし、これを仕立てることも
大変である。結局、押入れの隅に大切に藏つて置いたので

は、遂には紙魚の餌食になるか反故紙になる結果となる。
絵画にしても同様である。人により好悪がまちまちである。
横山大観とか、川合玉堂の作品ともなれば格別であるが素
人の作品などは問題にならない。色々と考えた揚句篆刻を
択ぶことにした。これならば他人様にご迷惑を掛けること
もなし、差し上げてても邪魔にもならず腐ることもなく、気
に入らなければ机の抽出しに抛り込んで置いてもらふだけよ
ろしいのではないので、適当に処分していただければよ
ろしいのでこれに申込んだ。

月一回、約半年講習を受けることになった。講師は千賀
椿山先生で後に布施酔石先生である。一応の要領を修得し
てから先ず自分の名前を彫つて見た処意外にも何とか読め
るものが出来た。

元来篆刻とは、街の印判屋さんの「はんこ」とは全然異質のもので、素人の作った判子郵便の受取判にもならないものであり、一般には雅印と称する。銀行印、実印、公文書印のようなものは専門家の領域に属するもので、書で言えば楷書とか活字的なものであり、趣味の作品は雅印、遊印と称し、行書、草書に相当するもので一種のお遊び、正規の公文書などには使えない。

そんな訳で自分の名の次は家族の名を彫った。時には同窓会誌の投句欄にある友人、先輩、知人の俳号を作った贈った処意外の好評を得たので、引き続き短歌、詩友にも贈った、中にはその人の句集を戴いたこともある、又子供供の友人の卒業、結婚にはお祝の蔵書印を作った。これには挙式の年月日や「祝」「寿」など彫るとよい記念になった。

又或る講習会の修業式の時、皆勤賞として印を作ったことがある。当日までに十数個の印を作るとは仲々忙がしかったが、一般に印を贈った場合殆んど例外なく珍らしがられ喜ばれることが多い。稀には「この調子でこんな印を作った呉れ」と特別註文を受けることがある。こんな例は光栄の至りで、喜んでお引受けすることになっている。

作品に出来、不出来のある事は勿論であるが、作りにくい字体もある。又古い作品を見てよくもこんな下手な物を差し上げたものかと、忸怩たることも屢々で、いつか機会があれば取り換えて頂き度いと思うことがあり、自分の伎

倆の進歩が遅々として進まず、日暮れて道遠き感の切なるものがある。

前会長の野口明先生はよく自製絵はがきを作られその隅に「明」の小印を捺されることが多い。或る時戯に「明」印を贈ったことがある。そしたら直ちに「とてもよいものを作ってくれた」とご返事を頂いたことがある。それで次々と明といふ字のバリエーションを作って差上げた。先生は一般に余り凝った字。奇抜な字体は好まれなかった。誰にでも読める極くありふれた平凡な字体を好まれた。或る時先生の御尊父が、中国滞在中に彼の地の篆刻家に彫らせたといいふ多数の雅印の文言を読むようにと半紙に捺して送られたことがある。なにしろ五十年以上も使用していない印影は、殆んど判読不可能の状態であったので、印を微温の洗剤液に一時間程浸して、「柔かい歯ブラシで洗ってから捺して下さい」とご返事申し上げた処、今度は立派な雅味ある印影を送って来られた。印の損傷もなく又当代随一の印人の作品であるから実に立



昭和47年作

派なものであった。後に先生のお宅で実物を拝見したが、全部田黄、鶏血といった貴石のみで、側面にも花鳥詩文が刻され風雅なものであった。

晩年、先生から半折用の「極観居士」俳句用の「芋村」「番町半画人」などといふ雅印のご註文を頂いたことがある。先生は先ず印稿を作って送るように、と言われたので、数種類の型のものを作って送ったところ、先生はその中の最も平凡で単純なものを選ばれた、例えばこれは先生の性格の現われと思うが先生はよく絵画などで「個性的」といふ語が使われるが、先生は「個性がむき出しになった絵はよくない。個性を極力押えたところに本当の美がある」と言われた。私は英国十九世紀頃の朦朧体の絵を想像した。又芋村の村は、篆刻では邨といふ字を使用するが、先生は

村を採られた。

先生は揮毫をされることは決して少なくないと思われるが、ご自分の作品に自署落款を押されることは減多になかった。従って、上記の印をご使用になった作品は見たことがない。或いはお気に召さなかったのかも知れない。

近頃眼の老化現象が進み、鉄刀を握ることも少なくなり、書道展に行っても専ら落款印、篆刻作品を見ることにしている。展覧会に出品される篆刻作品は、この十年間に数十倍にも膨れ上がり盛況を極めている。然し、その各々が鬼面人を驚かすようなものが多く、実用に適するようなものは少なくなってしまった。前衛書道や一字書きと同様これも時代の流れと思ふが、吾々のイメージから段々と離れて行くのが淋しい。

(本会特別会員・野口病院々長)

「わが趣味」随想

荒 木 敏 鎌

はじめに

およそ誰を紹介しようとするとき、まずその人の学歴、職業の内容について語り、さらにどんな趣味を嗜んで

いるかが解れば、その人に対する社会的信用のほかに私生活の在り方を感じ取ることができ、自ずから人間像が浮き彫りにされてくるものである。

ところが、一般に「趣味」という概念はイギリスの諺にも「趣味は説明することができない」ほど物心両面に亘ってさまざまな含みを持ち、個々人の性情が異なるように享受される対象は多種多様であり、俗にいわれる「蓼食う虫も好きずき」なのである。

英語では趣味を表わす用語として①Taste（好み、審美眼）②Hobby（道楽、好きなど）③Favourite（得意とするもの、お気に入り）などがあるが、何れもその人なりの主観的な感覚から人間らしい生き方を追究してゆこうとする強い心理的欲求から生れるものである。

それにしても中には趣味らしい趣味でなく、人を「怒る」「貶す」趣味もあれば、くだらないものを買集めて自慢する人もいるが、他人に迷惑であっても、本人自身がいい気分になって楽しんでいるようなのはモラルから見てもよくない趣味だと思う。

さて兼題の「わが趣味」についてであるが、誠にお恥ずかしいが私は先天的素養に恵まれなかったことと、時間的、経済的にもゆとりがなかったために、これと云った定着性のある趣味に巡り合えなかったことを残念に思いながら、今までに愛着と情熱を傾け、印象に残った思い出のいくつかを拾い上げてご紹介することと致したい。

親譲りの趣味

私が未だ小学生であった頃、父は万国郵便切手やコインの蒐集に凝っていた。

例えば一枚の切手を取り上げ、世男地図やカタログと首引きで発行にまつわる故事来歴、稀少価値などを調べ、
「これは珍らしい！」と喜んでいたことを覚えている。思えば父は、自ら楽しみながら子供達に国際的な教養を身につけさせ、また商品に対する価値観を教えるとともに、一つの事に没頭する研究心を養成しようとする親の意図であったと受け止めている。これが機縁となって、日本の記念切手収集を長い間続けて来たが、今日のように発行頻度と発行枚数がこう多くなつては、価値の低下を来していることもあって、興味も薄れ今では手を引いている。これに反し、記念コインは二・三年に一度位だから発行日を楽しみに無理をしても入手に努めている。

因みに、父がとくに大切にしていた日本の珍らしい切手で値打ちがあると思われるのは、明治四年発行の日本最古の手彫り普通切手「銭一〇〇文・二〇〇文」をはじめ、昭和九年四月発行の「通信記念日制定記念」（発行枚数二万枚）や昭和二十七年発行の立太子礼記念の「儀式かんむり」一〇銭切手（同八万六千枚）などが保管されているが、そのなかでも稀少価値のとくに高いもので

ある。

余談になるが、父は切手のほかに囲碁については寝食を忘れて熱中し、最期は命取りになってしまったほど好きであった。

ある暑い夏の夜、雨戸を開け放しで徹夜の対局となり、夜明けに戸閉りを忘れて寝てしまった隙に泥棒に入られる騒ぎとなり、翌日母が道楽が過ぎると禍を招く良い教訓とばかり、父に将来子供に基は絶対に教えないでくれ、とご法度を命ぜられたエピソードが思い出される。しかし、今となつては若い頃に囲碁を習っておけばよかったのにと後悔しているのである。

父譲りの切手だけは、心のこもった貴重な遺産であるばかりでなく、当時私に選んでくれた趣味と実益を兼ねた賢明な教育方法であつたと思うので、父に倣い孫達にも伝授していくことを楽しみにしている。

サラリーマン時代―仕事の鬼―

銀行に勤めて駆け出しの新婚早々の頃、仕事に厳しい上司から「毎日仕事に忙しいから帰りが遅くなることを奥さんによく云い聞かせ、教育しておきなさい」と、帰宅時間を気にする私に釘を刺し、日々鍛えられたことが強く印象に残っている。

時恰も戦時中で、国民総力戦の最中だったので、統後を守る男性は寸暇を惜んで働き、仕事一途の滅私奉公に徹し、文字通り「勤勉は美德・仕事即趣味」に人生の生き甲斐を感じた時代であつた。しかも、残業時間数の多い人ほど昇給率も高く、週四十時間を超えるのも珍らしく、かえって誇りとさえ感ずる位であつた。

果せるかな、日々の単調な仕事に飽きが来たのか、われわれ同僚の一人が「仕事の鬼」になることを憂い、石川啄木の「働けど働けど猶我が生活楽にならざり……」を毎日のように口ずさんだサラリーマン生活の味気なさを歎いていたのも懐しい思い出である。

それが今日どうであらうか！ 労働時間、の短縮が声の大にして叫ばれ、週休二日制の普及が滲透し国民生活の余暇時間の有効活用を奨励するご時世になろうとは、夢にも考えられなかったことである。

思えば当時、電算機やテレックスと云つた便利な武器もなく、一人々々がこつこつソロバンを弾いて日計表を作成していたので、貸借バランスする迄に随分長い時間がかかった。やっと一銭相違まで漕ぎつけると「戦いはこの一戦にあり」といつて総がかりで発見に懸命になつたものである。とくに取引量の多い大晦日などは職場で元旦を祝い、それから家に帰って二番正月を迎えるのが恒例のようになつていた。まことに馬鹿げた話だったが、そこには一致

協力の精神が漲っていた。

熱中したテニス

戦後の平和が訪れ、芋畑や菜園が漸くテニスコートなどのスポーツ施設に復帰するようになった頃、仕事から解放され、週末には友人とコートに出かける余裕ができ、テニスに熱中するようになった。テニスを終えて汗びっしょりになり、それから一風呂浴びて心身爽快になったところで、冷たいビールを一気に飲み干す最初の味こそ「これがテニスの醍醐味だ!」と云って楽しい歓談に花を咲かせたものである。

私はよく若手の愛好家達に、(1)テニスは勝負だから相手に勝たなければならぬが、勝負にこだわることは嫌いだ。それより心身を鍛え、明日へのエネルギーを蓄えることが大切である。(2)テニスを通して人と人との和と信頼感を深め、人間関係の向上をはかることに意義があると、趣味と実益の談議をよくしていた。

ところがある日のこと、若手男子行員が一人の女子部員を連れ、私にテレコ調で「荒木さんの仰言る通りです。僕の信頼するこのパートナーと婚約することになりました」と紹介してくれたので早速祝福の乾杯をした後、恥ずかしそうにセルフタイマーを使って記念撮影をした思い出が、今でも心の中に深く残っている。

「類は友を呼ぶ」の通り、共通の趣味を通して随分多くのよき友人と出会ったことは、生涯に限りなく大きなプラスとなり感謝している。

ビリヤードに転向

長く続いたテニスも、体力の限界からお別れしなければならなくなり、五・六年前からビリヤード(四つ玉)に興ずるようになって今日に至っている。

ビリヤードは大学時代、講義の合間の暇潰しに息抜きとなる手頃な遊びであった。ところが金銭を賭け、負けた者が玉代を払わされるとなると、勝負にこだわりだんだん深入りし、挙句の果てには成績も下り、落第する学生もいたのでその頃の玉は危険な遊技とさえ云われていた。しかしわれわれの仲間は余暇を楽しむお年寄りばかりで、老化防止とお互いの親睦のためにやっているのです、プレー中は精神を集中し玉の行方を追っている今日此の頃である。

以上、私は「切手」「働くことが唯一の趣味」「テニス」そして現在情熱を傾けている「ビリヤード」について、それぞれ体験し、感ずるところを述べたが、このほかにも独学で弾いたバイオリンや人から奨められて謡曲、俳句などにも手を出したが、いづれも途中で挫折してしまった。一つのことを習い始めて五年も続けられれば人に話せる程度

にはなると思うが、芸ごとに限らず何事も楽しむ域にまで到達するには努力もさることながら、若いうちに基礎を習得しておくことと、その筋の専門家について手解き^{ほど}をしてもらわないと上達しないことを痛感している次第である。

おわりに

日本も長寿国になった今日、余命をどう過ごすかが重要な課題である。

ある名医が「定年になったら、こちらから金を払ってでもよいから、心を打ち込んで出来るような趣味を持つこと、そして悠々自適などということは、医学的には恍惚に近づく方法である」としか考えられない。脳も使わなければ委縮

するから、絶えず刺激を与えて神経細胞が活動するようにしておくことが大切である……」と、趣味がいかに生活の否、生命の活性化に役立つかを説いているのである。

ところが現在、休みが増えても何もすることがないと訴える人が以外に多く、「テレビとごろ寝」で、貴重な余暇時間を無駄使いしているのは勿体ないと思うと同時に、健康保持のためにもよくないことである。

趣味をもつことは人生を楽しくしてくれるものであることを自覚したとき、これが長寿への秘決に繋がるのではないだろうか。

(本会々員・日本興業銀行OB)

本職即趣味、即道楽

飯 塚 一 雄

はじめに

この稿を綴るに当り試みに広辞苑を繙く。趣味の項は「専門家としてでなく楽しみとしてする事柄」とあり、道楽の項は「本職以外の趣味などにふけり楽しむこと」とあ

る。これが社会通念であることは一応うなづける。けれども、私には疑問が残る。

世間には自分の本職でやっていることが即道楽であり、専門家は自分のやっているものが即趣味であることも数多

いと思う。

大成した人、輝かしい業績をあげた人たちの多くはこのような生き方の人である。また世に知られなくとも、このような生き方をしている人も多いにちがいない。他に楽しみとしてする事柄をもたなければ、これらの人を無趣味な人だといってしまつていいのだらうか。「専門家としてでなく」「本職以外に」と限定しなくて、趣味や道楽を広義に解してはいかがであらうか。何もこだわつてはいない。

ただ、人間としての生き方は大切でむずかしい。趣味道楽は、その生き様に人それぞれにふさわしい潤いを与えてくれるから、真摯に考えたいのである。

私は本職即趣味、即道楽を生き方の最良と考えている。幸せと思つてゐる。そしてそれが活私奉公である。

趣味 (一) 人づくり

私は教職を生涯の職としたのであるから、趣味は教育即ち人づくりであり、社会の浄化に関する事柄にたずさわることである。

私は医師を志していた。父は司法官を期待していたが、中学の卒業を間近かにして、猖狂熱に罹患、受験日を逸して夢は両つとも消えた。

運あつてか、東京青山師範二部に入學。ここでの勉強が私を「ノラ」にした。本当の生き方・真の自己そして個性

に適合する職業を探し求めて、ますます迷ひ出し、同校専攻科（教育学・哲学）中大（法）東京物理（物）と異質な学校を遍歴した。その末、教職を生涯の職と選び決めた。時既に三十二歳。ずいぶんな回り道をしたものである。しかし、爾後生徒指導上貴重な体験となつたので悔はない。本職即道楽即趣味の考え方もここに端を発する。

もし、趣味の産物・果実はと問われれば、「東京では教え子の一人々々です。」と躊躇なく答える。

二十三年の春、老母重症との報をうけ、爾後は島根の教員となることを決意した。島根では初年度を除いて、管理職に就任、県教育庁と学校現場とを交互に勤務したので、趣味の産物果実は東京と趣きを異にすることになる。私には島根の後進性が頻りに目に付き、都鄙の格差解消が、さも婦郷の使命であつたかのように、先導的試行を教育の各分野において熟慮断行した。内容が多岐にわたつてゐる。幸い良き同僚たちに継承されて、その殆んどが現存してゐる。時に機を得てそれらを見聞すると、次に書く第二義的趣味の陶芸の作品を観る時の思いと通う。

この執稿中、私の教え子で都立六中卒のS君（現東北大学教授・世界地球地磁気学会々長）の海外出張先からの便りがあり、懐旧の憶ひ頻りなるままに、ペンを走らしてゐる。

二十年五月、東京大空襲でわが家全焼。妻子の移り住む

島根の老母のもとに、裸同然辿り着く。父遺愛の紋付羽織を背広に仕立直し、それができると再び上京。母や妻は啞然として「東京に住む家は……」という。私は生徒たちが今日も空襲下で待っている、との声を残して……私がそばにいて極力死の危機から救ってやりたいの一心。彼らは日本が勝てばなおさら負けても将来は国民の指導者となって、諸外国との交流に当るようになる人材。国の宝である。

作業時間を割愛し、彼らに英・数・理の学習をさせたいと工場長に強談。工場長は道理のわかる人であったが、軍の監察と生産の低下を恐れ、かつ私の身上を案じて「切腹ものです。」と拒否。執拗な交渉に誠意は通じた。

日に一時間半の学習が、予想通り彼らを飲酒・喫煙・怠慢の一般工員のみだらさから救った。そのみか増産にもつながった。

やがて敗戦。全員無事。工場長の厚意は乏しい配給物資を集めての生徒たちとの送別会であった。彼らは今や東大および他の大学教授や中央官庁の部局長OB、大会社や著名な金融機関・NHK等の重役等々である。

まさにこれも、私にはうれしい趣味の果実である。

趣味 (二) 創造

口さがない友人に、君の道楽もついに土と火に到ったのかと冷やかされてから、もう十余年にもなる。いまだに思

い通るの作品の一つもできないままに、齡はこの九月で喜寿を迎える。若い頃、趣味は僅少をよしとするとの友に對し、敢えて多趣味も亦可ならずやと意地張ってきたものの、所詮は才能不足、加えて本務第一主義で生活してきたから、何れの趣味も横好き程度の出来上りである。

幸い、種々な分野にわたって雅友ができ、余生に楽しみが多いのはまことにありがたい。

紙面の都合で陶芸以外の趣味については割愛するが、作陶をはじめたのは、退職後郷里の家に住みついてからのことである。宵祭の散策に同好グループの作品展を見、その指導者が出雲古窯の一つ御代窯主であることを知って、仲間入りを決意した。

両掌でもみながら粘土の細紐をつくることからはじめた。均一の太さに、長く、が苦心であった。漆工家で名の知れているS氏、数奇者のN氏等、加入が相ついで総勢二十三人となり、会は活気をおびてきた。一年余り経て、誰言うことなく自分らのまき窯と作業場を新設しようということになった。

町並みの背後の秋葉山と古利洞光寺の狭間にある寺領(約四三〇 m^2)を借用し、倒煙式二段の登り窯と木造二階建の作業場(建坪約一三〇 m^2)をつくり、「木次秋葉窯」と命名。陶土は御代窯付近のもの、燃料は松材、会則もつくって町の文化向上と活性化に資することも目的の一つと

した。

当町には江戸末期に米田窯と称する窯があった由であるが、今ではその跡形もないのでその復元をもひそかに考えた。

開窯当日は知り合いであることに甘えて、知事（田部長右衛門氏）に一席の講話をお願いした。幸い都合をつけて来窯いただき、かつ、三十分間予定の講話が二時間にも及ぶ体験談となつて一同感謝。同知事並びに次期の知事（恒松制治氏）も、その後任期二度も町長の案内で来窯。二階での粗茶一献に寛がれた。

因みに田部知事は全国屈指の山林王、茶道・書画・陶芸の達人、柔道、囲碁五段、竹下首相を政界に送り育てた人といわれている。

われわれの熱はいよいよ高まり、各人各様の陶土をつくったり、釉を研究したり、町の文化祭には毎年陶芸展を催して全員出品。県展に入選入賞するものも数名となったが、他面、個人差も大きくなつて熱意を失う者も出はじめ、赤字解消と共に苦勞も絶えない。レクリエーションを兼ねて春秋には県内外の窯見学。省力のため購入した電気窯は島根国体の時、わが町がソフトボール会場となつた際に大いに役立った。町が来町した選手役員に贈呈する郷土産品としてぐい呑三千個の製作を依頼したからである。このぐい呑には、町に縁の深い八咫大蛇と山陰随一の桜並木を表象

する図を手描きして焼成。予想外の好評で、慰勞会には隠し芸も続出した。

今でも町当局商工会等から、時々ぐい呑の依頼があつて、赤字解消の助けにはなるが、ぐい呑作りは会員の好むものではない。

小学校から作陶指導の依頼、児童の瞳の輝きに接するのは楽しい。

窯変を期待して、ガス窯も最近購入。電気窯同様盛んな使用を願っている。

齡と共に私の体力も低下、腕の使い過ぎで痛み出し、ここ一年半余は作陶を休んでいたが、夏に入つて癒えたので意欲も出てきた。

また、睡眠や食事時間のことで家内に余計な心配をかけることになりそうである。

研修課題は山積している。特に釉について然り。窯業社にはいまだに、秘法という閉鎖性が強い。誰もポイントをはずして教えてくれる。よしんば正當に教えてもらったとしても、土の種類と火の温度、焰の具合で、千変万化する。

陶芸はどこまでも、自己と土火との闘いであるらしい。

（本会々員・元島根県教育委員長）

「読書」と「百人一首かるた」

林 田 武 雄

(一) 「読書」について

ご依頼を受け、編集の都合もとを考え、すぐ承諾の返事をした。しかし、果して自分にどんな「趣味」があるのか？、いつも私は、「無芸大食（実際は小食だが）」で、「(1)、物事についている面白味、味わい。辞典には、「(1)、物事のもっている面白味、味わい。(2)、物事の味わいを感じ取る能力、またそれによる好み。(3)、専門としてでなく、楽しみとして愛好するもの。」とある。つまり、「専門でない愛好」であろう。私は、紳士録への登載には、「読書、演劇など」と記している。

私は、「教職」が多かったが、雑多な本を多数、幼児の頃から濫読し続けて現在に至っているので、「読書」も「趣味」と言えよう。傘寿を越えた現在も、「読書」に耽っている。通俗小説、時代もの、推理もの、滑稽もの、川柳等を楽しんでゐる。

私の「読書趣味」は、実に、幼少年時代に源を発しているのである。

私は、明治四十年八月、千葉県の草深い片田舎生まれだ。田舎政治家であった父による早教育（主として読み書き）で成長した。学務委員だった父の縁で、毎年三月に行われる村の学芸会に、満四歳で、「児童心得」を、満五歳で、「教育勅語」を、満六歳で、尋常小学読本巻八の二課つづき「楠木正行」を暗誦させられた程である。幼時から、実業之日本社発刊の「幼年画報」「日本少年」「少女之友」や、「幼年世界」等を読んでいた。小学校入学後は、更に「良友」「少年倶楽部（講談社）」「金の船」等による童話や小説など面白く読み、また、父の「講談倶楽部」等も読んだ。真の内容理解は無かったろうが、筋を辿り、興味を覚え、読書力が長じ、物知りにはなった。更に担任の女の先生からは、「婦人世界」等をお借りした。一方、当時全盛の「立川文庫」で、猿飛佐助、霧隠才蔵、後藤又兵衛その他を興味深く、ために、家康を後々まで、狸爺と悪く思った。先生の話す面白いお話は、たいいて既に読んで知っているの

で、大変迷惑だったろう。

「十歳^{とお}で神童、十五で才子、二十歳^{はたも}過ぎれば、唯^{ただ}の人」という言葉があるが、父は、私を読み書きによって「神童」に、と考えたか。

旧制中学校でも「講談」の雑誌、「立川文庫」は相変わらず。当時発刊された「童話」や「新青年」等、また多数の文学者による児童文学、例えば、「蜘蛛の糸」「杜子春」「一房の葡萄」「善太と三平」その他、「アンデルセン童話全集」等。卒業近くには「文芸春秋」「キング（講談社）」等が創刊されて、読むに事欠かぬ有様であった。これらの多読、濫読によっても、幸、学業に悪影響を与えず、優等生、特待生として、父の目ざす「才子」の名は、どうやら辱しめなかった。この濫読も漸く反省されて、「日本文学」に重点を置くようになり、旧制中学卒業後は、「唯^{ただ}の人」であった。

私は、石川啄木の「日本一の代用教員」の言葉に刺戟されて、小学校の代用教員になった。その頃から、「円本」の洪水で、明治大正文学、世界文学、大衆文学等について、多くの全集が刊行された。特に改造社の「現代日本文学全集」は菊版で、一頁廿一字、廿四行、三段組で五〇〇頁近くの本もあり、この全集だけでも、明治大正文学の略々全貌を窺い知ることが出来た様で、後日に益するところ大であった。

代用教員勤務で感ずるところあり、師範、高等師範に学

び、多くの文献に接し、本格的、系統的な「読書」に転じ、後日、論文や書物を書くことが出来るようになった。これも、幼少年時の「読書習慣」に負うところであった。

その後の生活中、「読書」にのみ専念出来たのは、昭和廿年〜廿二年の時で、終戦後の「信越北陸区教員適格審査会」で、富山師範教授兼附属国民学校主事（校長）時代における、戦争協力諸論文等の審査による適格保留中、疎開先の農家の狭い一室でひたすら読みに読んだ。その頃、「新潮」「文芸」「中央」「公論」「改造」等の復刊、「群像」「人間」「展望」その他の創刊もあり、文壇の既成大家、新進作家多数による数多くの力作を、日夜耽読し続けたのであった。

私は、昭和二年の現役入営時に、「徒然草」等の携帯許可を受け、昭和廿年、太平洋戦争応召の際も、岩波文庫「古事記」等を持ち込み、「読書」の中絶は無かった。

教員適格、帰県後も、「読書」には縁深く、「県高校図書館研究協議会」を創設したり、小・中・高連合の「県学校図書館協議会長」「全国学校図書館協議会副会長」大学の「図書館運営委員」等を務めた。また県の優良図書選定にも参画し、審査員として廿余年、青少年向け優良図書二二〇〇余の推奨にも関係し、「読書感想文」の審査も続けている。

今後、「趣味」としての「読書」に埋もれ浸ることで

余生を送ることになろう。

(一)、「百人一首かるた」について

「む・す・め・ふ・さ・ほ・せ」とは何か。これは、「百人一首かるた」の一枚札である。ここでいう「百人一首」は、わが国中世初期の大歌人、藤原定家が、嘉禎元年（一二二五年）ごろ、小倉山荘で、古来の歌人百人から、一人一首ずつを選び集めた和歌集を指す。これについては、記した「色紙」や、「歌仙画」についても多くの関心が持たれているが、私の「趣味」としての「百人一首かるた」について幼少時代の思い出を通して述べたい。

私の幼い頃から、近在の青少年男女による「百人一首かるた」遊びが盛んだった。「いろはかるた」等にあきたらない私も大変関心を持っていた。八歳頃、父からの東京土産に、「百人一首」の「かるた」を貰い、嬉しくて早速読み始めた。作者名が、「法性寺入道前関白太政大臣」——ほっしょうじのにゅうどうさきのかんぱくだいじょうだいじん——と長いもの、「伊勢」——いせ——と大変短かいものに驚き、「坊主捲り」遊びでは、裏返し読み札をめくり、十二単衣の絢爛に包まれた姫（女性）があらわれると喜び、粗末な衣姿の僧（坊主）が出るとがっかり、華麗な纏緋縁暈の皇族等の官人（男性）のりっぱな出現に目を見張った。しかし、遊びの本命としては、「かるた取り」で

あって、私は、歌の暗記に熱中した。父の土産は、変体仮名、草書まじりのちらし書きで、読みにくい。しかし、我が家での「かるた取り」では、文字の形で覚えて私に有利であった。やがて、総平仮名の「標準かるた」が使用された。「好きこそ物の上手なれ」の言葉通り、私は上達して、やがて近隣では、一流の「かるた取り」になった。「散らし取り」では、好きな札はのがさなかった。当時多く行われたのは、多数集って、源平二組に別れての対抗戦で、私は一方の有力な一員となった。この遊び方は、尾崎紅葉作「金色夜叉」第一章はじめにある、例の美女、「宮」、学生、「間貫一」、ダイヤモンドの指輪の金持、「富山」の登場する「かるた遊び」、三十余人の男女が華やかに勇ましく遊んだ「源平戦」であった。当時の流行がうかがえる。しかし、私は、個人対抗戦に興味を覚え、だんだん専門的な廿五枚持札、三段配置のやり方に進み、次第に上達して近隣の第一人者として天狗であった。ところが、旧制中学卒業後間もなく、遠征（？）先で一青年にさんざんに打ち負かされた。意気消沈した私は俄然発奮して、組織的な準備・練習に熱中した。カードを作成して、一枚札、二枚札……の暗記、並べ方等を考え努力し、ある程度上達した。冒頭の「む・す・……」は、この暗記した一枚札のことである。

しかし、後に高等師範入寮後、寮の「かるた大会」に臨んで、「井の中の蛙」を痛感した。偶然、桔抗の相手佐野

君が入室して来たので、お互いに切磋琢磨を続けた。きまり字の暗記はもとより、競技進行中のきまり札の扱い方。

上・中・下三段の配列の工夫、見ずとも札に触れ得るよう。相手への送り札、姿勢、手のあり方、音感等々、練習を重ねた。したがって、相手の堅守する札を瞬時に飛ばす等の快感。しかし、私はあくまで「趣味」としての「かるた取り」である。その後は、任地、任地で楽しく遊んだ。専門的選手なら協会に所属し、段位を持ち、選手権、クイン権等の獲得を目指して、日夜必死の修練を積んでいるであろう。

旅は人の心を拓く

人には個有の職業のほかに、何らかの趣味があり人生を潤し、楽しくさせておられます。

趣味には碁、将棋、麻雀、カード、美術（絵画、彫刻、建築、陶芸）音楽、演劇、映画、写真、書道、華道、茶道、各種スポーツ、魚釣り、園芸、自然、動植物の愛護や研究、各種マニヤ、旅行、読書などかず限りがありません。

老境の現在は、実戦は極めて稀で、和歌の鑑賞や註釈書を読んだり、更に、尾崎雅嘉の「百人一首一夜語」等の関連話等にも興味を持ちつつある。大学等での日本文学思潮を講じた際は、おのずと、「あはれとも……」、「さびしさに……」、「わびぬれば……」等の例歌が浮かぶ。

若人達の「かるた取り」遊びは、今もなお盛んで、「聖心」に学んだ孫娘達も、正月には、着なれない振袖姿で、「金色夜叉」での「嫁選び」の思わくはなく、すこぶる明朗かったつに楽しんでいる。

（本会々員・元千葉敬愛短期大学教授・副学長）

寺 崎 隆 治

また趣味と内容は似て語感を異にするものに道楽というものがあります。道楽というと、道を解し、これを楽しむこととありますが、民謡の会津盤梯山にでてる「おはら庄助さんなげ身なげみ上あがつあがぶした」のように酒色に溺れ家財を蕩尽し家族、親類、友人等に迷惑をかけることを連想させますが、

これは趣味でも道楽でも度をすぎすと家族や他人に迷惑をかけることを戒めた民謡で、フィクションであるともいわれております。

私には特別に深い趣味はありませんが、大正八年から終戦まで二十六年間海軍に勤務し、日本の各地や、練習艦隊その他で、世界各国を廻った関係で旅行に興味を持ち、終戦後も、しばしば国内及び欧米各国、東南アジア、豪州、ニュージーランド、韓国、台湾、中共などを旅行いたしましたので、旅行を通じ、私の感じたことを申し述べたいと存じます。

第一・国内旅行について

俳聖芭蕉は奥の細道を百六十日間、六百里も歩いたといえます。私もその一部の日光、郡山、飯坂、仙台、塩釜、松島、石巻、平泉山寺、越後、富山、金沢、山中温泉、永平寺、福井、敦賀、琵琶湖大垣などに参りましたが、今から約三百年前（元禄二年）の芭蕉の旅行は、大へん難儀したことと思います。その読まれた千句といわれる作品を通じ、芭蕉が元禄三年弟子の去来にいわれる俳諧の道は「不易流行の教え」で「俳句には、千歳不易の句と一時流行の句というあり、その元は一つなり。不易を知らざれば、基立ちがたく、流行を知らざれば風ならず。不易はいにしえによりしく、後にかなう句なるゆえ、千歳不易という。流行は一時一時の変にして昨日の風、今日よろしからず、今

日の風、明日は用いがたきゆえ、一時流行とはいふ。」のであります。

これは芭蕉の到達した風雅の極致であって万代不易と時々刻々の変化の追究であり、支那の兵学家孫子の兵道は、兵理尊重と変化即応と相通するものがあります。

国内各地の名所旧跡を廻って気のつくことは神社、仏閣、お城、遺跡、美術館、博物館、歴史民俗館、銅像、記念碑など沢山ありますが一代の天皇や皇室に関係しないものはないといっても差し支えありません。

西村茂樹先生（伯翁）が、わが国の皇室は万世一系世界無双であり、道德の源であるとされ、日本弘道会綱領第一に「皇室を敬愛すること」とされていることはもっともであると思います。

終戦直後、日清、日露戦争、支那事変、今次大戦の戦没者の忠魂碑、記念碑、銅像などは進駐軍の占領政策によって撤去されましたが、昭和二十七年四月二十八日、サンフランシスコ条約により平和が回復するや、国民有志により再建され、現在は、北は北海道より南は沖縄に至るまで全国津々浦に、りっぱな慰霊碑、記念碑が立ち、毎年各地で盛大な慰霊顕彰の式典が行われております。

戦没者の遺族を訪問し、一番感じますことは戦没された故人の遺志を継承し、あらゆる困難を克服して遺児をりっぱに育て上げ、日本のため働いておられることであります。

また神棚、仏壇、お墓を綺麗にし、大切にお守りしておる家系は、世間から尊敬され繁栄していることであります。

九州筑後（熊本県）の忠臣菊池武光は正平三年（一三四八年）後醍醐天皇の皇子懐良親王、その没後は後村上天皇の皇子良成親王を征西將軍にお迎えし、矢部の山奥にある内親王のお墓を子孫代々今日まで二十数代六百数十年にわたり、お守りしております。

わが国の今日の経済力は自由陣営第二位といわれ、平和を享受しておるのは、今次大戦で祖国に生命を捧げた二百三十万余柱の英霊と国民の勤勉努力によるといわれておりますが、そのバックにある日米安保条約による米国の防衛力と僅か三十万人足らずの陸海空自衛隊で、日本の安全、平和を維持し、米国から先端技術を導入、優秀なる工場設備をなし、資源を海外から輸入し品質、性能優秀で安価な製品（自動車、オートバイ、半導体、テレビ、電気洗濯機、カメラ、時計、工作機械等）を外国へ輸出し黒字国となつたからであります。ひとたびペルシャ湾からの石油や海外からの資源がストップすればわが国の繁栄は樺花一朝の夢と化するであります。その対策を真剣に考えるべきであると思います。

日露戦争のとき、日本海々戦の連合艦隊旗艦が三笠であり、司令長官が東郷平八郎大將（のち元帥）であることを知らず、東郷平八郎と読む若者もおります。横須賀にあ

る記念艦三笠や、東京原宿、埼玉県飯能市吾野町、岐阜市安良田町、福岡県宗像郡津谷崎町にある東郷神社を知っているものはあまりありません。中学校、高等学校の教科書四十五冊中、東郷元帥の名が出ている教科書は二冊だけあります。文部省は本年末十一年振りで学習指導要領を改定し、日本にとって大きな働きをした人物として聖德太子、聖武天皇、藤原道長、紫式部、源頼朝、徳川家康、西郷隆盛、福沢諭吉、伊藤博文に東郷元帥を加え、十人とするものでありますが、東郷元帥は、日本海々戦でロシアのバルチック艦隊を撃滅し、これによりロシアの極東侵略を防ぎ日本の独立を保全して世界的地位を高め、アジア諸民族を奮起させた名將で、英国のネルソンと共に世界各国に知られている人物であります。トルコ、フィンランド、ポーランドは、今日でもその恩恵を大へん感謝し、フィンランドではトウゴビービルを販売しております。

第二・海外旅行について

○人と人との出会いを大切にすること

これは日常の生活においても、国内の旅行、海外旅行においてもみな同じであり、極めて大切なことであって、良友を得ることは一生を通じはかり知れない利益をもたらすものと思います。

今から一三八〇年前の聖德太子の作といわれる説法明眼論という本の中に「一樹の下に」と題し次の教えがありま

す。

「或いは一国に生れ、或いは一郡に住み、或いは一県におり、或いは一村におり、一樹の下に宿り、一河の流を汲み、一夜の同宿、一日の夫婦、一所の聴聞、暫時の同道、半時の戯笑、一言の会釈、一坐の飲酒、同杯同酒、一時の同車、同暈同坐、同牀一臥、軽重異なるも親疎有るも皆是れ先祖の結縁なり」

これは徹に入り細にわたり、よく出合いの大切なことを表現したものであると思います。

私の先輩で大恩人に保科善四郎海軍中将（終戦時の海軍軍務局長として御前会議に列席した唯一人の生き残り）がおります。昭和三十九年佐藤栄作総理は、小笠原諸島、硫黄島の返還を米側に強く要請しましたが、どうしても返還してくれません。そこで、米国海軍首脳部に友人を持つ衆議院議員保科中将を秘かに米国に派遣し、その友人のバーク大將（のち作戦部長）を訪問してもらったところ同大將は大へん喜んで迎えられ、ボルチモア近くの自宅に招待、懇談され、米国海軍の返還反対の理由が小笠原、硫黄島はサイパンの前進基地として是非とも必要であるが、日米友好親善のため返還に同意、努力することを約束、その後、わが外務省と国務省の折衝となり、昭和四十三年六月返還され、次いで四十七年五月沖繩の返還となったのであります。

私も海外旅行のお蔭で、英、米、豪州、トルコ、幹国、

台湾などに友人を持ち交遊しておりますが、昭和五十三年十一月・十二月号の「弘道」に「人生は人と人との出会いである」との随想を掲載していただいたところ、弘道会員伊達文蔵氏の共感をいただきご招待を受けて交遊を続けておりますが、氏は神戸高商、東京商科大学（一つ橋大学）の出身で非常に美術、音楽、風景、写真、演劇、史跡等に趣味を持ち文学に長じ「旅の思い出」「歳月わが喜寿抄」「石寿を迎えて」等の自費出版物を寄贈下さったが、これを読むと、日本はもちろん、世界各国を旅行され、世界の美術、音楽、風物に接する感があり非常に私の人生を豊かにして呉れます。その中に京都の桂離宮のすばらしい写真が五枚ありますが、ドイツ人で来日した世界的建築家ブルーノ・タウトが桂離宮と伊勢神宮の簡素、明澄、清純、綺麗は、建築美の極致であると絶賛されておりますことは忘れることができません。

欧米各国を旅行し誰でも気のつくことは各学校、市町村にりっぱなキリスト教教会があつて、毎日曜日の朝学生、男女が教会を訪れ、敬虔な祈りを捧げ、静かに牧師の説教をきき嘘をいわないこととか、正義、犠牲、愛の精神など宗教を通じて道徳を身につけさせていることであります。また英国のオックスフォード、ケンブリッジ大学では古典教育を重視し、教授は地味な背広にチョッキをつけ、その上に黒のガウンをつけ教壇に立つて講義をしますが、教育

の中心はギリシア語、ラテン語教育とギリシア・ラテンの古典教育であります。これは思索を精密にし、ものごとを論理的、哲学的に深く考えさせたり、話したりする能力を高めると共に偉大なる哲人の教えに触れ、欧米文明の根源を探究、古典により魂を確立させるためであります。哲人ソクラテスがデリオンの敗戦で最も困難なしんがりを沈着、勇敢に果たしたり、国民会議において満場の人々に対し「死刑をおそれて諸君と共に不正の議決をするよりは、むしろ法律と、正義に従って、行動すべきである」と主張して反対側に投票、更にわれわれに最も感動を与えることは、三十年間のペロポネス戦争が終ってアテネの民主政権が破れ、スパルタの武力を背景とする暴力によって政權を奪取した政党に敢然として反対し、毒を仰いで死んだソクラテスの態度であります。

古典教育は英国ばかりでなく、独、米の有名大学においても実施され英国の首相は、保守、労働党を問わずその教育を受けた方々であります。

米国の陸海空の士官学校においてはその綱領に皆「嘘をいうな」と示してあります。嘘をいうことは最も恥すべき行為で、これに反すれば厳罰に処せられたり、退学させられます。

国旗・国歌を尊重

世界中どの国でも国旗、国歌を大切にしております。

陸上の官衙、学校、市町村の主要建物には国旗が翻えっております。練習艦隊や日本の護衛艦が外国の港に碇泊しますと、午前八時と日没時に軍艦旗と艦首旗（日の丸）を掲揚、または降下いたします、その際音楽隊がラッパで「君が代」を吹奏いたします。附近の陸上にある在留日本人をはじめ外人も立ちどまって一斉に敬礼をいたします。

日本の国旗は太陽をデザインし白地に赤の日の丸で鮮明且つ美しく、国歌は古今和歌集よりとり、君民一体、平和を祈念する名曲であり、大正時代、ニューヨークの各国の国歌コンクールで、作曲家山田耕筰先生が演奏し特等を得た名曲であります。世界各国の国歌は「弾丸降るいくさの庭にひるがえる星条旗」（米）、「国王を守れ（英）」「悪魔のように敵をほうむれ」（仏）、「攻め寄せる敵を打破れ」（ソ連）「われらが危険せまりきぬ、いまこそ戦う時はきぬ」（中共）「銃とらば誰にも犯させじ国のため捧げんこの命」（タイ）などのように国の防衛、いくさに勝つようなことをうたったものばかりです。

わが国の文部省は、祝祭日に各学校は「日の丸」掲揚「君が代」斉唱を指令しておりますが、未だに実施しない学校があります。

世界中、どの国でも、国のため、身命を捧げた戦没者の墓を大切にし、春秋二回盛大なる式典を実施し、元首をはじめ、国民が参拝して英霊に感謝を表しております。日

本の総理や高官は外国へ行くと必ず国立墓地や戦没者の墓に参拝するのに、靖国神社へは隣国の横やりにより、公式参拝を中止しております。わが国の国情をよく相手に説明し、公式非公式を超越し、正々堂々参拝されるよう切望してやみません。

終戦後日本は世界に向け開眼、最近国際化の聲が高まって参りましたが、まだ十分とはいえません。国際的に活動するには、先ず日本人としての道徳を身につけ「りっぱな日本人となること」が大切であると思います。また少なくとも一國ぐらゐの外国語の会話が自由にでき、外国人に良

友を持ち、相互理解が十分なし得ることが肝要であると思えます。

最後に諸外国では、日本の天皇、皇室を非常に尊敬していることであります。米国の世界的理論物理学者アインシュタイン博士をはじめ、マッカーサー元帥、グルー、ライシャワー元大使、英国の世界的歴史学者トインビー博士など、みな賛仰いたしております。私達は日本の歴史、伝統、道徳をもっと哲学的に掘り下げて究明し、真の日本人になることを心がけたいと存じます。

(本会評議員・元連合艦隊参謀)

道を楽しむ

広辞林によると「趣味とは感興を引起す状態」とあるが、くだけて云へば自分が楽しむ道即ち道楽を総称したものである。

私は曾つて勤務先の日清製粉K・Kの先輩や同僚に各自の趣味を報告して貰ったが(既に故人になった人が多い)。園芸、庭いじり、畑仕事が最も多く之に次ぐものは謡曲(仕

加 藤 嘉 三 郎

舞を含む)ゴルフ、読書、囲碁、旅行、散歩、俳句、小唄長唄、将棋、釣り、書道、西洋音楽、書画陶磁器、短歌、作画、テニス、茶道、踊り等々であった。

ここで注目すべきは謡曲人は多いが小唄長唄人は少ない。西洋音楽ファンも同様。囲碁は多いが将棋人は少ない。これは時代の変遷にもよるが、各自が年寄りになったからで

あろう。八十五歳になってもゴルフを尚続けているものは稀である。二、三人しか知らない。庭いじりや畑仕事もマンション住いとなつては出来ない。かく考えて見ると高老年者の趣味として出来るものは、読書、謡曲、囲碁、散歩と小旅行、俳句、書道、作画（主として水墨画）等ではなからうか。一つ橋大の同窓会―如水会に長唄同好会がある。会員数十四、五名で平均年齢は七十五歳。年二回温習会があるがこれは御夫人方のお力によるものである。

顰がえってここで私の趣味の偏歴を申述べよう。

私は京都生れで、文化面では同志社大学があつた関係上洋楽が盛んであり、京都一商時代にはマンドリン音楽を楽しみ、英語会の余興マンドリン独奏をやつた事もある。又同志社の連中や美術学校在学中の次兄と共に、教会のホールでマンドリン、ギターの合奏に興じた。従つて神戸高商に進学してからは、隣りにある関西学院の学生に刺激されてマンドリンギター合奏団をつくつて演奏旅行に出かけたこともある。又声楽のグリーククラブに参加して男声四部合唱でアメリカの黒人歌や民謡を勉強し、英語大会の余興として発表し賞讃された。しかしこれ等のことは東京商大に入學する迄のことで、当時商大の入試は一高よりもむづかしかつたし同期生は秀才ぞろいであつたので、學業に専心しなければついていけない。それで、學業に専心するとし、余暇は図書館にこもつて勉強した。商大を卒業し

日清製粉KKに入社して商務部に配属された。従つて得意先との宴會に連なることも多かつた。そこではアメリカの黒人歌を歌つてもさっぱり合わない。大正の末期から昭和にかけては長唄全盛の時代であつた。先輩に「加藤君日本ものをやれ」と云われて先輩にひっぱられ、仲間三人で柳橋の哥沢の師匠の処に習ひに通つた。処が師匠に旦那が出来てから待遇が悪くなつたので一同腹を立ててやめて終つた。当時私は本郷の帝大正門前に下宿しておつたが、近所におばあさんの哥沢の師匠がおることを発見し、夕食後風呂屋に行く序に立寄つて稽古をつけて貰つた。その内に長唄の男師匠も近くにおるのを知つて長唄の稽古も初めた。

その師匠は稽古本に研精会の吉住小三郎、稀音家浄観両師監閲の稽古本を使った。この本にはドレミファの洋式号がついていたので、ギターをやつておつた私には真に好都合で、二、三年の内に相当数の曲をあげることが出来た。しかし私は待合に行つて芸者遊びをしたことがないので「独々逸」は旨く歌うことは出来ない。昭和八年、名古屋に転勤となつたが特約店のおやしさんが私に「お座敷に坐つたままでいるとつい酒を飲まされすぎる。私は酒が余り飲めないで座を立て余興に俗謡を歌い、踊をおどることにしている。その間は酒を飲まないで長時間お座敷が勤まるし、身体のためによいと教えてくれた。私の酒席のお座敷芸は名古屋にいた八年間の仕込みによる。尚本郷に下宿

している時清元の師匠がいたので清元の稽古をした。これは歌舞伎がすぎないと三千歳とかいざよい清心、明鳥とかの清元が分らぬと興味は半減する。作家池波正太郎氏回想によると兜町の株屋に奉公しているとき、先輩に芝居ずきの男がいてその指導で芝居の地になる邦楽を習ったのとこのである。

戦時中料飲禁止の時代があり、又統制経済となつたのでお役人の接待が重要となつた。これには適当に負けるマージャンをすることであつた。私はマージャンの道具は昭和六年に上海に行った時買つて来た。まだ日本ではマージャンははやっておらず、アメリカではやっていたと見えてやり方は英語の指導書であり、パイ(牌)の右肩に、E・W・S・N(東西南北)とはつてあつた。所謂下駄牌である。しかし唐木の箱は立派に彫刻してあるもので、今でも座敷にかざつてある。次にゴルフのことを云わねばなるまい。

昭和五年の頃はゴルフの始まつたばかりで、会員制のゴルフ場も少なかった、程ヶ谷、六実(千葉)駒沢? 箱根、広野、宝塚、六甲ぐらいいは思ひ出す。私は腸が悪く36のハンディが貰えない程の下手クソである、昭和六年、シドニー(豪)におつた時室内レッスンをとり、又早朝パブリック、コースでプロの指導を受けたこともある。そのプロが領事館の奥村さんに頼んでコースと一緒に廻つて貰いなさいと云うので御一緒に願つたが、こちらの球はラフに入

ったり、林に飛んだりするので、余り御迷惑だからハーフ、ラウンドで御辞退申上げた。その奥村領事官補が終戦時天皇とマクアーサーとの通訳をされた方である。そのことで誤解があり辞職されたが、後に外務次官として復活された、話をもとにもどすが私はゴルフをやつたお陰で先輩にひっぱり出されて諸方のゴルフ場でプレーした。しかし最も印象に深いのは初めて柏競馬場内の九ホールで、日清製粉の正田名誉会長と御一緒にプレーしたし、又、後のビクター社長(百瀬氏(ロンドンより帰られた当時で三井物産員)に御目にかかつた。英国式スタイルで鳥打帽をかぶり、ニッカボッカーのズボンに長靴下のスタイルである。

昭和廿九年頃、戦時中の食糧配給公団が解散となるので出向先から日清製粉に帰ることとなつた。役員席は満員であつたので傍系の飼料会社に常務取締役営業部長として勤務することとなつた。

東京に帰つて来てから友人に誘われて小唄の稽古に通つた。その時はもう哥沢時代でなかつた。昔の白木屋の裏に師匠の家があり、仲間には富士紡の役員や山本海苔店の御主人等日本橋周辺の旦那衆であつた。(現在でも昔の場所二代目が跡をついでいる。)

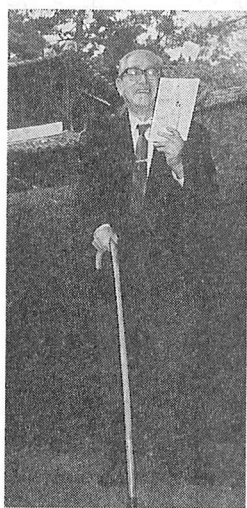
鶴見工場に勤務する様になつてから、近所に長唄師匠の出稽古場があつたので卅年振りにここに通つて長唄の稽古をまたはじめた。師匠が神奈川の本宅に移られてからもそ

こに通った。その神奈川には日清粉傍系の飼料会社があり社長が長唄党であったのでその会には出演させて頂いた。

併し乍ら六十歳になり飼料会社の第二線をひいてからは、御座敷はかからない。三味線と縁がきれては万事休すである。処がキリンビールのライフ、ライブラリー第三巻、元通産次官で余暇開発センター理事長佐橋滋氏（異色官僚の本で有名）著の『余暇を考える』と題する本があるが、その中に「御座敷芸でも小唄長唄常盤津などは金がかかるし三味線がいなければどうにもならない。従って浪人者には駄目だ、詩吟ならひとりで楽しめる。詩吟は息を長くもたせなければ味が出ない。息を長くするためには胸で呼吸しては駄目で腹から出さなければならぬ。詩吟は深呼吸の一種だと思うのは、姿勢を正して声を出していると自然と深呼吸になる、と云うことで、そういう意味で詩吟は健康法であり、呼吸の体操法です……詩吟のよい事は健康法のみでなく詩自体に興味湧いてくる事である。」氏はまた、下手の横好きで何でも三段だと申されておる。私は古い中外商業新報（後の日本経済新聞）で、家元の稀音家浄観師が「素人は旨くなればなる程金がかかるが、玄人は上手になればなる程金がとれる。それは素人衆は道楽であるのに対し、玄人は生活がかかっているからだ」と申されたのを読んでから、すすめられても名取りになるのはやめた。名取りになればだん／＼格式のあるもの（所謂許しもの）を

唄わねばならぬし、そうすると金がかかる。詩吟でも同様、初伝、中伝、奥伝、範士、師範等々の階級があり、師範となれば弟子がとれるが夫だけ免状代や高い出演料を払わねばならぬ、私は奥伝以上の昇格試験は受けない、佐橋氏の云われる何でも三段でよいと思っている。商売にするわけでないののでよい。詩吟を初めてから十三年になるがこんなに長くやっておって奥伝止りは私一人である。商売にやるのではなく趣味道楽にやるのだからだ。

私は詩吟をやって丈夫になったと思っているし、和漢の詩心を学び、研究することは頭の体操となり「呆け」の予防法につながるものである。私は親からの遺伝から内外共旅行が好きである。七十四歳の一つ橋同窓会員の欧州旅行に参加した。その中に九十歳のおじさんがいたのに刺激を受けて、昭和五十一年旧制高校卒業生のヨーロッパ寮歌祭に参加した、この旅行の目玉はライン川を河船で上下し、その間各校の寮歌・校歌を黒の羽織に白の長ひもを首



京都詩仙堂の庭園にて、
石川文山作「富士山」を
吟ずる（61.11.3）

にかけて放歌高吟する。その後この会は京浜在住者によって新年会が開かれてもう満拾年になる。人数は減ったが本年は八名が芝大門前の常泉ビル内の寮歌室に集った。常泉君は「ああ玉杯に花うけて」の一高寮歌を唄いたいたために一高に入学した人物で、ビルの一室を提供してその振興に挺身している。弘道会員の藤田、加藤、松本、岩崎氏の四人は仲間である。

さて、一つ橋大の海外旅行組も老齡化が進んだので国内旅行に切かえ、橋遊子会と命名し二泊三日と、一泊二日の旅行を年二回と、新年懇親会を開いて旧交を温めている。外国に行ったつもりだから経費にかまわず、贅沢なお遊びとなっている。

私は約三年前から足腰痛のため整形外科医にかかり温湿布であたため療治して貰っている、閑な時は必ず通院しているが治る見込みはなさそうである、その外、月二回二泊三日の予定で箱根、熱海温泉へ入湯し読書と昼寝をして来る。

拙宅には養父が遺した書画骨董があるので之を楽しんでいる。書幅は漢詩に詳しい友人がおるので、解説して貰った。まだ判らぬものがあるが四季とりどり軸をかえて読んでいとだん／＼判って来る様な気がする。茶道具は判らぬが友人が博物館にいて陶磁器に詳しい者がおったので出光美術館に来る時持って行って箱書を拾数点鑑定して貰っ

た。彼は永甚の壺の鑑定で失敗したが出光の陶磁器コレクションは彼の努力による。有名な小山富士夫君（一橋同期生）で、彼がその後作陶に専念して美濃に花の木窯をつくった。私は生前と死後の二回同地に出向いて彼を偲んだ。

この年になって之からも続けようと思っているのは詩吟のお稽古（月一／＼二回）と作文である。大脳生理学者時実博士によると、脳髓を強化する教科は作文と体操であると申されている。随筆やエッセー、旅行記事等を綴ると腹がへって食欲が出て体調によい。近頃は関係する団体や知人から随筆をかく事を頼まれる様になった、それで新聞でも雑誌でも読んで役に立ちそうなものはすぐ切抜いて箱に入れておく。そして時々とり出して整理し、ノートブックにはり付けておいて、すぐ取出せる様にしている。是れからの人間の寿命は延びた。最近厚生省が発表した「六十二年度簡易生命表」によれば私はあと五年百〇一歳迄生きられることになっている。これからは好きで自分に出来る道を楽しんで天寿を全うし度いものである。

（本会評議員・元日清鋼料常務取締役）



【随想】

「在宅老人ケア」の問題について

荒井元吉

最近、新聞やテレビなどで、俄かに騒がれたした老人問題は、将に我々国民に密着した生活・経済上の緊急問題として、その対応を急がなくてはならない状態にまで追い込まれていることは、よくごぞんじのことでしょう。そして、この老人問題こそは、今や我々の前にシッカリ立ちはだかつて、最早さけては通れない実に重要なものとなりました。人間は、いつまでも若くはおれないし、今日の若さは明日の老いに必ずつながることですから、若いうちにやがてくる現実を、今のうちにシッカリと把えて対応すべきです。

国民の一人一人が、この厳しい現実をシッカリ認識して、社会・経済的な面でも、将来への対応と展望を、よく考えるべきときが、将に目前に迫っていることを自覚しなければなりません。そして誰にでも平等にやって来る老後、この老後を如何に生きるべきか、又生きがいのある生活を送るべきかの対策を、又個人が、又家族中で、今こそしんげんに考えなくてはならない重要なときです。

曾て、人生五〇年といわれていましたが、今や六〇年、

七〇年更に八〇年と、世界に類を見ない速度で、将に我が国は、とうとう世界一の長寿国となりました。現在六五歳以上は、総人口の一〇・九%、そして現在要介護人口は、その五%となっており、しかも年毎に五〇―六〇万人ずつ殖えつづけ、そして間もなく四人に一人は、御年寄りという超高齢社会が、見えはじめております。このなかで、寝たきり老人は六五万人、一〇年後には、実に一〇〇万人を超えることになります。

我々は、今のところ、寝たきり状態や痴呆老人になっても、辛うじて必要なケアはある期間、公的責任において提供されています。然し、今の限りある施設や予算の範囲では、この対応は非常に困難を加え、実際に医療や看護を必要とし、しかも状態が何年にも及ぶとき、収容し切れない老人を、どう扱うべきかなど、今のところ、深刻きわまる問題が、クローズアップされました。これを解決するには、「長期在宅ケア」の「システム化」以外に術がなく、これこそ時の経過と共に増々重要なことになるでしょう。

今までは、「長寿こそ」は、我々の願いであり又人生最後の幸せの筈でしたのに、今や皮肉にも長生きのその影を見つけたばかりに、「長寿は恐怖だ」と叫んだ人もおります。即ち、「老いは死よりもこわい」このような苦しみの時代は、急ぎばやに近ずいております。そして、日常の食生活や排泄そして入浴や洗濯など、生活の基本部分の支え

が必要となり、家族がそれに当たることになるので、その疲労特に心労が積ってゆくことになり、この厳しい現実に泣かされている家族も、多くなって来ました。それに、少なくとも「在宅ケア」の中心は、大部分が親族の女性しかも嫁さんにしわ寄せが集中し、複雑な家庭問題をおこし、崩壊寸前の家族も多いのが実情です。

これからは、治療も「リハビリテーション」も必要としなくなった患者を、そのまま入院させておくことは、当然許されなくなります。

そのために地域医療の最大の担い手として、昨年から登場した老人保健施設も、病院退院後の機能訓練の場として、設立されたものであります。然し、これとて寝たきり老人や寝たきりに近い老人の概ね半分をも、収容し切れず「在宅ケア」で介護を続けてゆくことになります。そして、これがためには、介護に当たる家族に過重がかかり、疲労と精神的負担のために、ダウンすることになりますので、自治体や近所知人の援助が必要となります。「老人ケア」を、ひとり家族に押しつけてはならないし、又自宅で療養を続けたいという老人の意志を曲げて、施設入所を強制して、人権を無視することは、尚よくないことです。

然し、家族の多くは、身内の老人をできる限り、自宅においてしかも自分等の手で世話したいということが、本心でしょうか。

今や、老人看護は、将に「老人ケア」の充実と拡大に向い、寿命の延長にも比例して、長く続く「長期ケア」に、ひとときも早く取り組む時代に入りました。各医療地域では、今迄のように、ひとり病院・診療所やホームの単位や枠だけでは、その目的の達成は無理です。将に各地区毎、すべての資源・福祉・知恵を結集して、今こそ「老人在宅ケア」の実現を図らなければ、この大きな老人問題は到底解決を見ません。皆さんの、御協力を御願いたします。

(本会評議員・八千代病院々長)

【随想】

聖徳太子から福沢諭吉へ

新美 忠 之

この頃の大新聞は、なんと広告のページが多いことか。本来の新聞記事を探すのに困惑する有様である。スポンサーのコーミシャルは邪魔だが、視聴は無料の民放とまではいかないにしても、購読料を三分の一か四分の一にする新聞社が出てよさそうなものだと思ふ。購読料はまけられぬ、というのであれば、全新聞社協力して新聞紙の徹底的な回収とその再利用に努めてほしいものだ。日々の大量の

新聞用紙用バルブを作るために、どれほど広大な森林を伐採することになるのか。森林の涸渇が人類生活にどんな危険をもたらすかについては既に指摘されている通りである。本来の新聞を維持するのにどれ程の資金が必要かについて筆者は知らないが、莫大な掲載広告料収入を考えれば、新聞紙の徹底的な回収と再利用に努力するのは、せめてもの新聞社の社会的責務ではなからうか。

新聞の編集姿勢

筆者は、新聞の重要なニュース関係記事のほかは、投書欄と時事川柳の類にできるだけ目を通すことにしている。著名人の論説記事には興味が無い。底が見えているからである。勿論、投書にしても編輯子の取捨選択を経ているし、取捨選択には各社に特有の色彩がある。また、投書者の投書の動機も一つではない。したがって新聞の投書を国民一般の意見と決めるのは大変な誤りであるが、庶民の考え方を徴する重要な資料であることに変りはない。また、アフリカの分まで喰ってジョギングをし（時事川柳）の如きは、わが国今日の世相を唱破し得て至妙だと思ふ。

筆者は、新聞が時の権力（いわゆる政治権力よりも広い意味の圧力）に迎合するのであれば、そのような新聞は無きに越したことはないと考えている。明治の編輯子は社会の木鐸、無冠の帝王を誇ったが、新聞は止むに止まれぬ雄叫びであるところに発行の意味がある。しかし、その止む

に止まれぬ雄叫びというのは、世道人心・国家社会のあるべき姿の実現に資するものでなくてはならない。個人の主観を超えた訴えとしての言論でなくてはならない。云はずもがなの無駄は省いた方がよいし、反対のための反対とか、営利の売文に止まるものであつてはならない。

嘗て、岩波左翼とか朝日左翼という言葉を屢々耳にした。朝日新聞には今日も依然として、右のような純粹な木鐸・批判精神からとは受け取り難い色彩があるように思えるが、この五月二十六日付の投書欄には傾聴すべき内容の投書がいくつか載せられている。見出しは編輯子のつけたものであるうし、見出しのつけ方で読者に与える印象も異なるのだが、日本語の造詣が無ければ翻訳者の資格はないという内容の投書、「東郷元帥は国救った人物」の見出しの投書は時誼を得た投書だと思ふ。ここには、会員諸氏の便誼のため、小学校教育に直接する後者の要点を引用する。五月十六日付の朝日新聞は一面トップで、「教えるべき人物に東郷元帥」の大見出しをつけ、学習指導要領の改訂によって日本史中の重要人物として十人が選択されたことを報道すると共に、これに対する朝日新聞の批判的な立場を示すため、「軍人“復権”唐突な感じ」という小見出しがつけられた。これに対する批判の文である。即ち、

「この記事を読んで私は不愉快な気分になった。東郷元帥の登場にではない。新聞の否定的な書き方にある。

東郷元帥といえ、日本人ならだれでも知っていていい偉大な人物ではないか。戦争そのものの良否はともかく、あの日露戦争がわが国にとって国運をかけたものであったことは疑いのないところである。日本史上の十人に当たるかどうかは別として、西郷隆盛、福沢諭吉、伊藤博文と並び明治維新後の四人に選ばれることは決しておかしくないはずである。

それを戦後世代になじみの薄い軍人の「復権」などと新聞で一方的に批判するのはいただけない。歴史は冷静に評価したい。」

限られた字数の範囲内の文であるから、さぞかし述べ足りなさもどかしさがあつたことであらう。この投書者は教員でもなく明治を懐しむ（その当否を言うのではない）老年人でもなく、四十七歳の会社員と記されてある。筆者は少数であれ、庶民の中に健在な良識が戦後の言論を超克し国民一般が占領ボケを離脱する日の来ることを願つてやまない次第である。

商業と道徳

さて、「本稿に聖徳太子から福沢諭吉へ」と題したのは、一万円札が聖徳太子から福沢諭吉に替えられたこと、福沢諭吉が学習指導要領の改訂で明治維新时期不可欠の主要人物として採り上げられていることに関連させて、損益の打算を根底とする今日わが国各界の営利追求行動・商業主義の

蔓延傾向は憂うべき事柄の一つであるが、商業の発達と、福沢諭吉とのかかわりを考えよう、としたからである。一万円札から聖徳太子を消さなくてもよいという意見もあったようだし、贋札作りを難しくするため、という観点から替えられることになった模様である。聖徳太子を誰に替えるかについて、福沢諭吉に決定した経緯については筆者は全く知るところがない。その経緯について詳しい方々の御示教をいただければ幸甚と考えている。

福沢諭吉は西洋文明の紹介者として、また、西洋諸制度採用の推進者として、将に又、遣米・遣欧使節員としての行動など功績の大きいことは疑いもなく、福沢の本質を商人と割り切ることとは勿論一面的に過ぎることになるが、福沢は封建門閥は親の仇で御坐ると書いている（よく間違えられるが福沢は封建制度は親の仇、とは云っていない）。形骸化した封建武士支配に代るものは商人の富と考え、自らも福沢屋を称したことがある。これらを総合するとき、明治以後の自由な商業活動・企業活動と福沢とのかかわりは、これを無視するわけにはいかない。

幕府締結の不平等条約の廃止という目的から、西洋法を採用したのであつたが、日常の生活が西洋法に則つて処理されるうちに、近代西洋法に内在する個人主義の欠陥面をも受容することになった。企業の自由商業活動の自由はその一面である。

商業は代表的な営利追求活動である。物欲・営利追求には際限がない。そのため、福祉とは無関係のことだが、自由経済制下の商業は悪徳商人を生み易いし、あまりにも商業優先・物質主義に陥ると、人間性喪失状況を作り出してしまふ。今日の日本の世相は正にそれである。物的豊饒と心の貧寒、如何に営利活動を人間らしい生活々動とするかが今日の急務である。一万円札から聖徳太子が消えても、十七条憲法の教訓は今日も妥当することを篤と反省する必要がある。

この四半世紀以来、わが国は経済大国と云れるようになった。ルーズベルト大統領の当初の日本占領政策（日本を明治初年の僅かに軽工業をもつ農業国の状態にする、再びアメリカを脅かす大国とはしないとするとするもの）からは予想されぬことであった。精神生活面で日本人をアメリカ化するのに成功したが、経済面で日本はアメリカを脅かす大国としてしまった、ということになる。何がそうさせたか。それは米ソ対立・朝鮮戦争に於けるアメリカ軍の軍需補給のためのいわゆる特需を契機とするものであった。そして、今日の経済繁栄は、重化学工業の復興・技術の開発、世界市場の開拓に対する戦前世代の勤勉努力のお蔭によるものであった。

テレビの影響を強くうける今日、白痴番組と指弾される番組をはじめ、特に民族の低俗なドラマ、グルメ志向醸成

の飽食、濫費の中に生活する青少年に対して、一糸をも無駄にせぬ質素簡素な生活もあること、今日の経済繁栄が永続する何の保証もないことを反省させる必要がある。今日のわが国経済界で営利一点張りの商業優先の傾向が根強い。本来、保険契約と商品の売買契約とは本質が異なるのだが、新たな約款の保険（新種保険）ができると保険会社関係者はこれを新商品の売り出しと呼んでいる。法律万能となり、罪刑法定主義原則を絶対視するところに、詐欺まがい悪徳商法のために、法律上の指導をやつてのける弁護士が現われる、業者や役人の贈賄事件が次々と発覚し際限がない。企業は消費者は王様だとおだて上げて国民の間に浪費傾向を生み出させた。金さえあれば何でも欲しいものが買えるという風潮を助長するかのうちに、円価の変動・株価の動き、金の国際価格などがNHKのニュースで取り上げられる。これ程にまでせねばならぬのだろうか。金まわりの良くなった国民は、額に汗するのは愚かなことであるかのごとく株に投資して一獲千金を夢みる。この状況が銀行強盗や身代金目当ての誘拐事件を多発させているわけであるし、盗犯者の低年齢層化が憂慮される。

道統を省察する

商人は、封建江戸幕府の時代には四民の最下位に置かれた。その可否の論は別として、商業だけが最後の拠るべき生活活動であるわけではない。いかに人間らしく生きるかが

国民すべての課題であり、先人の生き方や教えに学ぶことが必要となる。その意味で、筆者は文化史概論の講義で、内村鑑三の『代表的日本人』と林子平の『海国兵談』を読むように指導している。

『代表的日本人』は西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人の五人を挙げ、それぞれに副題、新日本の建設者（西郷）、封建領主（鷹山）、農民聖人（尊徳）、村落教師（藤樹）、仏教僧侶（日蓮）がつけられている。そして、これらの人物を批判、非難するのではなく、優れた日本人の代表者として外国に紹介したのである。

内村鑑三と云えば、第二の完教改革と評される無教会主義を唱えたキリスト教信者であるが、宗教宗派を超えて学ぶべき尊敬すべき先人に数えたのである。独乙語版跋文には、「これは現在基督教信徒たる余自身の接木せられている砧木の幹を示すものである。余は余の神に感謝する、余は裸体の未開人として此世に入り来らざりしことを。」という内村の言葉がある。学生にはこの言葉に注目するよう指導している次第である。「余の今日あるは先人のお蔭である、優れた日本文化を学びその上に自らの道を拓け」というのであり、明治の背骨が如何なるものであるかを識ることが出来る。戦後の外来の文物、特にアメリカニズム一辺倒の弊害を反省する指針となろう。

林子平の海国兵談は一言にして警世の書の貴重な先例で

ある。幕府の当事者も、民衆も、西洋の東洋侵略勢力が押し迫っている認識を欠き姑息守旧に暮れているのに対し、危急を訴え早急に海防の処置を考え直せと論じたのである。長崎だけ固めていて済むものではない、早急に江戸湾の防備を固むべきであると提言したのだが、この止むに止まれぬ雄叫びの言論は、当時としては幕府の御大法を批判するものとして処罰される行動であった。官憲に忌避され時の政権によって処罰されようとも、国民民福のためには言うべきことは言う、ここに日本人の言論の真姿を認めよ、と学生を指導すると共に、新聞に期待する次第である。言論の自由は近代憲法の主要原則であることは周知の通り。文化庁長官を買って出た作家が、国会でつるし上げられた折、自らを売文業者であると答弁したことがある。「物書き」という言葉も著名作家達がよく口にする。今日の日本では、営利のための、「売文」刊行物が氾濫している。それらの中には、親たちが子供には読ませたくないと考え悪書も少なくない。そのような刊行物も言論、表現の自由の名で保護されて然るべきであるのか。警世の書をこそ保護すべく、その出現を待望して止まない。いつまで近代西洋憲法学の糟粕を嘗めているのか。

日本国憲法は、アメリカの日本占領政策実施の基本法としてのみ法的妥当性を認め得るもので、独立回復と同時に改廃さるべき憲法であるが、その事なくして今日に及んで

いるのは、日本国民は依然として被占領下にアメリカの日本占領政策推進に奉仕していることになる。言論自由法則の検討、戦後教育の改廃は速かに徹底的に実行さるべき今日の課題である。

附記

(本会評議員・江戸川女子短期大学教授)

「東郷元帥は国救った人物」の投書に対して、6月6日付投書欄に、「ある角度から見た東郷元帥」(教員49歳)、「昔日の日本に郷愁もつ動き」(牧師73歳)、「小学生は頭が混乱しますよ」(中学生12歳)、「軍人を避ける教育こそ危険無」(職歳69)の四投書が掲げられている。前三者は反対の立場のようだが、何れも全面的な否定ではなく留保つきのものである。戦後の平和教育・言論の型を示した意味しかないように思う。



「禮記・郊特性」より

男女有^レ別、然後父子親。父子親然後義生。義生然後禮作。禮作然後萬物安。無^レ別無^レ義、禽獸之道也。

説方 男女別有り、然後に父子親し。父子親しくして然る後に義生ず。義生じ然る後に禮作る。禮作りて然る後に萬物安し。別無く義無きは、禽獸の道なり。

解 釈 男は剛の性がある。女は柔の性がある。男と女とは其性を別にし、其の位を異にする。此の別異なる男女の間に生れたる子は、親との間に親しみが有る。此の親しみに有って、後る後に義と言ふ道が出来る。義とは事の宜しきに合せる道である。此の道が有って、然る後に禮が出来る。禮は貴賤上下の区別を明かにする道である。此の道が出来て、然る後に萬物が各其の位置を得て、安定する。何の区別もない、義もないのが、禽獸の道である。

(「服部宇之吉編『儒教要典』昭和十二年」より)

ある主婦が話していた。

「このごろの世の中はホントに変で、いやなことが多いわねえ。リクルートの株の事件だって、あれを貰った政治家の人たちは「秘書のやったことだ」と言い抜けして、あとは知らん顔でしょ。政治家の秘書というのは、都合の悪いときにそのせいにするカクレミノみたいなものね」

「リクルートの未公開株を譲られて、それを買う資金までリクルートの子会社が貸してくれて、そして公開となれば五倍にもハネあがる、それをすぐ売って借りた分を返しても四千万円や五千万円は儲かる。税金はかからない。まるでヌレ手でアワね。」

自分の得にもならないのに、こんな大もうけを何十人もの人にさせるバカがいるかしら。リクルートの江副とかいう前の会長は何をたくらんだのでしょう。そんな怪しげなカネをあげでもうけさせてもらって、政治家ははずかしいのかしら」

「うちの主人なんか何十年も懸命に働いて、それでもらえる退職金は

二千万円以下よ。苦勞しているのがつくづく可哀想になっちゃって。押しが強く図々しい人間が勝ちなのね、ほんとにバカバカしい世の中」
こういう声が国じゅうであがっているように思われる。この声をヤツカミなどというべきではない。まじ



政治家とカネ



郎 徳 入 江

めに働く人びとの正常な感覚の声だ。

昨年からカネにからむ政治家のスカンダルが多すぎる。相沢法務委員長長の二億円の株利益がくしにつづいて砂利船汚職、明電工事件、さらう心なし」とかつて青年将校が慷慨

にリクルート事件だ。政治家はどうしてこうもカネに意地汚いのか。

その折柄、久しぶりに当の政治家のまともな声を聞いた。自民党の軽井沢セミナーでの伊東総務会長の発言である。「最近、自分自身を含めて政治家がぜいたくになっている。百万や二百万はカネじゃないという感覚だ」「政治倫理が風化しているように見える。これは政策以前の問題で、われわれ政治家が真剣に考えねばならない問題だ」。

さらに政治資金規正法を改める動きについて「カネを余計に貰うことを考えている。私は反対だ」

国民が言いたいことを率直に述べたのは好感が持てた。

この発言を一服の清涼剤に終らせず、自民党の自浄作用の起爆剤にしてもらいたい。このままでは、政治家は国民から軽蔑され、政治の信用は失墜するだろう。

「権門かみに奢れども、社稷を憂う心なし」と、かつて青年将校が慷慨し、テロに走ったような時代の再来を恐れる。

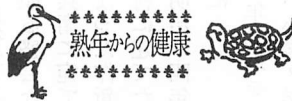
リウマチと云いますとほとんどこの慢性関節リウマチのことです。もうひとつのリウマチは小児のかかるリウマチ熱ですが、これは近年次第に減少しました。此処では中年以後におこるものについて申します。

一 慢性関節リウマチとは

慢性関節リウマチとは関節の朝のこわばり、関節の腫れや痛みを伴うもので、中年期以後に多くみられる病気です。朝、目が覚めてからしばらくの間関節が硬い感じがしますが、痛みとは違います。その持続は人により種々で、数分から長い場合は何時間も続くことがあります。関節の症状は単一の関節に起こるのではなく多くの関節に来ますが、とくに左右対称の関節に生じることが多いのです。

二 関節リウマチの診断

症状としては関節の朝のこわばり、腫れ、痛み、が左右対称に來ること、血沈その他の全身の炎症反応を示す検査やリウマトイド因子など



関節リウマチ



杉 浦 昌 也

が陽性にでるのです。関節のレントゲン写真をとると、関節の変化がみられるようになります。

三 関節リウマチの治療

同じ診断でも程度は人によりいろいろです。治療にはリウマチの炎症症状をとるものと、リウマチの進行をおさえるものがあり、前者は消炎鎮痛薬の類でありステロイド剤、非ステロイド剤です。後者は金製剤などであります。一般に消炎鎮痛薬の副作用として胃腸障害、とくに消化管の潰瘍が比較的多いので注意しながら使用する必要があります。

また、とくにステロイド剤は副腎皮質ホルモンですが、その副作用としては満月様顔貌、高血圧消化性潰瘍、糖尿病等多彩で、なかには重いものもありますので必要最小限度に使用するよう専門医の指導が必要となります。

また、股関節や膝関節の破壊が高度になった場合は歩行障害を来たすので、人工関節の手術をします。

〔泊翁百話〕

泊翁書簡(十)

菅治兵衛宛二十通の内の九通(その1)

古川哲史

『泊翁日記』の明治二十七年九月二十七日の項に

「七時過八都村出立、十一時頃椿海村菅治兵衛宅ニ至リ、午飯後同村作新学院にて演説会を開く。頗る盛会なり」という記事がある。この記事に見える菅治兵衛に宛てた泊翁書簡を今回は取りあげるが、演説会場となった作新学院は菅治兵衛がその郷里・千葉県匝瑳郡椿海村に建てた学校で、初めは作新精舎と言っていたらしい。明治十四年九月号の『修身学社叢説』第十八冊の「紀事」に

「在下総国社員菅治兵衛氏、明治二己巳ノ年ヲ以テ私学ヲ其郷ニ建テ之ヲ作新精舎ト名ク。初メハ小学ノ学科ノミヲ置キシガ、昨年以来又中学ノ学科ヲ其中ニ置ケリ。方今教育ニ志篤キ者ハ世間ニ多シト雖モ、独力ヲ以テ中小二科ノ学校ヲ設立セルハ、國中未ダ多ク見ザル所ナリ」

とあるのでそれが知られるが、右の「紀事」はこのあとに修史館一等編修官川田剛(甕江)が撰した「作新精舎ノ碑文」を紹介している。碑文は全部が漢文より成っているが、

今より十五年前(徳川の末期に当たろう)北總に楠公の子孫を偽称する楠乙二という「妄男子」があり、党をあつめ乱をおこした。これに賭博游手無頼の徒が応じて劫掠をほしいままにしたので、禍いが州里に及んだ。徳川幕府は諸藩に命じ、兵を出してこれを征伐せしめた。自分(川田)は出向いてその形勢を視察したが、佐倉侯の領する匝瑳郡椿海村を通過するにあたって案内役をつとめたのは「土豪」(土地の有力者)菅子寛すなわち菅治兵衛であった。この以後も北總地方は平穩でなかったため、菅氏は土俗が乱を好むのを憂えて、しばしば書を寄せて教化の方策を思案した。それで自分はその志を愛し、ひそかに期待するところがあった。

王政維新が実現して文教が重んぜられる氣運になると、菅氏は私財を投じて郷校を設立した。佐倉侯はこれをよるこんで藩学に準ずる待遇をあたえ、弟の松堂君に作新精舎の四字を大書せしめて楣間にかかげ、また『資治通鑑』一部を褒賞としてあたえた。その後数年、藩が廃せられ新治

県に変わると、菅氏は校舎とその所有を新治県に納め、自らは学区取締を命ぜられた。作新精舎では旧藩士高野隆が訓導となって熱心に教えたので、入学する者は日に月に増加した。そのうちに新治県が廃せられて千葉県に変わり、作新精舎も県学となったが、実質は家塾で、菅治兵衛がいつさいを采配している……。

川田剛撰の碑文の前半は右のように作新精舎の由来と経過を述べているが、名称が「作新精舎」から「作新学院」に変わったのはいつであらうか。作新学院といえは、現在、栃木県の宇都宮市に同名の学校があり、自民党副総裁や衆議院議長などを歴任した船田中の父、兵吾が明治十八年九月二十八日に創立したことになっているが、両者のあいだに特別なつながりはないようである。年次からすれば、明治二年に創設された千葉県の作新学院のほうが一歩さきん出ており、菅治兵衛はその千葉県の作新学院の創設者であったわけであるが、日本弘道会との関係では、千葉県匝瑳郡匝瑳第三支会の支会長をつとめた。この匝瑳第三支会は明治二十三年四月八日設立を認可されているが、初代支会長は高野隆であった。高野隆は、すでに紹介した通り、作新精舎の訓導をつとめ、学舎の育成に功勞のあった人物であるが、間もなく支会長のポストを菅治兵衛に譲った。明治二十六年十一月三十日現在では、菅治兵衛が匝瑳第三支会長となっており、以下の泊翁書簡は、すべて支会長とし

ての菅治兵衛に宛てられている。

〔菅治兵衛宛 その一〕

拝見御申越之件逐一致承知候。老生儀来ル廿八日（日曜）朝本所一汽車に而出立、千代田支会江罷越、同夜同地へ一泊、直帰京之積に候処、御紙面之趣も有之候ニ付、吉田支会江も出席可致候。且又飯田老人骨折に而、旭町にも支会設立に相成候は、何寄之事ニ付、旭町江も出張可致候。日割等は御地に而御相談の上、可然御取極可被下候。先は貴答迄如此御座候。不具

七月十日

西村茂樹

菅支会長殿

尚々毎度貴宅江御厄介相成候ニ付此度ハ左之通取極候而ハ如何哉

二十八日

千代田泊

二十九日

吉田泊

三十日

旭町泊

三十一日

旭町出立

猶よろしく御考可被下候也。

『泊翁日記』の明治二十八年七月二十八日より八月一日までの項には、

七月廿八日 薄晴

一兼て約束ニ付今朝本所一番汽車にて千葉県へ発足、神沢佐太郎出迎ニ来る。佐倉ニ至れば千代田支会員数名出迎ふ。三里塚にて午飯、午後二時頃千代田菱田ニ着す。夫より同地寺院にて千代田支会開会式を挙げ、演説会を開く。夕刻畢り菱田ニ宿す。

七月廿九日 晴又雨

一八時前出立、同村大里にて石井桂氏を訪問し、夫より正午頃香取郡吉田村林氏の宅に達す。休憩後同村小学校にて同支会開会式を挙げ、又演説を為す。夜同家ニ宿す。

七月三十日

一朝同村を發し匝瑳郡椿海村菅治兵衛氏の宅ニ至る。樋田魯一氏東京より来会し、同村作新学校にて演説会を開く。夕刻菅氏の宅にて会員の懇親会をなす。

七月三十一日 朝雨午後雨

一朝八時頃椿海村出立、十時頃旭町ニ至る。飯田氏ニ休息す。老主人節翁氏ハ病氣にて千葉病院ニ入院、当主人佐次兵衛其外二三男并孫等追々面会。今日当地にて弘道会支会発会の都合にて午後二時より寺院ニ集會、樋田幹事初て演説、次ニ自分演説、畢て輕き懇親会を開く。万事菅治兵衛氏周旋。夜月色よろし。

八月一日 晴

一七時頃旭町出立、福岡町より島古を経て佐倉ニ至り、

四時発の汽車にて帰京。

とある。これらの記事は「その一」の内容とほとんど一致するから、この書簡が明治二十八年のものであることを疑う余地はない。病氣入院中であつた旭町の飯田節翁は匝瑳第三支会の副会長。書簡に「毎度貴宅江御厄介相成」とあるのは、たとへば二十七年九月二十七日の日記に「七時過八都村出立、十一時頃椿海村菅治兵衛宅ニ至り、午飯後同村作新学院にて演説会を開く。頗る盛会なり」などであるのと關係があろう。

なお、『日本弘道叢記』の第四〇号（二十八年八月発行）の「広告」に「西村弘道会々長千葉県出張」という小見出しで「去る七月廿八日千代田支会、廿九日吉田支会の開会式に、三十日匝瑳支会の招請に、三十一日海上郡旭町支会設立に出席、八月一日帰京、樋田幹事ハ匝瑳旭町に随行し、尚香取支会へも廻りたり」と出ている記事、第四一号に匝瑳支会の「支会報告」として「当支会ハ日清戦争後一層道徳ノ必要ヲ感ジ、益々斯道ヲ地方ニ拡張センガ為メ、西村会長閣下及ビ幹事樋田魯一君ヲ招待シ去七月三十日作新尋常小学校ニ於テ道徳ノ演説会ヲ開キタリ……」と出ている記事、いずれも右日記の記事と対応し、したがって亦「書簡その一」の内容と齟齬していない。「書簡その一」が明治二十八年のものであつた事實は、いよいよ確実になつたと思われる。

「次に

〔菅治兵衛宛 その二〕

先日は遠方御来問被下忝奉存候。扱其節御話有之御地支会連合会の義ニ付猶相考候処老生之出張は先日御話申候通六月初旬ならでは六ヶ敷有之候共樋田池田の両子ならば夫より以前に而も多分差支有之間敷と被存候。老生は昨年も御地へ参り候事此度は樋田池田の兩人に而御間に合せ被成候而は如何哉。左候て農繁に不相成内出張候様の事も出来可申と存候。依而此段及御相談候。貴答次第いづれとも取斗可申候。早々不具

三月二十三日

西村茂樹

菅治兵衛殿

尚々樋田池田兩人共出張の義は承諾いたし候。

去十六日石工来り候間、服部翁篆額下書相渡置申候也

は明治二十九年のものであらう。そう推定する理由の第一は「老生は昨年も御地へ参り候……」とあるのが明治二十八年の「その一」に該当するから。理由の第二は、『日本弘道叢記』第五二号（明治二十九年八月発行）の「広告」に「日本弘道会よりの派出員」という小見出しで

「在京会員池田謙蔵、幹事樋田魯一の両氏は、千葉県吉田、豊和、海上、匝瑳、四支会聯合会の招聘に応して、七月十一日出張翌十二日豊和支会の発会式に招聘せられ

臨席せり」

とある記事が書簡の内容と一致するからで、「菅治兵衛宛 その二」が明治二十九年のものであるのは、これまた疑う余地はない。

また、

〔菅治兵衛宛 その三〕

好時節に相成候処愈御安全奉賀候。然は老生義病後衰弱回復并リニューマチス治療之為メ稲毛村海水浴ニ罷在候処、去十五日夜俄ニ心臓ニ異状を起し呼吸迫り脉ニ間断を生じ候ニ付、早速帰京治療ニ取掛り候処、追々快方に候へ共、心臓に關し候病氣故一兩月ニハ全快無覚束と申事に御座候。就而は兼而御約束いたし置候六月下旬御地江出張之義何分六ケしく候間、折角の御約束ニ候へ共此度の義ハ御断申候。当秋にも相成、もし全快候はゞ其節参上可致と存候。先は此段申入度如此御座候。草々不具

四月廿七日

西村茂樹

菅治兵衛殿

尚々老生病氣ハ当春の腸チブスにて身体の衰弱回復せざる処へ日々兩度宛入浴いたし、夫故心臓に異状を起したることの趣に御座候。此節順天堂治療を受け罷在候。

も明治二十九年のものであったらう。なぜなら、『泊翁日記』の明治二十九年四月十二日の項に

「兼て俵麻質リネウスニて難義ニ付、今日千葉県下稲毛海水浴に為療養罷越」

四月十六日の項に

「昨夕より胸部呼吸不宣、脉ニ間断を生じたるを以て千葉病院へ罷越、診察を受く」

四月十七日の項に

「胸部の病同様なるを以て朝九時の汽車ニて帰宅」

四月十九日の項に

「二宮に診察を受けに行く。心臟異常なしといふ。全く湯中りと見えたり」

などとある記事が「その三」の内容とほぼ対応するからである。なお、さかのぼって同年二月十一日の項に「輕症の腸チフス」が報じられているが、これが書簡の「当春の腸チブス」に当たるのであろうか。

「菅治兵衛宛 その二」との関連で

「菅治兵衛宛 その四」

先日御談之義（御地へ出張之義）樋田池田兩人江申通候処六月下旬歟七月上旬ならバ兩人共差支無之趣相答申候。老生も殊に寄其節ならバ参上可致候。此段よろしく御承知可被下候。乍御面倒寺本省三郎氏江も御通知被下度候。早々不具

五月六日

西村茂樹

菅 治兵衛殿

も明治二十九年のものであった筈で、

「菅治兵衛宛 その五」

拜啓然は本月下旬か来月上旬の中御地へ出張可致趣兼而御約束致置候処、老生儀此程より眼病に罹此節療治最中ニ付、此後病氣之模様に寄り出張致兼候義も可有之候間、此段豫め申入置候。尤樋田、池田兩人ハ差支無之候間、出張可致事に御座候。草々不具

六月十四日

西村茂樹

菅 治兵衛殿

尚々寺本、渡辺へは此方より書面差出置申候也

「菅治兵衛宛 その六」

是迄度々致御相談候来月初旬御地へ出張の義、老生眼病急用同篇に而来月之出張ハ迎も六ヶ敷、其上樋田氏も農会の用向に而至急三陸地方へ致出張、是又来月初旬ニハ間に合兼候由ニ御座候。就而ハ折角之御催に而も本会より之出張者甚少候間、御地連合会ハ当秋迄御延しに相成候ては如何哉、此段及御相談候。宜敷御勘考可被下候。早々拝具

六月廿九日

西村茂樹

菅 治兵衛様

尚以渡辺操氏ハ延会之趣申越候ニ付、文通は不致候。寺本省三郎氏へは老生より直及文通候。其他ハ貴所より宜

敷御通知可被下候也。

の両通についても、同じことがいえる。なお、「老生儀此程より眼病に罹此節療治最中……」「老生眼病急用同篇」に対応する記事が、日記の明治二十九年五月三十一日の項に「風邪後眼氣不宜ニ付甲野楽氏診察受け、点眼水をもらふ」と出ている。

さらに、

〔菅治兵衛宛 その七〕

五日の貴書六日夕六時相達拜見、来十一日御開会之趣致承知候。樋田は未だ帰京不致様子ニ付、昨夜直手紙差出置候。池田は多分差支無之と存候得共、是又昨夜手紙差出置候。

老生儀は眼疾兩三日少々よろしき方に而、只今治療大切の時之趣醫者（一昨日）申聞候。夫故何分兩三日治療を休み候事は甚難儀、殊ニもし天気にも相成候は、日中の旅行は別而不宜ニ付此度は御断申候。右ニ付昨夜南摩出張之儀相頼置申候。右之次第故三人よりの返事不参内は不定ニ候間左様御承知可被下候。返事参り次第早速御通報可致候。勿畧

七月七日朝六時

菅 治兵衛殿

西村茂樹

〔菅治兵衛宛 その八〕

只今樋田より帰京の報知有之、十一日にハ出張可致と申事ニ御座候。依而此度之出張員は樋田、池田の二人に候間左様御承知可被下候。先刻南摩氏断之義御通知致置候。同人断申候趣意は別紙の通ニ御座候。勿々

七月八日午後四時

西村茂樹

菅 治兵衛殿

の両通も、やはり、「その二」との関連で明治二十九年のものであった筈で、それについてはあらためて解説するまでもあるまい。

さて、明治二十九年のものと思われる菅治兵衛宛泊翁書簡のさいごは

〔菅治兵衛宛 その九〕

水災御尋被下忝奉存候。拙家床上一尺五寸程致浸水候へ共、幸ニ無難ニ御座候。右御答御礼迄如此御座候也

東京府向島寺島村

九月廿四日

西村茂樹

菅 治兵衛殿

という内容の葉書であるが、日記の明治二十九年九月十七日の項には

「朝十時頃床上水深きは一尺五寸余に上る。此頃南葛飾一郡ハ全く水中に入る。寺嶋村近隣ハ皆家を棄て、舟にて避難ス」

とあり、葉書の文面と一致するから、「九月廿四日」は明治二十九年でなくてはなるまい。なお、十八日以後の日記によれば、以下のように「水災」は経過した。

九月十八日 朝雨、午後晴

一 水量同様、午後ニ至リ漸貳寸程引。

九月十九日 晴

一 昨日隅田村にて隅田堤を切用し、今日又桜堤の脇にて隅田堤を切用し、水を隅田川に落す。

九月二十日 晴

一 朝弘道会事務所へ赴き、午後同常集会ニ出、夕刻帰宅。
一 今夕刻初めて床上の水引く。

九月二十三日 晴

一 昨夜より街上の水退く。

なお、余白が生じたので、さきに紹介した川田剛撰「作新精舎ノ碑文」の後半を摘録すれば――

今戊寅の年（明治十一年）菅治兵衛君が東京に来て、私と会って「作新精舎ノ記」を求めた。精舎の図面を見ると、四四〇坪の地面があり、校舎がその四分の一を占め、講義

室・習字室・学算室があり、寢室・休憩室・応接室・料理場などが備わっている。庭に良木を植え、門は周道に臨み、平野に面し、背後には高い丘がある。その丘の下には豊かに稲のみのる椿湖の遺跡、いわゆる乾潟八万石がある。そして東南には大海がひらけ、風をはらんだ帆船が来去している。作新精舎の環境はそのように恵まれているが、むかし封建の世には武士が世を支配したため、下民の秀れた者は力をのばす余地がなく、自暴自棄におちいり、遊手・博徒・俠客となった。名を勤王に託して党をあつめ、乱を起こした。楠乙二のごとき、それであった。今や四民平等で、才徳さえあればいくらでも立身できる世となった。人びとは学にこそろざしてやまないが、わが菅治兵衛君は旧俗の汚れを一新すべく作新精舎を起こした。治兵衛君はその名を親和といい、椿村と号し、田畑の財産が多く、書を読む才幹にめぐまれており、十年を経、その恩沢は隣里郷党に及んでいる。そのようにその功を広告するのは君の好むところではないが、ここに石に勒する次第である。

弘道俳壇



篠塚しげる選

義兄逝く梅雨青漬けの梅の味

東京都 藤井 正夫

千葉県 鈴木とよ女

○灯台の白が目にしむ五月の海

(評)「灯台の白さが目にしむ」とは五月の晴れた日の感じ。

○きれ／＼の夢ばかり見て明易く

○ブランコに青空思いきり蹴り上ぐる

○雷はげし神燈ゆるる奥の宮

○梅雨寒し母のゆずりの小半天

巢立ちゆく校舎の窓に教師の目

団樂に新茶の香り広げけり

老鶯や山荘の夜深みゆく

朝曇り車走らす朝市へ

雷の山頂ころげ落ちにけり

老鶯の長鳴き鉤を杖にきく

青刈と知りつゝ肥料撒く青田

選者近詠

鯛網のざわめく潮に日の躍る

うす／＼と蚕飼疲れの忘れ灯か

初裕せめて心は老いまじく

松の花けぶらしく撞くや御忌の鐘

註「御忌」は法然上人の忌日

わが堆書さげすみとべる春蚊かな

○春愁や揉まれ崩るゝ堰の水

(評)「揉まれ崩れる」という表現巧み。

○脚立まだ仕舞はれてなき遅日かな

○花疲癒やす茶漬とは有難し

○一冊を蔵書に加へ春惜む

○寂しさや酔のよくききたる胡瓜もみ

○行きあひて思い出なつかし夏帽子

○五月雨の樋に垂れるる巢藁かな

庭いつか翳りしまゝの遅日かな

老の鬚剃りたる街の薄暑かな

衰へぬ心の張や更衣

新茶くむ間も時の移りおり

千葉県 田村 隆郎

○梅雨曇り古りし俳書の頁繰る

○梅雨傘の雫を切つて恩師訪ふ

梅雨冷えや焙つて鳴らす子の太鼓

平川支会総会

(千葉県)

去る六月五日(日)昭和六十三年
度平川支会総会を開催、東平会長をはじめ役員は勿論、会員多数の参加を得て

日程に沿って進行された。

総会次第

支会だより

一、開会のことば

二、会長あいさつ

三、報告

(1)昭和六十二年事業

及び決算

(2)その他

四、議事

(1)昭和六十二年年度決算

承認の件

(2)昭和六十三年事業案について

(3)昭和六十三年予算案について

(4)役員改選について

(5)その他

五、閉会のことば

●講演(研修会) 元良功先生

●懇親会

六、その他

●議長(会長)

●会計監査報告(永谷監事)

●提案(事務局)

第一部

総会の状況

先ず弘道会の果す役割の極めて重大なことを会員相互で確認し合った。具體的には、質問として

先ず本部発行の機関誌『弘道』について、「とかく現代社会で、欠落している道徳性の諸問題が、極めて適切な表現でレポートされてる。従って『弘道』を町内の中学校、図書館、公民館等に配布し、広く読んでいただきたい。特に小中学校の校長・職員には良き参考書ではないかと思ひ、議会での一般質問としたいが専門家及び会員の意見を伺いたい」これに対し、東平会長より次の回答があった。

『弘道』の内容は、日本国を憂慮し、日本民族の正しい永遠の繁栄を願った弘道会の会祖西村茂樹先生の考え方に沿ったものであり、基本的には納得の出来るものである。会長としては、各中学校、公民館、図書館等に『弘道』を送付できるよう早速に手配をとるようにした。

○また、他の会員から

「弘道会は社会教育活動であり、道徳教育振興のため、更に活動を広く展開する必要がある。議員の才量を処置して結構ではないか」

「学校教育に限らず、日本の社会全般にわたって道徳教育から逃げていく感をもつので、自信と勇気をもって弘道会の主旨及び目的活動等を推進する重要な時期である」等々の意見が出された。第二部として

会員研修会が開かれた。内容は概ね次の通りであった。

講師は、前袖ヶ浦町立郷土博物館

館長 元良 功先生

○歴史の流れの中から現代社会をとらえ、先人の体験を見のがすことなく生かすことである。そして未来の歩むべき方向を志向したい。例として武田信玄の政治的背景と現代社会について。

○村おこし運動は、そこに住む人たちが地域ぐるみで積極的に取りくむべき問題であって、手をこまねいて待つてゐるものではない。次代へどんなふるさとを（日本）残しておくか、問題意識をもって当るべきである。

○自分の郷土には、未発見の貴重な歴史がたくさんあるはずで、これらのものを大切にすることからはじめるべきである。

等々の話を伺い、出席会員感銘のうちに東平会長の感謝のことばで研修を終了した。引き続き懇親会を開き更に旧交を温めて散会した次第である。

（報告 宗政秀治）

佐倉支会総会

（千葉県）

去る七月九日（日）当支会の総会を開催した。当日の日程は次の通り。

総会次第

一、司会者挨拶

二、開会のことば

三、会長挨拶

四、名誉会長挨拶

五、来賓祝辞

六、議事

(1)議長登壇

(2)議案第一号

昭和六十二年度日本弘道会佐倉支

会収入支出決算認定について

会計監査報告

(3)議案第二号

役員改選について

(4)議案第三号

昭和六十三年活動方針について

(5)議案第四号

(6)その他
昭和六十三年年度予算について

銅像建立について協議

七、開会のことば

以上、提出された議案については、総べて原案通り可決・承認された。本年度の事業については、とくに、次の四点に重点を置き、会員全員で取り組むこととなった。

1 会員の増強。

2 祝日に日の丸を掲揚。

3 修静居跡の碑と周辺の整備。

4 修静居の看板製作。

昭和六十三年年度役員

名誉会長 菊間 健夫

顧問 堀田 正久

会長 藤方 恒二

副会長 栗生 保

田 辺 弥太郎

荒井 元吉

幹事長 石渡 敬

幹 事 青 柳 嘉 忠

〃 村 山 実

〃 川 名 部 秀 雄

〃 井 原 善 一 郎

〃 倉 次 重 一

〃 円 道 寺 茂

〃 倉 田 彰 夫

〃 斎 藤 市 郎

会 計 杉 浦 末 広

〃 田 辺 幸 男

監 査 役 穴 戸 宏

〃 服 部 忠 三

(報告 服部忠三)

干潟町支会設立総会の記

長かった梅雨も漸く明けて、久方振りに仰ぐ太陽もまぶしく真夏日となった今日八月一日(月)、宿年の念願であつた干潟町を一本化して支会を興えようと、有志で相語らつたことが愈々そ

の機が熟して干潟町支会の設立総会を干潟町中央公民館で開催することができました。

干潟町は千葉県の東総に位置しており、純農村で、過疎地域、人口は年々減少の一端を辿っています。農業問題は大きな町政の課題となつていますが、幕末のころ、極度に疲弊し滅亡寸前であつた長部村を救済し、模範村に立て

直した偉大なる指導者大原幽学先生の遺教の地としても広く知られている土地であります。先生の教えは今日なお、町民一人一人の心の中に残っており、純風美俗の町でもあります。この町は昭和三十年に、旧萬歳村と旧中和村、旧古城村の三村が合併して今日の干潟町となりましたが、旧中和村に明治三十五年南部支会が創設され、爾来今日

まで絶えることなく継承されております。旧萬歳村と旧古城村は、東部支会に所属して夫々活動してまいりました。南部支会も会員の高齢化と会員減少のため、解散寸前となり、萬歳、古城の

両地区も同様の姿を現出してまいりましたので、有志相図りまして新会員の獲得と活性化を掲げ、何とかして町を一本化した支会を結成して由緒ある弘道会を継承したい、との悲願が二年前から興りました。その後何回か会合を重ね、本部の御指導を仰ぎ乍ら、本日の設立結成総会へとこぎつけた次第であります。

今回の干潟町支会の設立に当りましては、本部から物心両面に亘り、絶大なる御指導と御支援を戴きまして会員一同衷心より感謝いたしております。なお、当日本部からは、理事であり事務局長の渡辺薫先生と藤下昌信氏がご臨席下さいました。

総会は、十四時十分に、上代光祐委員の開会の挨拶によつて幕があげられ、会場には、町長、教育長はじめ、本部から御臨席の両先生と東部支会幹事の菅谷、飯田両氏が来賓席に、そして会員計約四十名の方々が着席。干潟町支会の会員数は八十名ですが、予想以上

の方々が出席され、誠に嬉しい限りでした。

次いで日程に従い、私（菅谷栄夫委員）から設立までの経過報告をいたしました。要旨は次の通り、「日本弘道会の歴史は明治九年に遡る。永い歴史と伝統の上に今日まで脈々として継承され、日本の各界より木鐸として敬重されておりますが、仲々後継者が育たないということが憂慮されております。良き後継者のある会は、永続性があるが、後継者のない会は滅亡せざるを得ない、私共は、こんな立派な弘道会を私共一代だけのものではなく、ともに後継者を育成してその人々にバトンを渡していくべき重大なる役目が有ります。今回、東部支会の解散にともない、旧萬歳地区と旧古城地区の会員と南部支会の会員が合同致しまして「干潟町支会」として発足する所以も、歴史と伝統によって築かれた我が日本弘道会を後世に引継ぐこと、『日本道徳論』を著して警鐘を乱打した会祖西村茂樹

先生の遺志を嗣いで、今直面している日本社会の道徳的頹廃を救い、「繁栄の中の没落」を私共で防ぐことであります。会員の皆さんに特別にお願いしたい事は、一人が二人の会員を獲得して戴き度いことと、この会が本町の社会教育の核となり町民の道徳教育の先達となつて戴き度いことであります。」と具体的に経過を説明。続いて、町長及教育長の祝辞、渡辺薫先生の祝辞を頂戴して議事に入り、仮議長に上代委員を選任。（議案の説明は菅谷栄夫が担当）干潟町支会々則案の審議に入り、全員の賛同を得て決定。役員選出も準備委員会にて慎重に審議した候補者を提案して満場一致にて選出されました。初代支会長には、菅谷敏夫氏が、副会長には、高木豊氏と伊藤利雄氏が選任され、監事には、柴田徳二、宮崎精二、越川鷹男の三氏を選任する。

菅谷敏夫氏は、かつては東部支会に有つて評議員を勤められ、本会々員中の最古参で、人格識見共に高く碩学で

もあります。本会の初代会長としては最適任の方であると存じます。菅谷会長の就任の挨拶の後、会長が議長となり、三号議案の昭和六十三年度事業及予算案を審議。（菅谷栄夫が説明）この案件も全員の賛成をいたゞき、提案の三議案はすべて原案通り可決成立を致しました。次いで菅谷会長から、庶務会計と幹事の発表が有り、金杉朝光委員の閉会の挨拶で、本日の設立総会の議事は一切終了いたし、記念講話に入りました。

「日本弘道会について」と題して、渡辺薫先生の講話を拝聴する。先生は『日本弘道会要覧』を講本として、会祖泊翁西村茂樹先生の人となりから、活躍された幕末から明治にかけての業績、さらに、日本弘道会の創立から今日までの経緯と歴代会長の紹介等々で、発会式に相応しい講話をして下さいました。会員一同咳払い一つなく静聴し、改めて、日本弘道会と、会祖、西村茂樹先生の偉大なる人物像を再確認をし

たかの感がありました。

午後四時十分すべての行事が終了。

席を改めて懇親会を行いました。

兎もあれ、長い間の悲願でありました「日本弘道会、干潟町支会」の誕生を見る事が出来て、こんなに嬉しいことはありません。これからは、先輩各位の御指導を戴き乍ら、伝統をしっかりと守り、後進に働きかけて日本古来の美しい伝統を嗣いで参る覚悟でありますので、本部の会長先生始め諸先生方の御指導と御鞭撻を切にお願い申し上げます。干潟町支会設立総会の記を摺筆いたします。

(干潟町支会、庶務、菅谷栄夫記)

会 告

◎寄付者芳名

金五千円也

庄司

吳明殿(東京都)

◎会費領収報告書

(自昭和63年5月127日
至昭和63年7月312日)

1、この報を以って領収書に代えさせていただきます。

2、○印は新入会員です。
3、お名前の下の数字は会員最終年度です。

〔東京都〕

横山 正木⁶³

深津 光男⁶²

田中 正雄⁶⁴

竹内 征男⁶³

鈴木 要七⁶³

○福田 峰夫⁶³

大木 鏡一⁶³

横山 寿⁶³

安済 良一⁶³

川村 洋代⁶³

浜田 頼三⁶³

矢部 哲男⁶³

竹俣 高敏⁶³

松本 孝二⁶³

○園田 孝⁶³

山崎 吉彦⁶³

浅田 隆夫⁶³

山岡 貴⁶³

三田 三郎⁶³

堀内 政三⁶³

宗像 幸子⁶³

室谷 勇⁶³

○久我 太郎⁶³

鈴木 稔⁶³

大庭 忠夫⁶³

遠山 孝⁶³

柳沢 立三⁶³

鳥羽 貞三⁶³

田中 外次⁶³

○近藤 繁⁶³

小川 基次⁶³

野澤 正文⁶³

三浦 勝吉⁶³

山本真之助⁶³

西村 明⁷²

安瀬 忠寿⁶³

田中 辰男⁶³

上条 豊⁶³

栗田 充治⁶³

佐藤 弘毅⁶³

石川松太郎⁶³

加藤 治夫⁶³

小出 廉二⁶³

奥村 貞子⁶³

大賀 寛二⁶⁴

石渡 直吉⁶³

木名瀬敏雄⁶³

○廣川 壽夫⁶⁴

坂口 侃⁶³

○菊川 忠夫⁶³

長戸元三郎⁶³

田辺 徹⁶³

庄司 昊明⁶³

梶村 昇⁶³

高橋 吉隆⁶³

加藤 茂男⁶³

野口 宗光⁶³

木村 健一⁶³

能島 清春⁶³

柴田 孝⁶³

丸山 照雄⁶³

岡本 省吾⁶³

菅原喜代治⁶³

鈴木亀之助⁶³

安井 泰治⁶³

松下 貞子⁶³

羽金 光之⁶³

角張 繁⁶³

下山 敏郎⁶³

吉岡 信⁶⁴

長谷 静馬⁶³

○土橋 俊雄⁶⁴

工藤 裕⁶³

渡辺 正⁶³

夜久 正雄⁶³

飯吉 亮一⁶³

漁 清寿⁶³

越 英夫⁶³

河野 幸枝⁶³

日比野恒次⁶³

高橋 亘⁶³

堀越松太郎⁶³

渡邊 芳子⁶³

花岡 博⁶³

福井 透⁶³

田中 克己⁶³

○金田 和雄⁶³

平野 弘道⁶³

土屋 好重⁶³

相川 政司⁶³

松永安太郎⁶³

安西英太郎⁶³

国府田 悦⁶³

波多野鈞一⁶³

本名 進 63
籠島 誠治 63
大洞 陽一 63
田熊 理州 63
平野 章一 63
小坂 巖 63
古屋 富一郎 63
松本 秀夫 63
須田 昭太郎 63
門野 正二 63
松本 幸三郎 63
三宅 孝 63
高木 善四郎 63
中山 昌一 63
古屋 豊 63
小出 耀星 63
坂本 義鑑 63
大野 善廣 63
〔神奈川県〕
堀口 恭宣 63
武田 恒三 63
神戸 照雄 63
川久保 孝雄 63
柳部 正直 63
小笠原 肇男 63

柏木 輝夫 63
浅井 良策 63
野田 哲造 63
村重 嘉勝 63
中里 良男 63
大森 吉次郎 63
高田 敬子 63
高橋 新平 63
平林 智司 63
細谷 政弘 63
原口 徳正 63
村川 文男 64
桜井 哲夫 63
三輪 田芳子 63
藤井 正夫 63
谷井 徳光 63
大岩 真五 63

堀内 俊明 63
古田 中正次 63
和田 収 63
太田 邦夫 63
小川 増蔵 63
堤 和正 63
大内 嘉雄 63
浅水 道夫 63
菅野 惣治 63
佐伯 豊一 63
阪谷 芳信 63
田沢 一心 63
高倉 弘 63
住友 吉左衛門 63
庄司 藤太郎 63
飯島 力 63
〔千葉県〕
大木 衛 63
大久保 正 63
鈴木 仲秋 70
鈴木 普二男 63
両角 武彦 63
若菜 源次郎 63
鈴木 亨 63
雜賀 富雄 63

安彦 孝次郎 63
奥山 春彦 63
矢柴 信雄 63
吉田 忠一 63
足立 隆 63
伊豆山 善太郎 63
河合 民助 63
島根 宏明 63
中里 幸次 63
山本 直光 63
橋本 正枝 63
伊達 文蔵 63
諏訪 莊一 63
加賀 美文一 62
鈴木 格禪 63

今筒 敬三 63
大塚 一雄 63
大岩 好昭 63
平井 堯 63
池田 竹夫 63
久我 数馬 63
尾田 幸雄 63
石井 敏子 63
渡辺 廣志 63
杉本 郁太郎 63
松井 安次 63
千葉 保次 63
山田 真佐男 63
八千代 支会 一〇九名分 63
安房 支会 七三名分 63
〔栃木県〕
伊藤 義輝 63
〔茨城県〕
山崎 美智子 63
〔群馬県〕
伊藤 正男 63
〔福島県〕
長谷川 壽郎 63
柴田 司郎 63
佐藤 保文 63

吉田 徳二 64
小川 仁 63
藤田 たか子 63
斎藤 明 63
星野 志朗 63
渋谷 敬敏 63
若林 正寧 63
飛ヶ谷 定一 63
河野 信 63
小川 雅一郎 63
額賀 大成 63
星谷 悌二 64
鈴木 仙舟 63
五十嵐 徳雄 63
斎藤 浩哉 63

〔宮城県〕

中山 師治⁶⁶

〔新潟県〕

竹内竹四郎⁶³

〔岐阜県〕

○鳥居 甚吾⁶³

〔兵庫県〕

吉岡 篤三⁶³

〔島根県〕

永瀬 正成⁶³

稲田 悦朗⁶³

渡辺 晴夫⁶³

○須藤 昌幸⁶³

○林 充也⁶³

高橋 能範⁶³

岸 克己⁶³

○松本 幹彦⁶³

○野村 啓爾⁶³

◎新入会員芳名（敬称略）

昭和63年5月～昭和63年7月

（府県名）

（入会者）

（紹介者）

東京

廣川 壽夫

春山 宇平

〃

金田 和雄

入江孝一郎

〃

大岩 真五

〃

〃

近藤 繁

荒木 敏鎌

〃

久我 太郎

加藤嘉三郎

〃

園田 孝

〃

〃

土橋 俊雄

春山 宇平

千葉

花香 博

上代 光祐

井上 静雄

〃

川合雄二郎

服部 忠三

平山 亨一

〃

武藤 宏

〃

山田真佐男

入江孝一郎

庄司 厚

安田 豊作

渡辺 重雄

〃

福原 和夫

〃

安西 信雄

鈴木 勲

羽山 精二

〃

鈴木 一夫

安田 豊作

三平 勉

〃

堀江 麻男

〃

石渡 進

〃

渡辺 欣己

〃

長谷川純夫

〃

小林 進

安田 豊作

須田 和夫

〃

今宮 靖雄

〃

尾崎 昇

〃

佐野 義男

〃

高橋 成明

〃

千葉

鈴木 好雄

真田 隆久

土橋 保夫

加瀬 俊次

植松 和雄

村田 武廣

金木 賢三

田中 邦政

柴山 斉

吉田 久雄

小宮 義夫

鈴木 耕二

原田 忠生

渡辺 一義

吉見 貞男

松井 正利

福原 修

鈴木 亨

小松 雄光

安西 雅行

島津 晴久

山中 鶴雄

前原 武

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

千葉

渡辺 嘉助	神作 駿一郎	高橋 博夫	青木 清人	田島 克巳	鈴木 光男	川名 直治	高梨 武夫	福岡 和徳	富田 明	長谷川 治一	高橋 修	増田 明	永井 幸彦	岩本 和	吉田 幸昌	代田 浩二	小林 徳一	萩須 昭男	鈴木 誠	北浦 實	横山 浩	真田 三郎
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	安田 豊作	〃	〃	〃	〃	〃

千葉

鈴木 敦	尾形 弘道	鈴木 明	花田 卓治	山口 順一	川名 久義	川上 一男	大島 精一	鳥居 甚吾	島根 松本 幹彦	須藤 昌幸	野村 啓爾	林 充也
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	石原 太紀	飯塚 一雄	〃	〃	〃

訂正

前号(五・六月号)第八十六回通常総会の報告記事、松平直寿理事のご挨拶(67頁)に

「家内が六代会長酒井忠正の孫：

……とあるのは

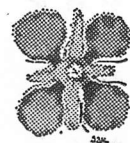
「家内が四代会長徳川達孝の孫：

……」の誤りであります。

ここに訂正し、お詫び申し上げます。

言葉の

ひろば



神奈川県 藤田 三郎

去る五月は私にとって思い出深い月でした。永らえて電気学会の席古く業績として無くも功労者にされる。五月十二日が電気学会開設以来百年に当るので、その祝賀会が帝国ホテルで開かれ、皇太子、妃両殿下の御臨席を仰ぎ願る盛会でした。

功労者への記念品は、普通の金貨より頗る大型の貨幣様のものに学会記念の文字の外にめいめいの姓名まで記載された珍らしい物で、それにネクタイ留まで添えられてうれしさ一杯です。五百頁にわたる『学会百年史』の前編

に偉大なる功績者百人の写真が並んでいます。東大で電気工学を教えられた先生方は、残らず懐しいおもかげをそろえて居られます。東大のクラスメートでは、東京電力の名社長高井亮太郎君一人、私より年下の知人も二、三見えますが、何れも故人、ホテルに集合された方に一人の知人も見当らぬのは残念至極でした。偉大なる百人の功績者中に「電力の鬼」という異名をとり日本繁栄の基を築かれた松永安左衛門先生が見出されうれしくなりました。

松永さんは九州電力を振出しに名古屋から東京へと進出され今までは「水主火従」だったが、これからは「火主水従」だと唱えられ、川崎市「海岸」の埋立地に火力発電所を建設して之を橋頭堡とし、東京電燈と需要家の争奪戦を開始したのであります。その時の社名は現在と同じ東京電力を先取りしていました。その時まで私は富士川上流の水力発電所に関与していましたが急に火力発電所建設の俄か勉強をさ

せられて火力屋に仕立てられました。

需要家の争奪戦など長引けば共倒れになるばかりですから、東京電力は、東京電灯に合併され、私は東京電灯の鶴見火力発電所の所長として残され、その後も火力発電の仕事を一統統けることになったので「電力の鬼」松永先生が一生忘れられない恩人であります。さて、帝国ホテルにお集りの方から一人の知人も見出し得なかったことは私の長寿の精にもよりましようが、私の仕事の日支事変以来東京を離れて電気事業に精励していたことにも因ると考えられます。

最後に此頃思いつづけて居ることを述べさせていたゞきます。

泊翁は明治の御代に我々に、修身のすゝめすゝめられたり。

今様に修身のすゝめされる方、弘道会にあらまほしけれ。

東大の竹内先生今様に、修身のすゝめ、すゝめつゝあり。

東大では、地球物理学を教えられた

研修旅行のご案内

1期 日 十月七日(金)

2行 先 千葉県成田市

三里塚御料牧場記念館
及び成田山新勝寺靈光館ほか

3交通機関 貸切バス一台

4集合場所 東京駅南口側丸ビル明

と時間 治屋横午前九時半

(時間厳守)

5解 散 東京駅八重洲口 午後

五時

6参加費 一名 一、〇〇〇円

(昼食は当方に用意)

7申込み ハガキに、住所、氏名

電話番号をご記入の上

お申込み下さい。

爽やかな秋の一日を、楽しみながらのバスの旅もまた格別です。たくさんの方々のご参加をお待ちしております。

竹内均先生とは面識をもちませんでしたが、もしも弘道会での講師として竹内先生の「修身のすゝめ」を、直々に聞けたらなあ、と思うことしきりです。

(本会々員)

千葉県 市原 正夫

編集・発行についての御熱意のほどが伺われます。

年間の特集テーマの設定が大切なんでしょうね。親しみ易く、読み易い『弘道』の精神を失わない、という点で御苦心でしょうね。ご活躍下さい。次号が楽しみです。

(本会々員)

神奈川県 鈴木 正一

寛先生の「日本は本来家族国家である」の記事、感銘深く受けとめました。家族制度の良い所は復活すべきであり、旧来の美風が再び国民の間に広が

っていくことを望んでいます。

(本会々員)

神奈川県 高倉 弘

執筆者の皆様方の記事をよく読ませてもらっています。その度に、すがすがしさ、ほっとするゆとりを感じ、一日のエネルギー源になっております。ありがとうございます。

(本会々員)

東京都 野澤 正文

弘道精神の普及を通じて社会道徳運動の昂揚を訴えておられることは、誠に敬服の至りであります。

さりながら、昨今の道義、教育の類廃振りは目に余るものあり、このままでは、亡国の一途を辿るのみ、これは、現日本憲法を含めて独立国家に復帰後三十六年余も経過したのに、今日なお、占領体制下の僅か六年余に日本国家弱

体化策として打出された占領政策を、殆んどそのまま今日まで踏襲している処に、今日の誤りの根源のあることに思いを致し、政財界有力者の加盟も多く、財源的にも豊かな貴弘道会こそ、もっと強力に政府為政者に対して、その衿を正して毅然たる信念を持った政治の実現を迫り、又一般国民に対しては、現状の見直しと、将来に対する正しき展望を求める一大国民運動の呼びかけのできる唯一の道義団体であると確信しております。

(本会々員)

所感

東京都 岩崎 晶

先に五月モスクワに於ける米・ソ両首脳会談にてレーガン・ゴルバチョフは双方より稍歩みよりを見せてINF(中距離核戦力)廃止に一步前進し、冷たい風が緩んで来た模様である。

敬 弔

松平直国氏（前・評議員）

ご逝去

昭和六十三年八月十七日。享年八十六歳。急性呼吸不全のため、東京都世田谷区の木下病院で逝去されました。氏は、本会第三代会長松平直亮氏のご嫡男で、昭和三十九年から六十年まで通算二十一年に亘り本会の評議員として会の発展に寄与されました。なお、今上陛下のご学友であり、学習院初等学科、東宮御学問所時代を通じて陛下と机を並べ勉学に励まれておられます。

告別式は去る八月二十日（土）東京・港区の天徳寺で盛大にとり行なわれ、本会から鈴木会長・渡辺事務局長のほか堀田理事などが参弔焼香し、ご冥福をお祈りいたしました。

さもあればあれ、六月のトロント・サミットに於て「経済宣言」並びに「政治宣言」がなされたが、レーガン大統領の米・ソ核縮についての功績を評価し、カナダの首相は「大統領を祝福する」との文言を披瀝し、西側列席者満堂の拍手を誘ったのである。

レーガンも「悪の帝国はソ連なり」との今迄の口ぐせを撤回し敵視しなくなっただけでも喜ぶべき現象である。然し乍ら、INFの撤去はほんの氷山の一角にてINF以外の軍事力については知らぬ顔の半兵衛の頬被りである。どちらも腹のさぐり合いで、若しも一旦仮りに東西両陣営が衝突することあらんか、地球の五十億以上の人類は命を失うということである。さすれば、南極のペンギン鳥とか北極の白熊以外存命は不可能である。尤も南北両極の界域が汚染され、海洋中迄に及べばペンギンも白熊も食糧皆無となりて、絶滅することは火を見るよりも明らかなり。

核戦争については今迄も多くの人々によりその廃絶要求が高唱されて来たが、実現には到底至らずして、東西各国共相対的立場に立脚して相譲らず、「抑止力」の名の下に猜疑心の擒となり、人類は遂には殺し合いの場を展開しそうになりつつあるのである。

この自明の理を「終末的大悲劇」の到来を何故悟らないのか？ 核軍勢力保有国の人々、又持たざる国の人々も常に「核軍勢力の危険性」について何度何度も繰り返し繰り返し、くどくどと提言しつゞけ論らう要があると思えます。世界の東西の核軍勢力保有国の政治当局者・指導者・識者に開眼して頂きたく茲に衷心より冀求する処であります。

（本会評議員）



編集後記

●このほど、国立科学博物館（諸沢正道館長）の開館百十周年を記念して、特別展「天皇陛下の生物学ご研究」が開催されました。（七月五日～八月七日）私も八月初めの休日を利用してつづさに拝観いたしました。大正十四年赤坂離宮に生物学御研究所が開設されて以来、六十年余に及ぶご研究の成果の一部を展示されたものであります。天皇陛下は、ご幼少の頃から動植物に対して深いご関心をお持ちになられ、とくに昭和四年からは、極めて困難といわれるヒドロ虫類（海産動物）の分類研究に大きな業績をお挙げになられるなど、全世界の学者から高い評価と限りない尊敬をお受けになっておられることは、広く知られているところであります。なお、展示物の中に那須の植物標本があり、そこで思い出したのが陛下ご自身がおまとめになったという、生物学御研究所編『那須の植物』の中で、本会渡辺事務局長のご尊父である故渡辺

喝山氏の著書（『那須野の科学』）と、氏の業績を紹介されていたことです。特別展を拝観し、生物学者としての天皇陛下の偉大なる御足跡に触れて、ひとしお感銘を深くいたしました。

●今年の関東地方は、例年に比べて天候不順の日がことに長く続きましたが、ここへきて漸やく夏らしくなり、残暑も一段と厳しさを増しております。さて本号は、銷夏号として「私の趣味」と題する特集を組みました。とくに、本会の最高齢者であり、ひたすら花柳流舞踊一筋に今なお精進されておられる木下一雄先生（九十九歳）の「芸名花柳国一弥」、会祖西村茂樹先生のご愛孫であられる神戸光子女史の「絃のしらべ」をはじめ、ご披露いただいた会員各位の玉草から、趣味こそ人の心を潤し、活性化し得る大いなるエネルギーであることを知りました。改めて御礼を申し上げます。

●去る八月二十日（日本時間）を期して、七年十一カ月も続いたイラン・イラク

戦争の停戦が発効した、という報道に、世界の人々が一様に安堵の胸を撫でおろしたと思われます。国連の軍事監視団も既に現地入りして活動を開始したということですが、どうして、隣人同志が八年もの永いあいだ憎み合わねばならなかったのでしょうか。いまこそ、国民同志の交流を通してお互いに理解し合える雰囲気をつくるのが先決であり、二度と戦火を交える愚を繰り返さないように願って止みません。

●次号では、「青少年問題を考える」というテーマで、健全なる青少年の育成について考えていくことにいたします。（藤下記）

昭和六十三年八月十日印刷 実価 二五〇円
昭和六十三年八月五日発行 年金費一、五〇〇円
編集兼 鈴木 熊
発行人 東京都千代田区神田保町三ノ一〇
印刷所 共立社印刷所
東京都千代田区西神田三一六
発行所 法人 日本弘道会
電話〇三（二六）〇〇〇九番
振替口座東京四一四三三七
郵便番号 一〇〇一

清泉女子大学教授

高橋昌郎著

人物叢書 新装版

西村茂樹 (通巻 291)

四六判 三〇四頁

定価一、七〇〇円 丁 250

定評ある吉川弘文館の伝記シリーズ『人物叢書』に取上げられている人々は、いずれも日本史を飾る歴史上の人物ばかりである。今回、洋学者であり儒学者で、現実を重視した思想家として、会祖西村茂樹先生が加えられたことは極めて意義深い。著者は、「西村の道徳教育運動は、一般人を対象とした点において、現在とくにその必要性が叫ばれている生涯教育の先例である」とし、儒教を西洋哲学の方法をもって修正して再生を図った点に注目している。また、儒教的発想や藩政を担当した経世家であり、洋学者でもある泊翁の生き方に共鳴し、高い評価を与えとともに、独自の史観によってまとめている点興味深い。

(発行所)

〒113 東京都文京区本郷 7-2-8

吉川弘文館

TEL 03-813-9151(代) 振替東京 0-244

南開大学歴史研究所助教授

おうか
王家驊著

東アジアのなかの日本歴史5

日中儒学の比較

A5判変形 三五四頁

定価三、〇〇〇円 丁 300

本書は、『東アジアのなかの日本歴史』13巻の中の第5巻であり、書中第九章第一節で会祖西村茂樹先生を取上げ、儒教思想が『日本道徳論』によって変貌し、再生された経緯が語られている。著者は、「日中儒学の比較」という課題に対して積極的な取組みを示し、日本人がどのように中国儒学を摂取したか、その受容と変容した歴史をえがき、中日両国儒学の思想内容・社会機能の相連の比較を通して、両国近代化の歩みを異ならしめた思想的要因と、日本文化の特色を究明している。この書は、中国の歴史研究者の目に映し出された日本の歴史像を知り得る画期的な企画と言える。

(発行所)

〒112 東京都文京区水道 2-9-2

六興出版

TEL 03-943-3431(代) 振替東京 1-92448